

銀髪的歌姫が恋愛初心者で可愛い

夕焼けの空

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

恋愛初心者が恋愛初心者の友希那さんとラブコメするだけの話です。

文体軽め、会話文多め、甘めの短編集となっております。どこから読んでも問題ないので好きなどころからお読みください。

単体でも読む上で問題はありますが、一応こちら (<https://syosetu.org/novel/334937/1.html>) の後日談の短編集です。興味がありましたら、是非。

目次

銀髪の歌姫が恋愛初心者で可愛い

1話	1
2話	18
3話	34
4話	43
5話	52
6話	64
7話	76
挿話	84
挿話二	91
同棲してる銀髪の歌姫が可愛い	
1話	100
2話	112
3話	124
挿話三	128
番外編	
花吹雪	136
湊友希那生誕記念（・21 10/26）	142
白丁花	150
ポートルート	165
祝言	180
ちよつとどころじゃなくて	199
プルースト・チョコレート	212

銀髪の歌姫が恋愛初心者で可愛い

1話

——すぐ隣で聞いた彼女の声が、あまりに美しかったのを覚えている。

あの日、あの冬の日。俺は駅前で愛用のアコースティックギターと共に自作の音楽を奏でていた。

昔から、音楽の才能はあつた。自分で作っておいて良い出来だと自信できるくらい自信を持った音を奏でるために、冷える空気の中でも手元のギターはその弦を震わせていた。

『その曲、あなたが?』

1時間ほど、自分の音楽を奏でていたとき。彼女の方から声をかけられてから、二人でセッションをした。

珍しかったと、今でも思う。当時の俺は、音楽家である両親にスキルを叩き込まれた。大きなコンクールで常に高成績を残した。それが当然のことだと驕っていた。

だからこそ、珍しかった。

『あなたの曲を歌わせてもらえるかしら』

『こつちからお願ひしたいくらいだ。よろしく』

普段ならつまらないと一蹴して聞く耳も持たない他人の音楽を美しいと思ったのが。

普段なら雑音にしかならないはずの駅前のロータリーで流れる歌声は、しかし一瞬のうちに俺を虜にした。

そして、きつと彼女も。

その日、お互いにお互いの音楽に魅せられた。

彼女もまた、自分の声に価値を見出していた。

銀色の髪をした女の子。

金色の綺麗な瞳をした女の子。

俺が知っていたのは、それだけ。

あの時の俺は、何も知らなかった。
名前も、年齢も、学校も、趣味も。

ただその日、駅前でセッションをしただけの関係。

歌詞のない俺の歌に、二人で作った即興の歌詞を載せて歌っただけの関係。

それが、俺と湊友希那の最初の繋がりだった。

「やっぱりこのコード……」

放課後。ライブハウスの一室で、俺はギターを抱えながら自分の作ったスコアと睨めっこを決め込んでいた。

昔から趣味の作曲は楽しくて飽きもないのだが、いかんせん自分の満足する楽曲に辿り着くまでに時間がかかるといふ欠点がある。

それに、今は自己満足で作曲をしているわけじゃないのだから尚更。

「精が出るわね」

「当たり前だろ、Roseliaが歌うんだ。中途半端に作ると誰かさんに怒られるからな」

「ええ、そうでないと困るわ」

部屋の扉を開けて微笑みと共にそう俺に声をかけた銀髪の少女は、そのまま俺の隣に座って譜面を覗き込んできた。

「このAメロのフレーズかしら?」

「そう、その指さしてるところ。ちよつと歌詞の合わせ方に無理がないか?」

「そうね、もつとここを……」

眩きながら、彼女は俺の持っていたペンを取ってスコアに書き込んでいく。

流石に歌う本人からすると作曲した俺自身とは違う目線で見られるから、なかなか勉強になる。

こうして二人で音楽を作るのも慣れたものだが、未だに新しい発見があるのは創作の醍醐味だろう。

「こういうベース、奏人はよく使うけれど、リサならもう少し速いコー
ドでもいいんじゃないかしら」

「でもここ速めると歌い辛いじゃないか？」

「……あら、私に出来ないと言っても言いたいのかしら」

「いや、そんな半目になられても……」

「私に歌えないって言ったのは奏人よ」

「……実力は信用してる。」

喉の心配してるだけで、無理しがちだろ友希那」

「……………」

「そういうわけで、ここの拍は変えるつもりはないんだけど……」

そこまで言って隣を覗くと、彼女は顔を俯け、髪から覗く耳を赤色
に染めていた。

どきり、と胸が跳ねる。

その事実が気が付きながら、努めて頭で否定する。平静を装いなが
ら、いつも通りに彼女に話しかける。

「友希那、大丈夫か？風邪とか……」

「……平気よ、少し考え事をしていただけ」

「いや、そんな顔赤くしながら言われても……」

「……この部屋、暑くないかしら」

「冷房ついてるけど」

「……………」

「あ、そうだ。もう一つ見てほしいフレーズがあって」

「はあ……構わないわ、どこ？」

「ここなんだけど……」

「ああ、ここ。そうね……変えろとしたら……」

ぶつぶつ言いながら、さらさらとペンが動いていく。

……………俺の膝の上で。

なるほどなるほど、と彼女に合わせて感心したように相槌を打つのは
もちろん現実逃避のためだ。

「……と、こんな風に変えればどうかしら？こっちの方が自然だし、私
も合わせやすいのだけど、でもそうね、もう少し変えるなら寧ろ……」

「……あのさ、友希那？」

「何かしら、この修正で大分良くなるわ」

「……ああ、そこはいいんだけど、その……」

「歯切れが悪いわね」

「いや、なんで俺の膝で書いてんだ？」

「……」

赤くなった顔を隠したかったのか、彼女は俺の膝にあるスコアをクリップボードごと動かさずに、隣から倒れ込むようにして書き込んでいた。

先ほどまでは手だけだったのでまだ良かったのだが、体ごととなると話が違う。

夏だからということ薄着なのもまずい。

具体的には体が密着していい匂いがするわ柔らかいわで、俺の理性がゴリゴリと削られてる。年頃の男子にはいささか刺激が強すぎるからやめてほしい。何が問題ってこの子見た目が良すぎる。顔真っ赤にしてるのがそれに拍車をかけてる。

「友希那さん？」

「……」

「友希那？」

「……」

「あの、そろそろ戻ってもらえると助かるんだけど……」

「……悪かったわ頭を冷やしてくるわね」

「あ、ああ……外は真夏日だけど」

「この部屋よりはマシよ」

息継ぎもせずそう言い切って俺に背を向けて退室した彼女を見ながら、ため息を吐いた。

同時に、張り詰めていた身体感覚が緩む。

可憐な容姿。堂々とした立ち振る舞い。

そしてなによりも、圧倒的な歌唱力と音楽センス。

彼女はおおよそ必要なものをすべて持っていた。

一人のアーティストとして、人を魅了するために持つべきものを。

「なんであんな顔すんだよ……」

だから、あそこまで急接近した赤く染められた頬に心を動かされるのは、ある種自然なことだ。

勘違いしそうになるだろう、と言いかけた言葉を飲み込む。

これが勘違いだとしたら、彼女は間違いなく魔性の女だ。

いやほんと、察してほしいのかほしくないのかわかりづらい中途半端なデレは初心な男子高校生の心臓にはオーバークイルすぎる。心臓がもたない。つらい。

しかもこれが通年だから殊更にたちが悪いし、なんなら同じ部屋で二、三分くらいしか話してないのにこの破壊力だから手がつけられん。

いやまあ、こう、俺から動いてあげた方が良いとは思うんだけど。

「いやいや、早とちりだろ……」

彼女からすれば、『二年間一緒に作曲してきた距離が近いだけの男子』っていうだけの可能性があるわけで。俺は今でも必死に勘違いの可能性を捨てられずにいる。

とはいえ。とはいえだ。

あの音楽以外にはまるで興味ないですみたいなスタンスの友希那が、その関係とはいえ好意のない男子にあんなことするかと問われれば……いや、やっぱ分かん。

なまじ音楽以外ポンコツだからなあの子……。異性との距離の測り方が分からないなんてありそうだしな……。これさえはつきりすればとつくに告白してるんだが。

相手の想いが不明瞭な中で『ただの音楽仲間』に告るのと『今を時めくガールズバンドのボーカリスト』に告るのは心持ちのハードルが違いすぎる。

それこそバンドを組む前に気がついていればまだしも、自分の気持ちを自覚したのがつい最近というのが、間が悪いというかなんとか。

「分かんねー……」

はあ、ともう一度ため息を吐いて、熱くなつた頬から意識を逸らす

ように俺はスコアとの睨めっこを再開した。

想い人と俺が恋愛初心者で辛い、とぼやきながら。

友希那がバンドを作ると言ったのは、お互い高校二年生に上がった頃のことだった。

あの日駅前で音楽を奏でた一件を契機に俺も彼女のお眼鏡になつたらしく仲良くなり、二人で曲を作っては歌つてを繰り返して一年を超えたあたり。

カフェテリアの一端で、彼女の吐いた言葉に一人唾然としたのを今でも覚えてる。

『え、何言ってるの』

『何って……バンドよ、バンド』

『そんなくらい分かる。そうじゃなくて、バンド？友希那が？』

『……そうだけれど。そんなに意外かしら』

『意外っていうかなんていうか……』

あの時の驚愕は今も覚えている。

一年間一緒に過ごして分かっていた。彼女は俺と同じ人種だ。

常に高みを目指して、音楽に対して妥協しない。持てる力全てを自分の音楽に文字通り懸けている精神力。

正直なところ、彼女についていける人間がそうそういるかと言われれば、俺は真っ先にノーと言うだろう。その実力は音楽業界に目を付けられるほどには折り紙つきだ。

とにかくその頃の俺は、そんな友希那に波長を合わせることできるバンドというのが、どうしても想像がつかなかったのだ。

価値観も、音楽に対する姿勢も、可能性も、才能も、実力も、彼女を構成するあらゆる要素は明らかに他を凌駕していたから。

『……バンド云々の前にさ、友希那についていける人を探すのが難しいだろ』

『？そうかしら』

『なんで疑問形なんだよ』

『少なくとも奏人は私と一緒にいるじゃない』

『……まあ、そりゃ』

『……………』

『……照れるくらいなら言わなきゃいいだろ』

『……あなたが顔赤くするからよ、そういう意味で言ったわけではないのに』

『……そういう意味って何だよ……』

『……………あっ』

そういうやりとりが、心地良かった。

そういう時間を過ごすのが、いつの間にか大切になっていた。

そう思っているのは、自分だけだと思っていた。

『しかし、そっか……じゃあもうこうして過ごしたりできないんだな』

『え?』

『いや、だってそういうことを言うために報告したんだろ、バンドのことで。バンド作るから俺の曲はもう要らないって』

『別に、そんなことはないわ』

『えっそうなの』

『私はバンドを作った後でも奏人の曲を歌いたいから』

『そ、そうか……』

『奏人も言ってくれたじゃない、私のためだからいい曲を作れるって』
『やめて、超恥ずかしいからやめて。あの時の友希那スランプで落ち込み気味だったから……』

『知っているわ、励ましてくれたんでしょ?』

『……………もちろん』

『それに。奏人から私がいなくなったら、もう今くらいにいい曲作れない、とも言っていたわ』

『それは……まあ』

『……………否定しないのね』

『……………事実だからな』

『……………』

『……………』

『……そ、それで、誰かアテはいるのか？』

『いないわよ』

『なんでさも当然のような顔してるのこの子……』

『でも、奏人が手伝ってくれるわ』

『おい何勝手に確定事項にしてんだ。俺は友希那本人じゃないから無理だぞ』

『奏人は私と同じタイプでしょう。適任だと思っただけ』

『いやちよつとこの曲作るのに忙しいから……』

『そういうつもりなら、言うわ』

『……何を』

『私がスランプ気味だった頃の奏人の様子』

『……誰に』

『まりなさんに』

『よし、すぐ探しに行こう。地下スタジオでバンドがライブしてるぞ、今日は休日だしいい人材がいるかもしれない』

『……単純ね』

と、そんなこんなで俺も彼女のバンド作りに奔走して、なし崩し的に件のバンドのために曲を作ることになったわけだが。

「別段、なんにも変わってないよな……」

バンドを作る前と同じようにこうしてライブハウスの一室で歌を作る現状に、俺は内心首を傾げながら先程友希那に修正をもらった部分をギターで試奏していた。

そんな俺の目の前に座りながら、友希那がじとりとした目線でこちらを見てきていて。

「……一応、香水をつけ直してきたのだけれど」

「あつ悪い、気づかなくて」

「構わないわ。けれど、面と向かって言われると少しは傷つくわね」

「あ、いや、変わってないっていうのは友希那のことじゃなくて、俺たちの関係っていうか……」

「関係、ね……」

ふむ、と頷きながら、それから友希那は淡く頬を染め、

「それは……何、そろそろ進展がほしいということかしら」

「いや、違う。全然違う。そういうことじゃなくて」

「そう……」

若干テンションを下げる友希那。

ていうか進展ってなんだよ。俺たちの友情だけは永遠で永劫でパーマネントなフォーエバーだってこの地球に誓ったじゃないか。まったく何を言ってるんだろうこの子は。

「リサに『そろそろ奏人ともランクアップしたら？』なんて言われたから、そういうことなのかと思っただけど……」

「おい幼馴染」

「いやほら、分かるでしょ？」

「何も分からない」

「ほら、幼馴染としては、色々と気になっちゃうの！」

「はあ……紗夜から何か言ってくれ、このギャル風ベース担当に」

「私も音無さんおとなしがどこまで考えているかは気になるのですが」

「ほら、紗夜もこう言ってるしこの話は終わり……え、今なんて言った？」

「ですから、私も気になると」

「何が」

「音無さんと湊さんの関係です。そろそろはつきりしてください」

「友希那に聞いても奏人に聞けって言われてさ」

じとり、と背中に嫌な汗が流れた。

気がつけば、ついさつき全員集合したRoseliaの5人が練習を止めて俺を見ている。

いや待て、今は練習中だろ？なんでこの子達はニヤニヤしながらこつち見てるの？そんなに余裕あるの？

おいそこの幼馴染、紗夜を味方につけたからって笑ってるんじゃない。
い。

「い、いや、今はそんなことより次のライブへの練習をだな……」

「湊さん、スケジュールは詰める必要がありますか？」

「いいえ、誰かさんが曲を作ってきてくれるおかげで時間の余裕はあるわよ」

「だってさ、奏人！」

「こんなことで完璧なチームワークを見せてくるな」

「思わずぼやいた言葉にもハリがない。」

俺は俺で、半ばこの状況に諦めているようだ。今の今まで彼女との関係を曖昧にしてきたツケが回ってきたのかもしれない。

だが、諦めるわけにはいかない。どれだけ往生際が悪かろうと、最後の抵抗をしようと口を開き――

「……………黙秘権は」

「認めないわ」

「なんで友希那が言うの……………」

そんな会話を最後に、リサが嬉しそうな笑みを浮かべたまま「じゃあひとつめ〜！」と一言。なんでこんな元気なんだこの子は。

「ずばり、友希那と二人で出かけたのは何回くらい？」

「えー、何回くらいだ……………」

「50回はあるわ」

「そんなに出かけたっけ」

「平日の放課後は此処で練習で、基本的には休日だけよ」

「まあ、そんなもんか」

「先週末行ったあのアイスクリーム屋さん、また行きたいのだけれど」「いいけど…………あれ、今週末は俺の家でダラダラするって言ってなかったか？」

「行ってからでいいじゃない、最悪奏人の家に泊まればいいし」

「どれだけ外に長居するつもりなんだよ」

「いつもの事でしょう。行く場所を決めても、結局私かあなたの家で作曲に落ち着くんだから」

「そうなった場合は俺の家な。友希那の父さんは、ほら……………」

何と言うか、友希那のお父さんは気まずい。娘に寄る悪い虫だと思われてるような気がする。まあこんな可愛い娘いたら警戒するか

……それにしたって警戒されすぎな気がするけど。結婚報告か何かだと思ってるレベルだぞあの庄。

微妙な顔をする俺に、友希那はむ、と眉をひそめる。

「お父さんは会いたがっているわ」

「……いやほら、俺は一人暮らしだから気軽に来れるし。泊まり込みなら何回もしてるから慣れがあるだろう？やっぱ俺の家で」

「そうね。そういうえば、あのマグカップちゃんと洗ってるのかしら」

「ああ、柄が色違いのやつか。安心しろ、每晚洗ってる」

「そこまでしなくていいと思うけれど」

「まあ、たしかに。でも友希那が急に来ることもあるし。あとは気持ちの問題だな」

なんせ初めて友希那と選んだ食器の類だ。今ではマグカップだけじゃなくて数種類の皿まで増えて俺の家に置いてあるけど、初めて買ったし頻繁に使うしでなんだかんだ一番愛着がある。

「とまあ、こんな感じだけど」

「……………」

「……友希那、リサも紗夜もなんかダウンしてるんだけど。疲れか？」

「そうね、最近は練習を詰めていたし。二人とも、一応奏人と買ってきたチョコレートがあるわ。糖分補給が必要なら食べてちょうだい」

「美味いんだよこれ、この前友希那と出かけた時に買ったんだけど」

「いやもうなんか、甘いものはお腹いっぱいっていうか……」

「え、どういうことなんだそれは……」

「聞いた私が間違いました。日菜に愚痴ろうかしら……」

「この前すれ違いの件は解決したんじゃ……ていうか何を愚痴るつもりなんだ」

「ちよつと、大丈夫？」

そう言つて俯く二人の背中をさすりに行く友希那の後を追おうとすると、今度は後ろから「奏人さん」と無邪気な声。

声の出どころを振り向けば、そこにはにこにここと笑うあこと、やや遠慮がちな表情を見せる燐子が。あこはその大きな目を興味に輝かせ、燐子は……なんだろう、呆れ？呆れと心配の混ざった視線を向け

ている。前者は俺に、後者はリサたちに向けたものか。待つて俺同い年の女の子に呆れられてる？なんで？

「どうした、二人とも」

「奏人さんと友希那さんってとつても仲がいいですよね！」

「？まあ確かに。俺の友人の中では一番仲がいいな。なんだかんだ付き合いも長いし」

「奏人さん……具体的に、どのくらいですか？」

「おお、答えにくい質問」

「答えにくいのね」

「いや友希那、睨まないで紗夜とリサの介抱をしといて」

背中からの声に軽口を放りながら、む、と考える。どのくらい、か。友情の尺度としてはまあ俺からの矢印は最大なわけだけど。自分の人生全部賭けるって言ったし。

「いやむず……」

「……そこまで悩むことかしら」

「いやまあ、人生単位で考えてみても友希那が居てくれればそれでいいしな……」

「うわ……」

「待つて何その顔。俺あこのそんな声初めて聞いたんだけど」

「奏人さん、友希那さんが……」

「え？……うわ、ダウンしてる人数が増えてる」

「え、友希那さん！大丈夫ですか！」

「あ、あこちゃん、ちよつと……」

「二人とも、走んなくてもいいから」

ダウンしている先輩三人のもとへと向かうあこと、それを追いかける隣子。……これは、俺は追うべきじゃないだろうな。女の子だけのほうが気も楽だろうし。一旦スタジオから出て……。

「……待たせたわね」

「復活が早い」

いつの間にか若干顔の赤い歌姫が目の前にいた。どうやら早くも落ち着いたらしい。いや落ち着いてんのかこれ……なんか五人で話

してたような気がするけど。ガールズトークには俺は参加できないから、何を言ってるのかさっぱりなんだよな。

「で、何話してたんだ？」

「……私にとつての奏人について」

「……答えにくい質問だな」

「奏人、友希那がなんて言ったと思う？」

「ちよつと、リサ」

「いや、分かんないな」

「奏人は少し考えて」

「ええ……」

目を細められても困る。困るけどでも気になる。

……なんだろう。友人としての枠に入ってるとは思うんだけど。不器用な彼女のことだから、人間関係の距離感の測り方がややバグっている可能性があるんだよな……。

むむむ、と一人考える俺の眼前、リサはにやにやとした笑みを浮かべながら友希那の背中を押すように触れ。

「奏人分からないみたいだから。友希那が言ってあげたら？」

「分かったから、リサ。奏人、あなたは……私にとって特別な友人よ」

「……」

「顔を伏せないでください音無さん」

「紗夜が厳しい」

鋭い声に言われるがまま顔を上げると、友希那の周りで皆が笑いながら会話に花を咲かせていた。

わいわいとはしゃぎながら、彼女たちはめいっばいの親しみを込めて思い思いの言葉を紡ぐ。

「じゃあ友希那、アタシは？」

「もちろん、リサも紗夜も、あこも隣子も大切な友人よ」

「友希那ー！」

「友希那さーん！」

「ちよつと……ふふ、どうしたのよ急に」

感極まったように、ばつと友希那の周りにメンバーが集まった。皆が皆笑顔でスキンシップをとり合ってる光景は微笑ましい。ここま

で彼女が慕われているのは今までの積み重ねあつてのものだ。

多くの経験を超えて、深く結びついた絆。青薔薇が咲くまでの、長い旅路。その道程を自然と思い出して、目頭が熱くなる。

「……変わったな、友希那」

「何を達観しているんですか。顔が赤いので格好つきませんよ」

「さつきから紗夜が俺に厳しくない？」

「湊さんを変えたのは音無さんでしょう」

「いや、俺が作ったのはきっかけだけだ。遅かれ早かれ皆はこうなつてた。だろう？」

「否定はしません」

「ほら、紗夜も混ざりに行けばいいのに」

「ええ、そうですね……音無さん」

「うん？」

「……私は、『大切』と『特別』は意味が違うと思います」

「……………」

「……それだけです」

微笑ましそうにそう言い残し、紗夜は友希那たちに近づいていく。

そんなこんなで時間は過ぎていった。

まともな練習もほとんどせず、ただ和気藹々と喋っていただけで……その中で、友希那が楽しそうにしていたのが印象的だった。

かつての彼女なら絶対にあり得ないことだ。彼女がくだらないと言つて切り捨てただろうものだ。

その変化を見られたことだけが、どうしようもなく嬉しかった。

二人、ライブハウスを出て帰路に着く。

空はすっかり茜色に染まっていた。

夜は冷えるからと軽くジャケットを羽織った友希那はぐつと伸びをしながら、俺に微笑みかけて。

「練習、あまり進まなかつたわね」

「ああ、そうだな。結局最後まで俺が恥ずかしいだけだったし」

「被害を被ったのはむしろ私じゃないかしら…」

「なんで友希那が恥ずかしがるんだ？」

「私はなんで奏人が恥ずかしいなんて言えるか分からないわよ」

「いや、なんで」

なんでもよ、と言葉を告げた友希那は、余った俺のジャケットの袖で襟元を掴み、目を細めていた。

その、子供のような仕草に目を奪われる。

普段は凜としていて。

バンド一つを変えられるほどに力強い声を持っていて。

歌姫と呼ばれるほどにクールな彼女が年不相応に微笑んでいるのを、俺以外の誰かは見たことがあるのだろうか。

「……夕焼けね」

ぼそりと呟かれた言葉に、慌てて思考回路を再起させる。

「……ほんとだ。今日全然作れなかったから完成は夜になるかもな」

「あまり頑張り過ぎなくてもいいのよ？ 奏人は作るペースが早いんだから」

「いいんだよ、曲作るの好きだから」

「私の為だから？」

「……………」

「顔赤いわよ」

「……………気のせいだろ。夕日が差してるからじゃないか？」

分かりやすく言い訳を並べる俺に、しかし友希那はくすりと笑って。

「見て、奏人」

つい、と指さした先には、一っだけ輝く一番星がある。

「まだ夕方なのに、ちゃんと見えるのね」

「そうだな」

「私たちも、あんな風に……………」

「なれるさ。Roseliaなら」

「そうね……………」

ぼつり、と言葉を残して、友希那が立ち止まった。

「あの星のように、何よりも輝けたらいいのに」

「……輝いてるよ。少なくとも、俺にとつては一番な」
本当に眩しいほどに輝いていると思う。

誰よりも、何よりも。

どこに居たつて輝ける、銀色の華。

俺なんかには勿体ないくらいに綺麗な一番星。

それでも、いや、だからこそ、隣にいたいと思う。

支えてあげたいと思う。

ずっとそばにいたいと思う。

「友希那」

すこしだけ大きな声で呼んだ俺に、彼女がゆるりところちらを向く。

「あの日、俺の向かいで演奏してるのが友希那じゃなかったら、俺は声なんてかけてないからな」

だから、と続ける。

「ありがとな。俺は多分、今一番幸せだよ」

そんな、馬鹿げた台詞に。

「……そう」

友希那は、その銀色の髪を茜色に染めながら前に向き直った。

「なら、もつと幸せになつたらどうなるのかしら」

「どうだろうな、甘い言葉しか口から出なくなるんじゃないか？」

「作詞もしてるんだから言葉のレパトリーは多いんじゃない？」

「それは友希那にも言えると思うんだけど」

「そもそも、もつと幸せになるにはどうすればいいのかしら」

「確かになんだろうな……相手を好きになる、とか？」

「……いい考えね」

顔色は見えない。冗談のように言い合つて、また二人で歩き出す。

心地よい空気。

沈黙が苦でない空間というのは、どうしてこうも
安心するのだろうか。

「……奏人」

「ん」

「……もしも。もしもの話だけれど。好きになったとしたら」
「……」

「……その時は。告白は、奏人からお願いするわ」

「……任せてくれ。そのくらいの甲斐性はある」

「ほんとうかしら」

友希那の隣で、不器用に歩調を合わせる。

隣り合っても、顔色は見えなかった。夕日の茜色が思っていたよりも強かったらしい。

そうしてゆつくりと——本当にゆつくりと歩いて、俺と友希那の一日は終わる。

「奏人、歩くのが遅くないかしら」

「いや友希那に合わせてるから」

「……あなたが遅いのよ」

「……確かに、ちよつと疲れてるかもしれない」

「そう。なら仕方ないわね。あなたに合わせる」

「助かる」

「気にする必要はないわ」

なんてことのない、特別でもなんでもない一日を切り取った色褪せない風景画に耽る。

きつと、お互いに思うところはあつて。俺にとつても彼女にとつても、それに慣れていいるとは言えない。だからこうして、不器用に歩幅を合わせて歩いていく。いつか、告げることができののだろうか。

伸びた影が前より重なっていることから意識を逸らしながら、すぐには難しいだろうな、と思つた。

なんせ、俺と銀髪の歌姫は恋愛初心者だから。

2話

「……………」

日曜日。心地よい陽光に晒されながら、俺は噴水の周りに置かれたベンチに腰掛け、スマホを眺めていた。

再生されているのはRoseliaが先日開いたライブハウスのライブ映像だ。

画面の中でその華奢な体から出ているとは思えないほど美しい声を出す少女の姿に、俺はただ黙ることしかできない。

ライブ当日もそうだった。

二年間、ずっと近くで聴いてきたその声の輝きは、ちつとも色褪せていない。

それどころか、年々増しているようにさえ思える。

今までで最も完成されたライブだった。

バンドの一体感も、一人一人の技術力も、全てが洗練されていた。会場の誰もが、彼女の声に魅入っていた。

それが当然のことと思えるほどに、彼女は魅力的だった。

もう、いいんじゃないだろうか、本気でそう思った。

ここらが潮時かと、そう思わざるを得なかった。

本来の彼女なら、俺が作るまでもなく素晴らしい曲を生み出せる。

俺があの日彼女に話しかけたのは、彼女と音楽を楽しみたいという我儘だったのだから。

昔ならともかく、今はRoseliaが友希那に寄り添ってくれる。

彼女達なら俺なんかよりも速く、友希那を高めへ連れて行ってくれるだろう。

だから、

『どうだったかしら、今日のライブは』

『ああ、最高だった。前回のより、もっと』

ライブが終わった後の舞台裏で、俺は彼女に別れを告げようとした。

ただの友人の一人に過ぎないのだから、別れも何もないかもしれないが、それでも距離を置かないといけないと思ったのだ。

もう、俺は Roselia に必要ではなくなったのだから。きつと、「5人」で頂点に行くことが一番大切だから。

そう告げようとした。

でもできなかった。

『……………それなら良かった』

『……………っ』

不意に俺の手に訪れた柔らかな感触と、淡い微笑と、それから紡がれた言葉に、俺は何も言えなかった。

思い出したのだ。

——『あなたとなら、2人で頂点にいける気がするの』

出会って半年ほどのこと。

俺が彼女のスランプに懸命に向き合って、彼女との距離が縮まったきっかけ。

『また、最前列で見ている。常にあなたの中の最高のライブを更新してみせるから』

『……………』

『……………見て、くれないのかしら』

『……………』

忘れていた。

そうだ。2人で行こう、と彼女は告げた。

彼女が俺を追い抜いたとしても、こうして俺の手を引いてくれるなら、俺は彼女に必死で追いつき、追い越すだけのこと。

目の前の彼女の笑顔を優先するだけのこと。

それを、俺はようやく思い出した。

『……………ああ。一緒に行こう、友希那』

『ええ……………まだ、あなたの音楽を聞かせてちょうだい』

『……………バレてたのか』

『奏人のことだもの。これで前の貯金は返せたかしら』

『……………もらってばっかだよ、俺は』

『……私も』

『ん?』

『私も、もらってばかりだから』

『……お互い様だな』

『似たもの同士だからかしら』

そう笑って、友希那と俺は手を握り合っただけだ。

『あの、友希那、手……まあ別にいいか』

『ふふ、ありがとう』

『みんながめっちゃこっち見てるけど……』

『はい、通路でいちやつかないでください』

『リサ。私たちはまだそういう関係ではないと何度言ったら……』

『いや見せつけてるでしょどう見ても』

『違うわ、これは……』

『……『まだ』なんです、湊さん』

『? 紗夜、あなたまで何を………っ』

『無意識に言ってたんだな、友希那』

とまあ、微笑ましげに笑うリサと紗夜に珍しくからかわれる友希那に癒されながら、結局俺は彼女との関係を断ち切らないという決断をしたわけだが。

「しかしまあ……」

かっこいいよな、と画面の中の彼女を見ていて素直にそう思う。

まあ、本物の彼女は、というか画面の外の彼女はこうしてスマホで見るよりもずっとかっこよかったけれど。

それに、綺麗だなあとも思う。

「すごいことだよな、これ」

かっこよくて、可愛いくて、才能に溢れていて、それで尚俺を必要としてくれる友希那は、やっぱり特別な人だろう……うん、いろんな意味で。

そんな彼女が自分の歌を歌ってくれているという事実毎度の如く笑みを溢していると、

「ごめんなさい、待ったかしら」

「おお。いや、全然待ってない。今来たところだ」

「待ち合わせの30分も前なのによく言うわ」

それも美点だけれど、と言いなながら微笑んで、友希那は俺の隣へと腰掛けた。

うーんこのすっぱり仕上げ。

雰囲気からしてクールなんだよな、友希那。バックに満月とか浮かんでそう。

これが時折可愛げを見せるんだから美人って怖いよな……。いや、普段から可愛いんだけど。こう、今はかつこよさが前面に出てるっていうか……。

「何を見てたの？」

「ん？ああ、ちよつと動画をな」

覗き込んでくる友希那にスマホを見せてやると、彼女は上機嫌そうに微笑んで、しかし目を細めてこちらを睨んできた。

「私たちのことを考えてくれるのはありがたいけれど……休日まで音楽の勉強に回すつもりかしら？」

「……さっきまではどっちかって言うとうと友希那を見てただけど」

「……………」

「あ……………」

「……からかうのはやめてもらえるかしら」

「いや別にからかつてるわけじゃなくてな……………」

「そう……………急に言われると驚くわね」

「……悪い、無神経だったか。これからは言わないようにする」

「それは……………困るわ」

「難儀な奴だな友希那は」

「もう、知らないわよ……………」

むう、と頬を膨らませる友希那。可愛い。普段クールなのに振る舞いがちよくちよくあどけなくて可愛い。

「悪かったよ。たまには言ってやるから」

「……もう少し多くてもいいのだけれど」

「そ、そうか……………」

たまにはじや足りないのか、そっか……。まったくもう、友希那さんったら欲張りなんだから……。

「でも、そうだな。友希那はやっぱ可愛いよな」

「……………それは、賞賛として受け取っておくわ」

「あー……………急に悪い。いや、なんだろうな……………普段の友希那は可愛いっていうか凛々しいって言葉が似合うからさ。リサから聞いた話じゃ俺と会う前からもずっとそんな感じだったって言うし。でも、俺と二人きりのときの友希那は凛々しくもあるけど基本的に可愛いって言うか……………」

「それは……………そうね」

まだ朱色が残っている顔で友希那はふむ、と頷いて、

「しっかりとっているように見えないと言うなら、私は多分奏人に甘えているんでしようね」

「甘えている？」

「ええ。心を許している、とも言うのかしら。リサや紗夜たちとは、また違う形で」

「ふむ」

「きつと、Roseliaの中での私はどうしても『Roseliaの湊友希那』なの。もちろん、本当の私を隠してるとかそういう意味ではなくて、いい意味で。あれも素の私だから。ただ、奏人という時は、そうね……………他にいい表現が思い付かないけれど。きつと心を許しているのだと思うわ。リサたちとは別の形で」

「……………」

「迷惑、だったかしら。そんな複雑に捉える必要はないわ、私はあなたが——」

「……………俺が、なに」

「……………」

「いや、自爆じゃん。そんな目でこっち見られても困るって。顔真っ赤だし」

「聞かなかったことにしちゃおうだい」

「無理があるだろ……………それに、あれだ。今の友希那が一番だからな。」

「迷惑なわけない」

「自爆してても?」

「自爆してても」

「そう……ありがとう」

「まあ、うん……」

それきり、二人の間に言葉が無くなった。

代わりに、そつと身を寄せてきた彼女の熱を感じていた。

そうして、しばらくじつとしていたのだが。

「……………」

「……………」

長い。

待て、いつまでこの体勢を続けるつもりなんだこの歌姫様は。ここ
街中なんですけど。

「…………いや、ここ目的地じゃないから移動しないか」

「もう少し、こうしてはダメかしら」

「えっ…………いや、そろそろギャラリーも増えそうだし……」

現在進行形で周囲の人たちからの生暖かい視線がづらい……。
めっちゃ恥ずかしい……。

「そう……」

心なしか名残惜しそうな友希那をなんとか説得して、俺たちは移動
を開始した。

『来週の日曜日は空いているかしら?』

連絡先を交換してから恒例となっている寝る前の通話にて、友希那
がそんなことを言ってきた。

『ライブも終わったことだし、出かけるのはどうかしら』

『いいな、次はどこで曲作ろうか』

『いいえ、そうじゃなくて……もう少しのんびりした』

『のんびりした曲』

『そんなに曲を書きたいのかしら。私も好きだけど……』

『いや、音楽楽しんでもときの友希那はその、生き生きして可愛いか

ら』

『……………』

『……すみません忘れてください』

『謝る必要はないわ……けれど、最近多くなつたわね。そういうこと言うの』

『あ、ああ……気持ち悪かつたら言ってくれ、すぐやめるから』

『そんなこと思わないわ。……………その、奏人に言われるのが一番嬉しいから』

『……………』

『だ、だから、そうね。これからも遠慮なく言ってもらって構わないわ』

『……あ、はい、承りました……』

とまあ、電話越しでやけに頬を赤くするやりとりもあつたものの。

『……………こほん、それで、話を戻すけれど』

『作曲しないなら何するんだ？また俺の家で料理でも教えようか？』

『いえ、今回は、その……駅前に、行こうかと思つただけ』

『駅前？良いけどなんでまた……ああ』

『な、何かしら』

『友希那、あれだろ。そこに最近できた猫カフェに行きたいんだろ』

『……………はあ、何を言うかと思えば。そんなわけないでしょう。で

もそうね、奏人が行きたいって言うならついて行こうかしら』

『で、どこ行きたいの』

『……その、猫カフェに』

『相変わらずだな……でも、なんで急に。結局作曲に落ち着くからつていつも近場で済ませてたよな？』

『ほら、お互い大人になつても音楽は辞めないでしょう？その分時間が取れなくなるはずよ。だから、二人で行ける場所を今のうちに増やしておこうと思つて』

『……大人になつた後の余暇の使い方を、今考える必要があるのか？』

『……………ないかしら』

『……………まあ、あるか』

『……………』

『照れるくらいなら言わない方がいいんじゃないですか、友希那さん……………』

『照れてないわよ……………っ！』
そんなこんなで約束が取り付けられ、今に至るわけなんだけど。

「それで」

「うん？」

「……………言うことがあると思うのだけれど」

二人並んで目的地まで歩く道中、友希那が急にそんなことを言ってきた。

「え？……………ああ、うん、服似合ってる。めっちゃくちゃ可愛い」

「……………ありきたりね」

「ごめんな、女性経験が少なくてってちよ、友希那震えてる。肩めっちゃ震えてるから」

「二応、服装はリサに見繕ってもらったから心配はしていないわ。もしかして、自分で選んできた方が良かったかしら」

「……………いや、そこは他人に頼っても問題ないだろ。むしろそうまでして可愛い服選んでくれて嬉しい。ありがとう」

「……………」

照れ臭くなりながらも、ぶっきらぼうに礼を言った俺に、友希那は目を丸くしていて。

「……………どうした？」

「別に。最近、そういうことを言うのが増えた気がただけ。何かあったの？」

「まあ心境の変化、だな」

自分が友希那の心の支えになれてることを自覚して、彼女の笑顔に応えようと思ったから。

前は下手に可愛いとか言えなかったからな……………いずれ別れる時が怖くて。

今は多分大丈夫だ。友希那が望む限りずっと隣にいる覚悟はある

し、そうでなければ潔く引く。

まあ、友希那からのデレはちよつと……いや嘘だな。大分遠慮してくれないと俺の心臓が保たないけど。

「心境の変化……ね」

ほう、と友希那は頷いてから、それからハッと何かに勘づいたような顔でこちらを向き。

「もしかして、彼女でもできたのかしら」

「はあ……」

「何、その目は。私は違う学校なのだからしようがないでしょう」

人が散々悩んでるつてのにこの歌姫様は……なんて勘違いしてるんだか。いやこれ俺が悪いのかな……。

「んなわけあるか。彼女なんか居ないだろ、どう考えても」

「そ、そう……」

ほっとしたように息を吐く友希那。

何だろうな、こうして毎週のように二人で出かけたり毎晩電話とかしてるのに他の女の存在疑うか？普通。

でも俺も友希那が変わったら他の男の存在疑うかもしれん。この子女子校だし放課後俺とライブハウスにいるのに。我ながら初心で笑えてくる。

まあアレだな、その辺は俺に甲斐性が有れば問題ない。

はあ、と俺は一つ溜息を吐いて。

「……………」

無言で、その小さな手を握った。

「つ……………こ、これは」

「別にいいだろ……一応デートなんだからこんくらい」

「……………ええ」

こくり、と彼女は頷いてその手を握り返しながら、俺にことごとく体を寄せてきて。

その真っ赤に染めながらも幸せそうに微笑む顔に心臓が止まりかけながら、お互いの顔色を見ないように歩いていた。

そうして、街中で想い人に身を寄せられるという羞恥プレイに晒されながらも件の猫カフェに着いたわけだが。

「きゃっ……ふふ、人懐っこいわね」

抱いた仔猫と頬を合わせて、友希那は機嫌よさそうに笑っている。いや……いい。すごくいい。これだけで一つの芸術作品なんじゃないだろうか。

店員さんもめっちゃ微笑ましくこっち見てるし。分かる。超分かる。友希那も猫も可愛い。

写真に撮ってコンクールにでも出せば最優秀賞は堅い。だって可愛いもん。

うむうむと一人バカみたいに納得してから写真を撮ると、仔猫たちの楽園にしゃがみ込んだ彼女は同じくしゃがみ込んだ状態の俺に微笑みかけてきた。

「ほら見てちょうだい奏人。この子、こんなに小さな手をしてるのよ。可愛いわ」

子猫を抱き、その手を持ちこちらに「えいえい」とネコパンチをしてくる友希那。

可愛い。いや、仔猫も可愛いんだけどそれ以上に友希那が可愛い。

「そうだな、俺も飼うとしたら猫がいいかも」

「いいわね、いろんな子を飼いましよう」

「いやそんな目の色変えられても……怖い、友希那、怖いから」

そんなやりとりをしながら、彼女の抱く仔猫を撫でた。

「なあん」と愛らしく鳴く猫に、俺もまた微笑みをこぼしながら言葉が続ける。

「結構好きなんだよな、猫。可愛いし気まぐれだし」

どこか友希那に似てるし。

下顎をくしくしとくすぐると、子猫は心地良さそうにごろごろと鳴いた。

しかし、猫カフェで人馴れしているとはいえ可愛いな猫。本当に飼いたくなってきた。

そうして可愛い可愛いと子猫を愛でていると、

「……………」

不意に、顔を真っ赤にした友希那がおずおずとこちらに身を寄せ、そつと肩に頭を乗せてきた。

「え、ちょよ、友希那？」

突然体が密着したことに驚きと恥じらいでいっぱいになった俺は、

「……………にや、にやーん」

そこで、猫の鳴き声を聞いた。文字の響きにするとは何ら不思議ではないものの、その出所に違和感がある。音源は猫ではなく隣の少女だ。

ちよつと待て。え、嘘でしょこの子……………猫に嫉妬してるの……………？ていうかめつちや顔赤いし……………照れてる自覚あるのに肩に頭乗せてんのか……………まじか……………。

いや、まあ拗ねてもいるけど幸せそうな顔してるしいんだけどな……………こつちも眼福だし。

「……………友希那」

「な、何かしら」

「猫耳つけよう。あとしつぽも。絶対似合うから」

「何を言ってるの？……………それは、だいぶ恥ずかしいのだけれど」

しん、とした沈黙。

いや俺のギアがおかしなことになってるのは自覚してるけど、友希那も友希那だ。こんなことして、物欲しそうな目でこちらを見つめてくる。

「あー……………えつと」

「何かしら」

雰囲気当てられた、らしい。俺たちは二人して恥ずかしさやらなんやらでかなり馬鹿になっていて、さっさと離れればいいところを、まるでなにも起きていないような調子で会話を始めた。

「……………一回だけ、抱きしめてもいいか」

「……………」

「あつ……………」

撤回。何も起きてない調子なんて嘘だった。ぽすん、なんて擬音が聞こえてきそうな勢いで顔を真っ赤に染める友希那に、やらかしたかもなんていう焦りが脳裏を横切る。

「……………」

「いや、これはその、言葉の綾っていうか……その、気にしないでくれ。可愛かったからつい……」

あたふたと弁解の言葉を口にする。でもしようがない。

何言えばいいか分からなかったし、友希那は俺から離れようとしないうし可愛いし、あの仔猫はどっか行っちゃやし、友希那は可愛いし。心の内でそう言い訳をっていると、急激に頬の熱を上げる俺の眼前で友希那も顔を真っ赤にしながら、周りを見渡し始めた。

「何してんの友希那」

「今は、店内に他のお客さんは居ないみたいね」

「……………いいの？」

「人もいないし、迷惑にはならないんじゃないかしら」

問うた俺に、彼女は恥ずかしそうに眉根を寄せながら呟いて、腕を広げた。

いや思いつきり店員さんいるけどな？という突っ込みはしない。あ、カウンスター裏に引いてくれた……店出る時お礼言っておこう。

頬どころかその耳やうなじまで赤らめて顔をふい、と背けながらも体をこちらに向ける友希那に自然と口元が緩む。

「……………じゃあ、お邪魔します」

おずおずと言つて、俺は彼女との距離をなくした。華奢な体だ。とてもあんな力強い歌を歌っているとは思えないよな。

しかしまずいな。つい愛おしさがこみ上げたから抱きしめたのに、余計に愛おしさが増してきた。

……好きなんだろうな、やっぱり。分かりきってたことだけど。とつくに俺はこの歌姫に惚れ込んでいるのだ。

「悪いな、友希那」

「悪い？」

「……ありがとな」

「……それでいいわ」

満足そうに笑って、友希那は俺の背中に回した腕の力をぐっと強めてきた。

「友希那？」

「……………」

「友希那さん？」

「……………」

「あの、離していただかないと離れられないんですけど？もしもし？友希那さん？」

「……もつと強く」

「マジですか」

「マジよ」

「……痛かったら言えよ」

言いながら、彼女の要望通り彼女の身体をより強く抱きしめた。

「こ、これでいいか？」

「背中も叩いてちょうだい」

「……………甘えるようになったな、友希那」

「あなたにだけよ」

「友希那」

「……………」

「好きだ、友希那」

「っ!?!い、今なんて」

「……………」

「……………もう」

黙り込んだ俺に友希那は苦笑してから、

「私も、好きよ」

言って、すり、と俺の首に鼻を擦り付けてくるのだった。

それから俺たちは、隣町で穏やかな時間を過ごした。

二人で友希那用のエプロンを買ったり、話題のスイーツに舌鼓を打ったり。

そうして楽しい時間を過ごしているうちに、あっという間に日が暮れていた。

「……ねえ」

「うん？」

夕暮れ時。友希那と街を歩きながら、二人で会話を続ける。

「今日は満月ね」

「そうだな。まだ夕方なのによく見えるもんだ」

「……奏人には、月が何に見えるのかしら」

「急にどうしたんだ？」

「あなたも作詞をしているから、私と違った目線があるかもしれないでしょう」

「ああ、なるほど……ちなみに、友希那は何に見える？ 兎か、カニか？ 国によっては女性の顔にも見えるらしいな」

「……月は月ね。他の何にも見れないわ」

言って、友希那は苦笑する。

「可愛げがないかしら」

「そんなことはない。友希那らしいよ」

ありのままを受け入れて、純粹にそれを深く知ろうとする。自分の主観を大切にする、彼女らしい見方だ。

「どうかしら。あなたには何に見える？」

「俺は……うん、俺も月にしか見えない」

「兎でも見たかったのかしら」

「ちよつとはな。でも見えないものは見えない。騙し絵みたいなものだし」

「……そういえば、奏人は性格が私と似ているんだったわ」

「……そりゃあ見方も変わらないわな」

「そうね」

お互いに可笑しくなって、微笑を浮かべた。

「今度は月の歌を作ってみるのはどうかしら」

「月……なんか描けるか分かんないな」

「そうかしら。どこに居ても、夜空を仰げば同じ月が見える。そういう風にも書けると思うわ」

「天候状況と時差によってはその限りじゃないだろ」

「本当に作詞をしているの？ ロマンがないわね」

半目で睨む彼女に、俺もまた半目を返す。

「ロマンとかじゃなくてだな……二人一緒の場所からなら、天候状況も時差も何もないだろ」

「……………」

友希那が、あつけにとられたような顔で足を止めた。

俺もまた足を止めて、月を見上げる。

こういう趣味をしている以上よくあることではあるが、変に詩的なことを言った後冷静になると恥ずかしくなるあれだ。

まったく、月のせいだ。

月がやけに眩しいから、俺は今の状況に不釣り合いな、詩を作るときみたいな思考になってるんだ。

茜色の空を恨めしげに睨むも、月は何も答えない。

「……………そうね」

やんわりと、俺の手を繋ぎなおしながら友希那は言葉を紡ぐ。

「確かに一緒にいるなら、いつだって見える月は同じ月だわ」

「ああ。その方がいいだろ。ロマンよりもずっと良い」

俺の言葉に、友希那は淡く微笑む。慣れないことをしたからか、どこかお互いぎこちない。自分の不器用さに辟易とするものの、彼女と一緒にならまあいいか、なんて思うあたり、思っていたよりずっと友希那に惚れ込んでいるようだ。大丈夫かこれ。告白してから数時間しか経ってないけど。早いうちに幸福度が上限値に達しそう。

「友希那？ 顔赤いけど大丈夫か？」

「いえ、一緒に月を見られるようになるのは大学生からだと思って

……………」

「え」

「え？……………っ」

「まあ、そうだな……同棲は流石に大学生になってからちよつとまで友希那顔赤くしてそんな目でこつち見ても何も変わらないから。俺は何もしてないから、自爆だから」

「……今日は調子が悪いわ」

「いつもと変わらない気もする」

「少しは気を遣うことをリサから覚えた方がいいわ」

「いや、そういうのひっくるめて俺は友希那が好きだから」

「……自爆してても？」

「自爆してても」

「……そう。ならいいわ」

そんなことを言いながら、友希那は笑みを浮かべて俺に体をぎゅうぎゅうとぶつけてくる。明日になったら「忘れて」なんて電話が朝一でかかってくるんだろうな、なんて直感に苦笑を浮かべ、俺もまたゆっくりと身体を寄せる。

同時に降ってきた沈黙に、しかしどこか心地よさを感じながら。夕闇に染まる街の中を、俺は友希那と歩み進んだのだった。

3話

「3日ぶりか……」

駅を出て独り言ちながら伸びをして、俺は久しぶりの街を眺めた。まとまった三連休だからということ一度実家に帰っていたから、そこまで久しぶりなわけではないけれど。

もう一度伸びをして空を仰ぐと、視界いっぱいには茜色が広がった。同時に、思い出す。

あの日、彼女と星を見上げたのも。

あの日、彼女と月を見たのも。

「ほんとは夜に見るもんだよな……」

俺が思うに、というか世間一般論からすればどちらも夜にするべきだったという事実にも言えない気持ちがある。

お互い初心だとそういったロマンチックな雰囲気にならないのが惜しい。……いや、なったら不味いか。俺も彼女も免疫無さ過ぎて顔赤くするだけになりそう。場酔いしそう。

まあでも、それもまとめて彼女との思い出だから悪くは無いのだが。

「……まだやってるかな、練習」

視界に映る家路を急ぐ人々と同じように、俺もまたライブハウスへと急いだ。

俺と同じように、恋愛初心者である歌姫の顔を思い浮かべながら。

「……………ん？」

駅から5分ほど歩いた公園。その端で、やけに猫が集まっているのが見えた。

一瞬あの猫好きの彼女の顔が浮かぶ。

「……………いや、まさかな。だって練習中だもんな、普段のこの時間は。そろそろまた新曲の練習してるし……」

ちよつと彼女を恋しく思っただけだ。一応今日帰ってくる旨は伝

えてあるが、音楽にストイックな彼女のことだ。きっと今頃はライブハウスで練習に励んでるだろう。

はあ、まったく俺だったら。三日会ってないだけなのに。愛が重いんだから…。

脳裏に浮かんだ予測に我ながら自嘲していると、

「にゃ、にゃくん」

うん、いた。

普通にいた。

すごい幸せそうに微笑みながら猫に絡まれてる。ていうか珍しく友希那の方が群がられてる。

「ほら、にゃーんちゃん、かわいいわね」

なんでこんな時間に猫と絡んでるのあの子。

その風景を見て疑問に思いながらも頬が緩む自分自身に苦笑が漏れる。

「ほんと、甘いなあ俺……」

しかし、久しぶりの光景だ。

3日ほど友希那と顔を合わせていなかったのもあるが、最近猫に囲まれる友希那を見てなかったからかどこか微笑ましい。

気づかれていないようだしここから遠目に眺めるとしよう。

「静かにね、みんな……はい、いい子だから……急いでるのよ……」

言いながら、笑顔で猫たちの頭を撫でている友希那。

可愛い。表情引き締めようとしてるけど緩んじゃう友希那さん可愛い。

いや、それにしてもなんでこんなに絵になるんだろうか。ただただしゃがんで可愛い猫に餌あげてるだけの美少女だぞ。……絵にならない要素がなかった。

「……………あ」

そんなことを考えてると、顔を上げた友希那と目が合った。同時にふにやりと表情を崩す。

……え。なんでそんな幸せそうに笑うの？いや、嬉しいけど。嬉しいんだけども……

軽く俺に手を振った後、彼女が餌をあげたり頭を撫でたりした猫が着々と彼女から離れていった。

そうして猫たちを見送った後、友希那は俺に再び微笑みかけてこちらへ寄ってくる。

「遅くなったわね」

「あ、ああ……その、猫はよかったのか？懐かれてたみたいだが」

「大丈夫よ、少し餌をあげたらすぐに行っちゃったわ」

「いやそうじゃなくてだな、もつと遊びたかったんじゃないかと……」

そんな俺の疑問に、彼女ははあ、とため息を吐いて、

「猫よりも奏人が優先よ」

「……………」

「……その、奏人も大切だから」

「そ、そうか……」

「……………」

おかしい。なんで今日こんな破壊力高いの俺の彼女。

「……もしかして、寂しかったか？」

「……ええ」

「……ごめんな」

「別に謝ることではないわよ」

「……。やっぱり寂しかったのか……。だからあんな顔したのか、そうか……。」

「で、なんでこんなところにいるの友希那。今練習中だろ」

「実は、奏人を出迎えようと思って」

「ああ、なるほど」

「その途中でにゃーんちゃ……猫が居たから」

「構ってたら時間になったのか」

「ごめんなさい」

「いや、問題ない。それに、まあ、出迎えに来てくれることが嬉しいから」

ありがとな、と照れ臭くなりながらも礼を言った俺に、それでも友希那は申し訳なきそうにしている。

「でも、野良猫に構ってしまうなんて。少し浮かれているのかしら」
「猫に浮かれるのか……」

ややげんなりとして問うた俺に、友希那は淡く頬を染めながら俯いて、それから首をふるふると振り、

「……奏人がいる日常に」

そう、ぽつりと呟いた。

うーん、やっぱりおかしい。普段よりギアの入り方が激しいぞ。

比例して俺の心臓の負担も大きいから是非とも止めていただきたいわ……いややっぱり止めなくていいわ。可愛いから。

「そんな浮かれるほどのものか？」

「……奏人は違うのかしら」

「……違うんです」

ぼそりと告げた俺に、友希那は淡くはにかみ、そつとこちらの指に自らの指を絡めてきた。

「でも、やっぱりごめんなさい」

「だから、それはいいって」

「良くないわよ。甘えてばかりじゃ駄目なもの」

「……なるほど」

「ええ……だから今度はちゃんと出迎えさせてもらおうわ」

「今度はないんじゃないか？」

「……え」

「あ、違う、違うからそんなこの世の終わりみたいな顔すんな。……ほら、次実家行く時は多分二人だから」

「……」

「いや、て言うより俺はそのつもりというか」

「……そう」

少しの沈黙があつて、それを埋めるように友希那が「私も」と口を開く。言われて、「……そっか」と返した。

それだけで伝わった、久しぶりの沈黙。

他の誰とも共有できない時間。

あまりにも会話に内容が無き過ぎて、お互いに顔を合わせてからは

にかんだ。

「そろそろ練習に戻りましょう」

「お、みんな待たせてるのか」

「そうよ、と言いなながら友希那は俺に体を寄せてくる。」

「……これじゃ遅れないか?」

「……一応、謝罪の意味もあるのだけど」

「返せるとでも?」

「……返せないかしら」

「むしろ得だな」

「……そう」

顔を赤くしながらも、友希那は俺の手をきゅつと握って、

「おかえりなさい、奏人」

そう、天使のような微笑みを浮かべるのだった。

『実家に帰省?』

『まあ。今度の三連休でちよつとな』

一週間ほど前に決行した友希那とのお泊まり会にて、寝る頃にそんな会話をしたのが帰省前のこと。

『いやまあ、そうは言っても三日だけだし、そこまで深刻にならなくてもいいだろ。夜の電話はするから』

『……心配はしてないわ』

『出来るだけ早く帰ってくるから』

『……そう』

安心したように息を吐いた彼女の表情に胸を撃ち抜かれたという事件はあったものの、特にアクシデントは起きず。

『……奏人』

『うん?』

『布団、入ってもいいかしら』

『いや、今ベッド入ってるじゃん友希那。どうした?寝心地悪くなったのか?』

『別にそういうわけではないのだけれど……』

『冗談。その、どうぞ』

『……お邪魔するわ』

『腕枕のオプションもつけてやろうか』

『お願いしようかしら』

『えっ』

『えって……言い出したのはあなたよ』

『即答するとは思わなくて』

普段よりずっと近い距離で向かい合いながらぼそりと呟いた俺に、友希那は微笑みながら俺の胸に額をぐりぐりと押しつけ。

『……猫かよ』

『あら、猫はもつと可愛いわ』

『そこ張り合われるとは思わなかったな……』

『猫みたいに可愛がってくれても』

『現在進行形で甘やかしてるだろ』

そんなやり取りを経て、大人しく頭を撫でられながらこちらへ身を預けてきた。

『こんなに甘えて大丈夫か』

『奏人が甘やかすからでしょう』

『……それもそうか』

『それに、今のうちに奏人を補填しとかないと』

『……それは生きるために必要なのか?』

『……必須よ』

『……』

『……』

『自分で言いながら照れるの……』

『……そう言う奏人も顔真っ赤だけど』

『いや、電気消してるのになんで顔色分かるくらい近くにいますかね』

『奏人が中々抱きしめてくれないからかしら』

『……分かったよ、歌姫様』

苦笑を漏らしながら、そっと彼女の体を抱き寄せたり。

『あつつ……寝苦しくないか、友希那』

『耐えてちょうだい』

『おい俺の快眠』

『奏人』

『ここに居る』

『……………』

『なに、どしたの』

『……こういうの、控えめにした方がいいのかしら』

『なんでだ？』

『その、眠れなくなると言うか……胸が高鳴るから……』

『……………』

『か、奏人？抱きしめられると余計眠れなくなるのだけど……』

まあ、そんな風にも増して甘えん坊になった彼女があまりに愛おしかったのだけれど。

そんなやり取りがあつたのが、ちょうど3日前のことだった。

「……………」

頭の片隅でそのことを思い出しながら、俺は目の前の Roselia のリハーサルを眺める。

その中心で力強く声を張る彼女に、先日の面影はまるで見えない。その佇まい。

銀に煌めく長髪も、白い肌も、輝く瞳も。

それら全てが、まるで非日常を切り取ったようだった。

2年もの間、忘れることすら難しいほどに瞼の裏に張り付いたはずの光景は、俺を常に圧倒していた。

端的に言えば、友希那は Roselia は、それだけで絵になつていた。

言葉を交わすことも、手を触れることもできないと錯覚すらさせるほどに。

「どうだったかしら、奏人」

だから、いつの間にか演奏を終えた彼女の声が、俺は自分に向けられたものだど気がつかなくて。

「奏人？体調でも悪くなった？」

不思議そうに、少し不安げにこちらの手を握ってきた友希那に、俺はようやく現実を取り戻した。

「あ、ああ……ごめん、なんでもない」

「無理は言っていないわね？一応帰省帰りなんだから」

「いや、ほんとに大したことじゃない。大丈夫だ」

「本当ね？」

弁解して尚不安さが解消されていないのは、俺の頼りなさか、彼女の愛の重さか。

後者だといいなあと思いながらも、俺は観念して言葉を紡ぐ。

「なんて言うか……見惚れてた。俺の恋人は美人だなって思ってた」

「……………」

「……友希那？」

「……ありがとう」

「あ、ああ……………」

三日ぶりの彼女が可愛すぎて辛い。この子こんな幸せそうな顔できるのか……。いや初めてじゃないしそういう好意を向けられるのは嬉しいんだけど、もうちよつと場所を考えてもらえると……。

すごいやりにくい雰囲気じゃん、色々。

ほら、燐子とあこ見て。信じられないような目でこっち見てる……

いや見てねえな。なんで燐子が恥ずかしがってるんだ。

「はい終了。イチャつくのは二人きりの時にしてね、友希那」

「……別にイチャついてないわ」

「いやそんな顔赤くしといてそれは無理があるでしょ……」

そんな雰囲気を感じてくれたのか友希那に絡みに行くリサ。助かる。後で友希那の寝顔写真を送ってあげよう。

そうしてリサと友希那が二人で話し始めたのを微笑ましく見ていると、

「音無さん、話があるのですが」

「紗夜から？珍しいな、ギターのパートがどこか変とか？」

「いえ、素晴らしい曲です。いつも通り。そこではなくて……」

「？」

「ライブ当日は、湊さんを見てはいけません」

「……そりやまたどうして」

「湊さんが音無さんしか見なくなります」

「……マジで？」

「マジです」

何故か恋人の愛の重さに頬を染める羽目となり。

「友希那さん、ここ最近声に張りが足りなかったですけど、今日の夕方は調子良かったですね！」

「お、おお………」

「べ、別にな変わってないと思うけど」

純真無垢なドラマーに地雷を踏み抜かれ、二人して恥ずかしくなったりしたのだが。

「……………」

「……………」

そんなことお構いなしと言わんばかりに、練習中だろうと視線を合わせて照れたようにはにかむ彼女に胸を撃ち抜かれながら、俺もそれに応えて微笑みを返すのだった。

4話

『ごめんなさい、今日は少し遅れるわ』

放課後、いつものようにライブハウスのカフェテリアで友希那を待っていると、彼女からそんなメッセージがチャットアプリに飛んできた。

『わざわざ集合時間を早めたのに本当にごめんなさい。ちゃんと埋め合わせはするから』

「気にするなよ、と」

彼女が気負わずに済むよう返信してから、ふうと息を吐いた。

生真面目な友希那が遅刻なんてのは、外せない急用が出来たとか R o s e l i a やその他の他の友人と出かけるとかに限られるのだ。

俺にそれを邪魔する権利もなければする気も全くないから、落ち込んでいても仕方がない。

そう、仕方がない。それは理解しているのだが。

「だけどなあ……」

頭で理解している一方で、思いのほか俺の気分の落ち込みは激しかった。ほとんど毎日顔を合わせているからか、思っていたよりずっと彼女と会うルーティーンに楽しみを抱いていたらしい。

とはいえ誰も悪くないので誰かを責めるわけにもいかない。なんとなくやるせなくなつた俺は小さく肩を落とした。

「……はあ」

軽くため息を吐くと、偶然にも落胆の声が重なった。後ろのテーブル席からだ。

不謹慎ながら親近感を覚えながら、何気なく視線を向けた先。

「あれ、音無さんじゃないですか」

「……ああ、美竹さんか」

そこには、黒髪に赤メッシュを添えた『反骨の赤メッシュ』こと美竹蘭が俺と同様に肩を落として座っていた。

「どうしたんだ？そんな声出して」

「いえ、練習する予定だったんですけど予約の時間を一時間ほど間違

えてて……というか音無さんの方こそ。何かあったんです？そんなに気落ちして……湊さんいませんですけど」

「ちよつと待て、なんで俺と友希那がセットの前提なんだ」

自然と告げられた言葉に反論を返す。

最近是这样い勘違いが多い。

別に俺と友希那はいつも一緒にいるわけじゃない。お互いに一人の時間が欲しいこともあるし、それをお互い理解しているから。

ていうか今ならまあ分かるんだけど……彼女と付き合い始める前からもちよくちよくそういう勘違いをされてたのは謎だ。

「この前だって。一人で予約取りに行ったらまりなさんにめちやくちや驚かれたんだよ。一人で予約とろうとしたら『喧嘩したの!』って。俺だって一人でスタジオ借りることもあるのに」

「……………」

「何その顔。当たり前でしょみたいな顔しないでくれ美竹さん」

「あの、無理があると思うんですけど」

「はっ」

「湊さんと付き合ってるんですよね？」

「…………いやまあ、そうだけど。何だよ、別に公共の場でイチャイチャとかしてないぞ俺たち」

「してます」

「してないって」

むむむ、と顔を強張らせる美竹さん。

その凜とした表情に、思わず言葉を詰まらせる。

いやほんと美人って得だよな……こんな顔しかめても可愛いんだからすげえわ。近頃のガールズバンドの子たちはみんな可愛いかな……まあ、友希那がとびきりで可愛いんだけど。あくまで個人的には。

「やっぱり心当たりないんだけど。特にAfterglowの前でなんて手も繋がないぞ」

「…………本気で言ってますか？」

「…………ちよつと考えさせて」

俺も友希那も、人前でイチヤイチャするバカップルになりたいわけじゃない。その分家とか二人きりの時は甘えてくるし甘やかすけど……え、これが見られてたつてことか？

急にわたわたと慌て出した俺を前に、目の前の赤メツシユははあ、とため息を吐いて。

「別に、音無さんたちが手を繋いだりしてるところを見たわけではないです」

「イチヤついてないじゃんか」

「……この前のライブですけど」

「はあ」

「終演後のフロア、覚えてますか？」

「まあ、覚えてはいるけど」

急に声のトーンを変えた美竹さんに、頷きを返す。

確か目の前の赤メツシユ含めたAfterglowの面々がRoseliaと衝突した件だったか。結局双方のファンも増えて、お互いのバンドを認め合うという円満の結果に落ち着いた大成功の2マソライブになった記憶がある。

「……あ。そういえば、二回目のライブの曲は音無さんが作るって皆さんに聞いたんですけど」

「ああ、メインのメロディーとパート分けは出来てるぞ。取り敢えず三曲くらいできたけど、後でデモ送るよ。お気に入りのフレーズがあったら教えてくれると助かる」

「あ、ありがとうございます。早いですね、是非……って、そうじゃなくて！」

ドン、と勢いよく手を突いて、彼女は語気を荒げながら俺を睨んできた。

女の子のすることにしては力強いが、彼女に限っては魅力にさえ映るのだから大したものだ。

「あの時の湊さんー！」

「フロアで言い争ってる時の？」

「そうです」

「そんな変わったことなかった気がするんだけど」

言つて、思い出す。目の前の彼女が友希那たちRoseliaに見下されてると勘違いして、勝負を吹っかけてきたあのライブ。

その時の事だろうけど……なんだろう、強いて言うなら友希那がやけにこつちを見て微笑んでたことぐらいじゃないだろうか。

「それです。その、あたしが勘違いしてたのが悪いですけど……二人で目を合わせて笑い合ってから勝負を受けたじゃないですか」

「いやまあ、うん。て言つても、ただのアイコンタクトだろう、あれは。イチャつきに入らないんじゃない」

「あのタイミングで湊さんの意図が伝わってたのは音無さんだけでしたよね」

「あー、そうだったかも」

「それです」

「ん？」

「その滲み出る『通じ合ってる』感がイチャついてるってことなんです」

「理不尽だ！」

さも当たり前のように言い切る美竹さんに思わず声を荒げる。

全然話を通つてない。助けて早く来てくれ友希那。俺じゃ美竹さんの相手は分が悪い。経験弱者はこういう時に弱いんだ……美少女相手ってメンタル削られるから。悲しい。

「……何その微妙な反応」

「いや分かった。俺が友希那とセットなのは納得する」

「折れるのが早くないですか？」

「まああながち間違いじゃないし」

特に最近なんて友希那と一緒にじゃないことの方が珍しいかもしれない。休日は二人で出かけたたりするし、ライブハウスの予約がない日もRoseliaのみんなと遊んだりしてる。

この間のトコナツツパークとか楽しかったな。友希那も終始笑顔だったし、みんなで水遊びをするのは思った以上に楽しいものがあった。

まあアレだな、俺の彼女は水着でも可愛いつてことが証明されたのが一番良かったけど。美人つてのは何着ても似合うんだから。

そうして友希那の水着姿を頭に浮かべながら先日の思い出に頬を緩ませていると、

「……それで」

「うん？」

じと、と目を細めてこちらを睨む美竹さんが口を開いた。

「その、なんで湊さんはいないんですか？」

「ああ、何か用事があるらしくてな。今日は遅れるんだと」

「へえ……」

「何だ？気になるのか？」

「まあ、そうですね。『一応』ライバルなので」

「……友希那は不器用などこあるから。許してやってくれ」

「いいですよ。気にしてないので」

そう言いつつも、美竹さんは頬を少し膨らませながらふい、と顔を背けてしまう。こう、素直じゃないところとか友希那に似てる気もしくなくもない。本人に言ったら微妙な顔されるんだろうけど。しかしそっか。彼女にとつては友希那の「あなたたちは一応ライバルよ」発言がいまだに尾を引いているらしい。

「友希那だつてちゃんとAfterglowはライバルだと思ってるからさ」

「……そうですか」

俺の苦し紛れのフォローもバツサリと切り捨てる赤メツシュ。

うーんこのツンツンボーカル。どうしたもんかね……。取り敢えずこの前みたいな『RoseliaがAfterglowを見下している』つていう勘違いは解けてはいると思うんだが。

ていうかこの空気は気まずい。めちゃくちや居心地悪くなる。俺は美竹さんに対しては苦手意識はないとはいえ、彼女からしてみれば一歳年上の男だ。多少なりとも忌避感が……。いやどうだろ、あんまり気にしない気もしてきた。

「あの、音無さん」

なんと言って空気をよくしようか、なんて一人考えていると、恐る恐るといった様子で美竹さんが話しかけてきて。

「音無さんはどう思ってるんですか？」

「何がだ？」

「その……Afterglowのことです。いいバンドだと、そう思ってますか？」

「ああ、思ってるよ。間違いなく、Roseliaに並べるレベルのバンドだ」

俺にとつての一番はRoseliaだけど、と。不意の質問につきかかりながらも、答えを口にする。

その言葉に嘘偽りも気遣いも無かった。

ただ、脳裏に浮かんだ彼女たちの姿が。頭の中で思い出される音楽が、そう口に出させたただだった。だからあくまで自然に。当たり前前このように答えた俺に、美竹さんは目を丸くして。

「…ありがとうございます」

それから、安心したように息を吐いた。

「一度、音無さんがどう思ってるか聞きたかったんです」

「どうして俺に？」

「この前、湊さんと話したんですよ。『自分の歌が好きか』って」

「それで？」

「私は勿論好きだって言ったんですけど。湊さん、なんて言ったと思いますか？」

「多分、はつきりとは言えない、とか言ったんじゃないか？」

容易に想像できる台詞に苦笑いしながらも、そう答える。

2年前。俺が友希那と出会ってすぐの頃。自分の音楽が好きかと、俺が彼女に尋ねた時。

『好き……とは多分言えないわね。今の私の歌は、お父さんを追いかけてるだけだから』

悩ましげな、不安そうな表情を浮かべて、彼女はそう答えていた。

だから、その答えは今でも変わっていないと。そう思っって質問に応えたのだが。

「違いますよ」

問うた先で、美竹さんは彼女に珍しく淡い微笑を浮かべて。

「Roseliaのみんなで、音無さんの歌を歌う時が好きだって、湊さんはそう言ったんです」

「――」

告げられたその言葉を聞いて。

不意に、視界の中で銀色の髪が煌めいた。

ちようど、あの時と同じようにカフェテリアに姿を見せた友希那だ。

そう、あの時。1年前、彼女のスランプに向き合った時。

それを思い出した、刹那。

『……私はあなたとの歌、好きよ』

『そうね。あなたと歌を歌っている時は、本当に楽しい』

春風のように、いつかの記憶が脳裏を横切った。

『ずっと、分からなかったわ。何のために歌っているのか。……でも、ようやく答えに辿り着けそうな気がするの』

自分の歌う音楽に疑問を抱いていた、遠い日の少女。

……ああ、そうか。

友希那はこんなにも、俺との音楽を……。

「音無さん……う？」

「……ああ、いや」

不思議そうに、というか心配そうな顔をする美竹さんに、俺はふるふるとう首を横に振って。

「友希那は、自分の歌を好きになってくれたんだな」

その一言に、どんな思いが込められているのか分からなかったのだろう。

きよとんとした顔をする美竹さんを見る……ああもう、くそ、視界が滲んで輪郭も朧げになってきやがった。

「ちよ、ちよっとなんで泣いてるんですか!?!」

「なんかうるつと来ちゃって……」

「これじゃまるで私が泣かせたみたいじゃないですか……」

年下の女の子の前で涙を流してしまったという事実にも、照れ隠しの意味も込めて慌てて袖で目を拭おうとしていると。

「——何をしているのかしら」

そんな、凍てついた声が差し込まれた。

「み、湊さん」

「こんにちは、美竹さん。どうして奏人が泣いているの？」

いつの間にか俺たちの横に立っていた友希那は、そう言葉を告げて。

「……………」

絶対零度もかくやと思わせるような目線で美竹さんを睨んでいた。なるほど。これアレだ。美竹さんが俺を泣かせたと思ってるやつだ。

いや間違いじゃないけど。俺そんな年下の女の子に泣かされるように見えるかね……………」

逆に言えば俺が心配されるくらい想われてるってことだから喜んでもいいとは思うんだけど……………」とりあえず誤解を解かないと。

「あー友希那、これはだな……………」

若干自分の頼りなさに苦笑を浮かべつつも、涙を拭ってから友希那に話しかける。

「ちよつと良い話聞いただけだ。こう、なんて言うんだろうな、報われたっていうか」

「……………」美竹さんに泣かされたわけではないの？」

「いやそんな頼りないか、俺……………」

「ふふ、冗談よ」

そう言ってくすりどきながら、友希那は美竹さんに視線を移した。

「驚かせてごめんなさい、美竹さん」

「いえ、平気ですよ」

さすが反骨の赤メツシユ。さらりと友希那の謝罪を流して……………」おいなんでもこの子は微笑ましそうに笑ってるんだ。なんでちよつと生暖かい目で俺を見るんだ。そんな優しい目できたの君。それは今俺

に向けるべきじゃねえぞ。もっとお父さんとかに向けてあげなさい。
「それで、奏人とどんなことを話してたのかしら。なぜ泣いてたか気になるのだけど」

「ちよつと友希那さん傷口に塩塗るのはやめて」

「ああ、それは……」

「おい言うな赤メツシユ今度なんか奢るから」

「気にしないで、美竹さん。何を言ってたの？」

「ええと……湊さんが音無さんの歌が好きだつてこと言ったら急に……」

「……………」

「……………」

不思議そうに尋ねていた友希那は、しかしその言葉を聞いた直後、スツとスイッチでも入れたかのように頬を真っ赤にした。

「そ、そう……私のことだったのね」

「いっそ殺してくれ……」

「私のことで泣いてくれたのでしよう、悪い気なんてしてないわ」

「いやこう俺の羞恥心的にだな……」

「……………むしろ嬉しいから。安心してちょうだい」

言いながら、照れたように指を組んでもじもじとする友希那。

ああもうほら美竹さんの前だから平静を保とうとしてるけど口元緩んじやつてるもんこの子。

嬉しそうでいいな友希那……俺は恥ずかしさで死にそうです。

「……………ほんと、お似合いですね」

遂に両手で顔を覆った俺と、未だ照れている友希那を見てため息を吐いてから、美竹さんはその甘ったるいであろうコーヒを口に運ぶのだった。

5話

◆?

「終わったー！お疲れ、友希那」

「お疲れ様、リサ。けど、そんなに気を張る必要があったのかしら」

校舎を出た途端に賑やかしくなったりリサに苦笑を漏らしながら、その言葉を返す。

今日は定期テストの最終日。この時期のテストということで、確かに真剣な表情で先ほど終わったテストについて話している生徒が見受けられた。

「あーもう友希那は……興味無いって言ってるけど、勉強は……って
いうか大学は大丈夫なの？」

「平気よ……今年からは成績もそこまで悪く無いもの」
「えっ」

「？なにを驚いているのかしら」

「いやいや、友希那が勉強？音楽以外興味無いとか言ってたのに？」

「……別に。すこし考え方が変わっただけよ」

「考えが変わった、ねえ……」

私の言葉に返事をしてからむむむ、と考えていたりリサは、やがて。
「もしかして……」

その顔をニヤニヤとしたものに変えてから。

「奏人の影響？」

「……」

「うわく当たりか」

「……悪いかしら」

「全然！むしろアタシ嬉しいんだ」

「嬉しい？」

微笑ましくこちらを見つめるリサに疑問を返す。

……別に、奏人だけのおかげではない。その、Roseliaのメンバーに心配されては私本人としても頑張る必要性があるというだけで決して彼との将来を夢見ているわけではなくていや夢見てない

と言ったら嘘になるけどでも今はバンドとしての活動に支障を出したくないからやってるだけで。

「あはは、二人とも分かりやすいね〜」

「……別に、なにも言ってるわいよ」

「だって友希那の表情が幸せそうだから……」

「……………」

「そうそう、でもアタシはそういう変化も嬉しいの」

私が内心あたふたとしているのを見越してか、微笑を浮かべたりサはそう言つて、大きく息を吐いて。それから立ち止まった。隣を歩く私も、それに合わせて足を止める。

「覚えてる？初めて友希那と奏人のセッションを聴いた時のこと」

「……覚えてるわ。ちょうど、Roseliaを作ろうとしていた時のことよね」

私の方を向かずに放たれた問いにそう頷きを返せば、リサは苦笑を漏らした。

覚えてる。奏人の存在に納得がいかない、と反発してきた紗夜に、彼がRoseliaに必要なということを確認しようとした時。

あの冬の日のセッションを再現した日。

「そう、そのとき。……友希那と奏人のセッションを聴く前はね、アタシは多分悔しかったの」

「悔しかった？」

「うん、悔しかった。友希那の親友はアタシで、友希那が音楽を楽しめるように幼馴染のアタシが何かする……それが当たり前だと思つた」

「？リサだって、あのフェスのライブで私に音楽の楽しさを思い出させてくれたじゃない」

「そうなんだけどさ……その、あの時の友希那たちを見て、アタシは昔友希那と友希那のお父さんがセッションした時を思い出したの」

「……………」

「そのくらい、あの時の友希那は楽しそうだった。それまで音楽に追い詰められてた友希那じゃなかった。お父さんの影を追うだけの友

希那じゃなかった。……ちゃんと、心の底から楽しんでいたでしょ？」

「……ええ、そうね。楽しかったと、そう言えると思うわ」
確かに、楽しかった。

あの頃から、彼と二人の音楽が。歌を歌うことが楽しかった。だから今、私はここに居る。日々のライブで充実感を得て、音楽を楽しんでいる。

「それでさ、そんな風に友希那を変えることができた奏人が羨ましかったし、悔しかったんだ」

「そんなこと考えていたのね」

「だから、アタシは嬉しい」

「どういうこと？」

「友希那が奏人っていう良い人と出会えて、恋をして。それで変わってくれたのが嬉しいの」

そう、寂しげな顔をしてリサは言った。

一体。

一体その言葉と揺れる瞳に、何が込められていたのだろう。

彼女自身が私の支えになっていないとでも思っているのか。私が変わったのは奏人だけのおかげだと思っているのか。

「違うわ」

「……友希那？」

だから、否定する。リサの幼馴染として。Roseliaのボーカリストとして。私が変われたのは彼の存在だけじゃないのだから。

「リサ、あなたはRoseliaのベーシスト。私の幼馴染。何も心配することはないわ。だってあなたの居場所は、ちゃんとRoseliaにあるから」

「……………」

「だから、安心して。私たちはリサがいなければ成り立たないわよ」
「……そっか」

「私を支えてくれるのも、ベーシストとしての役割も、練習の合間のクッキーも、その全部がリサじゃないと成立しない。だから……そう

ね、これからもずっと一緒にステージに立ちましよう?」

そう言うと、リサは急にその頬を赤く染めて。

「わ、分かった分かったから友希那!褒めすぎだって!」

「そうかしら。当然の評価だとおもうけど」

照れたように笑いながらバタバタと顔の前で手を振り始めた。

「どうやらリサは褒められることに慣れていないらしい。私としては特に気を遣ったつもりもないのだけれど。」

幼馴染の年相応の照れ隠しに思わず頬が緩む。

「つよし!元氣出た、友希那、今日はこの後練習だよね?」

「ええ、そうね」

「じゃあ早く行こ、アタシ早くベース弾きたいな」

「ふふ、急いでもライブハウスは逃げないわよ」

そんなことを話しながら高校の敷地を歩いていると、

「?何かしら」

ふと、周囲が妙にぎわっていることに気がついた。

「ねえ、見た……?」

「うん、すごいイケメン……」

「誰か待ってるのかな……」

道行く女子高生は皆、ひそひそと顔を見合わせている。

「なんの騒ぎかしら……」

「分かんないなあ……ちょっと聞いてくるね〜!」

颯爽と話しかけに行くりサ。こういうコミュニケーション能力は

本当に尊敬する。

数人に聞き込みをして、戻ってきたリサ曰く。

「なんでも、正門前ですごいイケメンが人を待ってるんだって」

「イケメン……また随分抽象的な表現ね。ともかく、私たちには関係のないことだわ」

「まあ友希那には奏人が居るしね」

「……からかわないでちょうだい」

「まあまあ、事実なんだし」

「恥ずかしいものは恥ずかしいの、よ……」

「あれ？どうしたの、友希那？」

「いえ……」

なぜだろうか。すごく嫌な予感がする。

「ま、一度正門を通らないといけないから。ギャラリーが増える前に通過しちゃお、友希那」

「そ、そうね……」

直感から裏門に回れ右したくなった私の手を取って、リサはぐいぐいと引っ張ってくる。こうして引っ張ってくれるのはありがたいけど、今だけはむしろ悪手な気がする。

そうしてやってきた先。

「……………」

「うわあ……」

感嘆の、というか呆れの声を漏らしたのはリサだった。

正門の周りを取り囲むかのようにして集まった群衆は、その雰囲気故か話しかけることができず、正門の端に立つ彼を見つめている。

そして、当の本人は、というど。

「……………」

そんな周囲の状況が目に入っていないかのように、イヤホンを挿してぼーっと遠くを見て立っていた。

というか私の恋人だった。

異常に目立ってる……女子校だから男子が珍しいというのも原因、なのかもしれない。

そもそも彼は何をしているのだろう。自分の格好良さが分かっているのかしら。

まあ、その……自分の容姿を褒めるような人が少なくて、しかも周りにリサ、紗夜、燐子、あこなんていう容姿の良い子達に囲まれていたらその辺りの意識が低いのも頷ける。

……彼は私が一番だと言うけれど。その辺りはこの際置いて。

「え、何で奏人がここにいるの？」

「……………」

もしかして、と昨日の記憶がフラッシュバックする。

「友希那？」

「昨日、電話で勉強のご褒美を頼んだのだけれど」

「へえ……………えっ？」

「何よ」

「えくと、いやいや……………」

「？」

「友希那もすっかり惚気ちやって……………恋の力ってすごいね……………」

「何、リサ。よく聞こえなかったのだけれど」

「あはは、まあ聞こえなくてもいいかな……………」

「？それで、放課後一緒にライブハウスまで行きましょうって提案したわね」

「それだけ？」

「それだけよ？」

「奏人からは何か言われなかった？」

「そうね……………ああ、甘い物の好みとかは聞かれたけれど」

「……………」

「あとは確か、どこに行きたいかと聞かれたわ」

「……………」

「ちよつとりサ、急に顔を覆ってどうしたのよ」

「……………ちなみに友希那はなんて返したの？」

「その、奏人と一緒なら……………待って、これ言う必要ないわよね。何を言わせようとしてるのりサ」

「そっか……………もう二人……………青春だね……………」

うんうん、と一人頷きながらしみじみとするリサ。私に恥ずかしいことを言わせようとしていたのに何故か彼女の頬が赤い。……………どうしてかしら。

「……………それでどうする？友希那。裏門から出る？」

「そうね、このまま合流すると面倒なことになりそうだわ」

奏人には悪いけど、あの群衆の中で合流するほどの勇気は私には無い。

リサの囁きに頷きを返し、あとで連絡をして謝ろうかしら、と背中

を向け踵を返そうとしたところで。

「あ、友希那さん。これ何の騒ぎですか？」

おそらくクラスの友人と話していたのであろう、Roseliaが誇るドラマーが校舎から姿を現した。

そして、私が誤魔化す間も無く私たちの背後に目を向けて。

「あ、奏人さん！」

「あつ、ちよつとあこ……」

紛れもない善意から。大きな声を出して彼の名を呼んでしまった。それはつまり、ぼーつとしていた奏人が私たちの方を向くというこ
とで。

「……う・えつと友希那、これは一体どういう状況で……？」

私たちを発見すると同時に周りの状況を察したのだろう。戸惑いの色をその顔に浮かべながら問うてくる奏人。

周りの視線が痛い。ここにいる全員が私を見ているんじゃないだろうか。

最早こうなってしまったては仕方がない……そう、仕方がない。

「はあ……」

一つため息を吐いて、側まで行ってから少し強引に彼の手を取る。私より大きい手。いつも通り温かい。後ろが少し騒がしいけど……まあ、関係ない。

「……早くライブハウスに行くわよ」

「あ、ああ……」

頬の熱が上昇するのを自覚しながらも、そつと握り返してくる彼の手の感触に心地よさを感じて。

苦笑いを浮かべるリサと、それから未だに自分が何をしたか分かっていない顔をするあこと共に、好奇の目に晒されながら私たちはライブハウスへと歩を進めるのだった。

◆？

「すみませんでした……」

「そこまで落ち込まなくてもいいわ。悪気があったわけでもないのだし」

「あこちゃん、元気出して……友希那さんも……こう言ってるし……」
あの騒動から少し経ち。

俺たちは合流を経て、ライブハウスへの道のりを歩いていた。

すっかりしよぼり闇の力放出系少女となってしまったあこに、先ほど合流した燐子も友希那と共に慰めの言葉を掛けていた。

うん、アレは俺にも一端の原因があるからな……。全然あこが悪いなんて言えないんだけど。おかしいな、俺あんなにモテたことないぞ。彼女ができた後にモテ期到来か？……要らなすぎるな。

「それで、奏人」

「その、すまん。あんな騒ぎになるとは思わなかったって言うか……」
「いえ、別に責めてるわけではないわ。……昔私も同じようなことをしたし」

「いやまあ、あれはそうだろう。友希那みたいな可愛い子が来たら男子だろうが女子だろうが騒ぎになるんだって」

そう、俺と彼女の初の放課後デートは波乱の幕開けだった。

『急に出現した銀髪美少女が門の前で人を待っている』と噂を聞いて、行ってみれば群衆が遠巻きに鼻歌を歌う友希那を見ていたのだから。

いや、凄かったな……俺に気付いた瞬間名前呼びながら近づいてきて手握ったんだもん……そのあと周りの状況を把握して無事爆散したわけなんだが。

そういうところも可愛いのが困る。ほんとに。

おかげさまで俺は同級生の男子に殺すような目で見られることになったのだ。いやまあ友希那みたいな彼女がいれば誰だって嫉妬するとは思うけど。

困る。割と本気で。

「……まるで自分は話題にならないみたいない分ね」

「いや実際そうだろう。俺と友希那じゃ見た目比べるまでもなくないか？」

「それ、さっきのことを踏まえて言ってるのかしら」
「……………」

握った手を離さないままに、銀髪の子はじとりとこちらを睨んでくる。

「俺としても結構不思議なんだよな……今までモテたことなかったんだぞ？」

「あなたは見た目がちゃんと整ってるんだから、当然だと思っただろう……でも確かに、容姿に気を使い始めたのは私と会ってしばらくだった気がするわ」

なぜ？と言いながら首をこてんと傾げる友希那。可愛い。違うそうじゃない。

……いや、言わなきゃダメですかね……あなたを好きになったから隣に立つに恥ずかしくないようにって言わなきゃダメですかね……結構恥ずかしいんだけどな……。

ほら前にいるリサとか紗夜とか見ろ。当事者じゃないのに顔赤くしてるぞ。おい目を逸らすなニヤニヤするな。

「その、だな……」

「……………」

「まあアレだ、心境の変化だ」

「……要領を得ないわね、どういうこと？」

ずい、と顔を近づけてくる友希那。近くで見ると尚更可愛いな。俺が女子だったらキレてたね。

「……言わなきゃダメか？」

「ええ」

即答で頷きを返す友希那。これアレか。いつかのと看みたいに他に惚れた人が出来たとでも思ってるのか。

そんなこと絶対無いんだけどな……この子どんだけ女の子としての自信無いんだよ。

いや、俺の甲斐性の問題なのか、これ……。

確かに、まあ。最近そういうやり取りなかったもんな。

うん、と一人納得して、そして未だ不安そうに目を潤ませてこちら

を見てくる歌姫を見てから。

「……友希那を好きになったから、だな」

ぶつきらぼうにそう告げると、隣の彼女は目を丸くして。

「……………」

それから、その頬を淡い赤色に染めた。

……どうしよう、思った以上に恥ずかしいなこれ……皆の温かい視線が辛い……。

……まあ、ここまで来たら開き直るか。

はあ、と一つため息を吐いて、俺は繋いでいた手をお互いの指が絡まるように繋ぎ直した。

「か、奏人？」

「……アレだ。ご褒美あげるって言ったろ」

「……そうだったわね」

照れながらぼそりと口に出した俺の言葉に、友希那はふふ、と上機嫌に笑った。つやつやしてらっしやる……俺は羞恥でヒリヒリしてるのに……。まあいいか。可愛いし。

「でもほんとに良かったのかよ、ご褒美。勉強頑張ってただろ今回」

「別に、そこまで大層なことをしたわけでは無いもの。夜遅くまで勉強したりもしてないわ」

「よく言うな……」

「……もしかして、隈残っているかしら」

「いや全然」

「そう……」

「やっぱり隈できるほどやってたのか」

「……嵌めたわね」

「自分から穴掘っていったんだろ……大体なんで急に勉強頑張り始めたんだ。興味ないだけとか言ってたのに」

「それは、その……進路が」

「進路？それがどうし……いやちよつと待て」

「……………」

言ったきり、俯いて俺の二の腕に額をぐりぐりと押し付けてくる友

希那。

……そっか……俺と同じ進路に進みたいからか……それで最近勉強頑張ってるのか……俺と一緒に良いからか……そっか……。なんだこの可愛い生き物。

「まあ、何だ」

「あ……」

すっかり茹蛸のように顔を赤くした友希那の頭を撫でつつ。

「……俺も友希那とはずっと一緒にいるつもりだからな」

そつと大事に告げると、幸せそうな顔を再びぼんつと真つ赤にした友希那は急速に俺との距離を縮めて。

「……」

「……あの、友希那さん。ここ歩道なんで離していただけると。急に抱きしめるのやめよう？俺もびっくりするから。友希那も恥ずかしいから。な？」

「……」

「ええ……」

道行く人々からの生暖かい目と、前を歩くRoseliaの面々からの呆れの混じった視線に晒される中、友希那は俺をぎゅつと抱きしめたまま、こちらの胸板に無言で体を預けてくるのだった。

余談だが。

「……待たせたわね、奏人」

「お、おお……どうしたそんなに疲れ切った顔して」

「その、昨日のことで質問攻めにあって……」

「……いや手繋いだだけだろ？そこまでイチャついたわけでもないし、そんな大事にはならないか？」

「いえ、それだけではないの」

「え」

「あの後のことも……」

「……え、アレも？」

「……」

「まあ一応通学路だもんな、見られてても不思議じゃないか……」

「初めて美竹さんからかわれた気がするわ……」

「いやあの子の場合は半分呆れてるんだと思うぞ……ていうか大丈夫か、学校での立ち位置とかさ」

「別に、その問題はないわ。元からリサとばかり話していたし…奏人の場合は？」

「俺はまあ、うん。いいんだよ、Roseliaの皆がいるから」

「……そこは私って言うべきじゃないかしら」

「睨むな睨むな。言わなくても分かるだろ、俺の中には友希那しかないんだから」

「……………」

「……いやその、すまん。忘れてくれ」

「……私も」

「……そ、そうか……」

「……………」

とまあ、翌日にそんなやり取りを経てお互いに顔を真っ赤に染めることとなり。

それをすぐ近くで見えていたまりなさんが何故かダメージを受けていたりしたのだが。

それはまた、別の話。

6話

八月。夏の真っ只中。

「……………」

ざざーんという人工の波音を聴きながら、俺はなんの変哲もないプールサイドに腰を下ろしていた。

眼前には絵に描いたようなプール施設を楽しむ人々の姿が見える。

トコナツツパーク。

ウォーターアトラクションが数多く設置されているテーマパークは、休日らしく賑わっていた。

「きゃああああ!!」

「りんりん、しがみつくならボートにしてよー!」

聞き慣れた声に目を向けた先にいるのは、ウォータースライダーに乗るRoseliaの面々。

それぞれ水着に身を包んだ彼女たちは、夏の暑さも何とやらといった様子でボートの上ではしゃいでいる。

いや燐子ははしゃいでるっていうか怖がってるけど。大丈夫かアレ。ボートから落ちたりしねえか、だいぶ激しいコースだから普通に心配だ。

「……………まあ、でも」

普段から音楽に一生懸命な彼女たちが年相応に楽しんでいるのを見るのはやはり微笑ましい。

そう笑うのは、流石に年寄り臭いだろうか。

それでも彼女たちの楽しげな姿につい頬を緩めていると。

「乗らなくてよかったのかしら、奏人」

そう問いかけてくる声があった。

顔を上げれば、そこには銀髪の少女が立っていた。

その眩しい素肌に目を奪われないようにしながら、俺は言葉を返す。

「こうしてのんびりする方が性に合ってるからな。ついでにあのの中に入ったらこの男性客に殺されかねない」

「?どうしてかしら」

「……いろいろあるんだよ」

実際、殆どの客は彼女たちを見ては微笑ましそうに笑っている。あの中に男子一人が入り込んだらどうなるかなんて……まあ、火を見るより明らかだ。……俺の精神の安定の為にもやりたくないしな、うん。

「ていうか友希那こそだろ。一緒にウォータースライダー乗んなくてよかったのか?意外と楽しめそうだけど」

「私はいいのよ」

「そりやまたどうして」

「……本気で聞いているの?」

「……………」

頬を淡く染めながらむす、と不満げな顔でこちらを睨む友希那。

いや、こういうデレはずるい。どう反応すれば良いか分からなくなる。

「……ま、まあこうして足だけ水に入れるのも気持ちいいぞ。友希那もどうだ?」

「……釈然としないけれど、奏人がそう言うのなら」

わざとらしく話題転換をした俺に、友希那はそう言つてすとんと腰を下ろす。

俺と拳二つほどの距離を置いて座り込んだ友希那は、ゆるりとした動作で指先を水面に浸し、それからぼつりと言葉を紡いだ。

「……水着」

「うん?」

「どうかしら。リサと買ったからそこまで不安ではないのだけれど」

「……」

急な問いに、何と返したもののか、と考えながら彼女の水着に目を向ける。

黒いビキニ型の水着は、シックなその色が少女である彼女により一層大人の魅力を付与しているようだ。

元から片鱗を見せていた可憐さは何割か増し、暴力的なほどに俺を

魅了してくる。まあ、うん。スレンダーな体もそれを底上げして……この話やめよう。細かく見すぎると気味悪がられそうだ。

「まあ、似合ってると思うぞ。友希那は大人びてるし、雰囲気も合ってる気がする」

「そう言う割にはしつかりと見ていないわよね。他のみんなにはいつも通り接しているのに」

「う……」

友希那の刺すような視線に思わず言葉が詰まる。

やっぱり視線つてバレるよな……まじまじと見なくて良かった。友希那にドン引きなんてされた日には生きていける気がしない。

申し訳なさを感じながら、俺はどこか不満げな表情の友希那に言葉を返す。

「こう、何だろうな……皆は別に平気なんだけどさ」

「けど？」

「……色々違うんだよ、好きな人が相手だと」

「――」

「いやごめんな、ちゃんと見る。せつかく着替えてくれたんだし」

「……」

「友希那？」

謝罪の言葉を口にした俺に、しかし友希那は無言を貫いていて。

恐る恐る視線を向けた先、彼女はその顔を耳まで真っ赤にしたまま俯いていた。

数秒の沈黙の後。

「……そういうことをさらりと言うのはずるいと思うわ」

「……まあ、本心だからな」

「……そう」

それなら、と友希那は言葉を続けて。

「その、存分に見てちょうだい」

ぎこちなく言って、その場で立ち上がる。

後ろ手を組み、恥ずかしげに視線を逸らす友希那に俺は目を向ける。

引き締まった、それでいてちゃんと女性らしい華奢な体。

陽光の下、惜しげもなく晒される白磁の肌。

そして何より、恥じらいを帯びるその表情に胸がざわめいた。

「……………綺麗だ、よく似合ってる」

「……………ありが、とう」

心から告げた言葉に友希那は嬉しげに微笑んで、その顔を朱に染めたまま再び俺の隣へ腰掛けた。

拳一つ分ほど離れた位置。

ともすれば肩がぶつかってしまいそうな距離で、友希那はそつと口を開く。

「……………その」

「ん？」

「少し、肩を借りても良いかしら」

「……………ああ、もちろん」

俺が頷くや否や、友希那は俺の肩に頭を寄せ、身を寄せてきた。触れ合う肌が熱い。俺か、彼女か、はたまた両者の熱だろうか。

「……………奏人」

「どうした？」

「胸が、痛いほどに高鳴る……………これが、人を好きになるということなのかしら」

「……………俺はそういう認識だけど」

「そう……………悪くないわね」

そう、万感の思いを込めた様に告げる友希那の手のひらをそつと握る。

彼女もまた、小さく身じろぎをしておずおずと手を握り返してくる。

鼓動は速くなり、俺たちの感情をありありと伝え合っている。

握る手に力を込めれば、友希那は熱を帯びた眼差しで俺を見上げてきた。

「……………好きよ」

「……………俺も大好きだけど」

「ふふっ……」

俺の言葉に友希那は幸せそうに笑い、それからそつと瞼を下ろした。

……これはまずい。今の彼女に羞恥心なんてものはまるで無い。見るからに俺への好意が溢れ出てる。

「……………」

勿論、その彼女をより一層愛おしく思う俺も俺なんだけど。

自分の想いの大きさに苦笑して見つめるのは、目を瞑り、ついと顎を上げる友希那。

そのいじらしさに今一度胸を締め付けられながら、俺は彼女と唇を触れ合わせようとして。

「……………」

視界の端、ウォータースライダーから降りてきてこちらを見つめるバンドメンバーたちの姿に気がついた。

いやリサ、ニヤニヤしてゴーサインを出されても困る……つてあれ、ちよつと待て。

「？奏人……？」

到着の遅さに不安を抱いたのであろう、恐る恐ると言った様子で目を開けた友希那に、俺は黙って視線で周りの状況を示す。

そこでようやく俺の顔から視線を移動させた友希那は、

「……………あ」

周りの生暖かい目を目視するなり、かあ、と頬を赤らめて俯いた。

ええ……俺も気づかなかつた……何この周りの視線。つら。こつて温水プールだっけ……紗夜に確認してみよっかな。いやていうか何。俺たちこの視線の中であんな会話してたの？死にてえ。

「……………」

「……………」

「……………その、友希那。そろそろ移動しようぜ」

「……………」

この場からの退避を促すも、返事をしない友希那。伝わってくる鼓動が彼女の動揺を教えてきて……ダメだこの子羞恥で動けなくなっ

てる。いや俺もだいたいぶ恥ずかしいんですけど友希那さん。

「……………」

「ちよつと友希那待つて抱きしめるの止めて顔見られたくないの分かるけどもつと恥ずかしいから」

「……………」

「まったく……………」

周りの視線に頬の熱が上昇するのを自覚しながらも、俺は抱き着いてきた彼女の背中を軽く叩いて。

「…………好きだよ、友希那」

その、誰よりも愛おしい名前を大事に口にするのだった。

「どうだ、座り心地は」

「快適よ…………こうして空を見上げるだけでも、意外と良いものね。普段は出来ない経験だわ」

騒動からしばらくして、俺たちはゆっくりと流れるプールでくつろいでいた。

店から借りてきた大きな浮き輪に友希那を乗せ、俺はその船頭を買って出ている。

「……………」

波に揺られながらぼーっと空を見つめる友希那。

普段の彼女からは想像できないような緩み切った表情に笑みを溢しながら、俺は言葉を紡ぐ。

「あれがなければもつと楽しめたかもな」

「…………あれは、忘れてちようだい」

おどけるように言えば、友希那は居心地が悪そうに目を逸らした。あの騒動の時。完全に浮かれきって周りが見えなくなっていた俺たちは、状況を把握した我らが頼れる紗夜が事態を收拾したことで無事激怒されることとなった。

いやしかし、友希那が自業自得とは言え大人しく怒られてるのなん

て初めて見た。それほど浮かれていた自覚があったのだろう……ちなみに俺はリサと紗夜二人の前で正座をしたのでこう、なんだろう、なんか色々失った気がする。

「……お互いに悪かったからな。今度からは二人の時でも周りちゃんと見るってことで」

「……………」

「え、どうした友希那その膨れ面」

「……いえ、何でもないわ。気にしないで」

「誤魔化し方下手くそか。いや、無理して言わなくてもいいけどさ」

「……笑わないかしら」

「……笑わないけど」

それなら、と。友希那はそう言って俺の顔を見上げてから。

「……周りを見るより、その……あなたには私を見てほしいと、そう思ってしまったから」

戸惑うような、恥ずかしがるような顔で放ってきた言葉に俺は固まった。

今日の友希那さん殺傷能力が高すぎる。さっきからこういう殺し文句をぼんぼん放ってくるんだけどなにこれ。俺今日で既に三回くらい死んでるんだけどなにこれ。

「や、やっぱり忘れてちようだい」

「……友希那、ちよつとごめん」

言つて、頬を朱に染める彼女の顔に手を軽く被せる。

「……………」

「……どうしたのよ、私の目なんか覆って」

「いやちよつと、今顔見られたくないっていうか」

問いかけてくる友希那に答えながらも、俺は感情の吐露を抑えるのに必死だった。

鏡なんて見るまでもない。

絶対ニヤニヤしてる。絶対だらしない顔してる。すれ違う親子連れの人すごい微笑ましそうにこつち見てるし……いや恥ずかしいなこれ。どうしよう。

彼女からの言葉と羞恥に頬の熱を上げる俺の眼前、友希那は彼女の顔に被さる俺の手を握ると同時、それを視界から外して、

「別に、気にしないわよ。……どんなあなたでも、私は好きだから」

「……………今日のお前、ほんとにずるい」

「ちゃんと、周りよりも私のことを好きになってもらうわ」

「徹底しておられる……………」

ふふ、と声を漏らしながら握った手の指を絡ませる友希那。

可愛いかよ……………可愛かったわ。とつくにベタ惚れなんだよなあ……………

「だから、二人でまた色々な場所で歌を作りましょう」

「ああ、それは勿論いいけどさ……………場所をわざわざ転々とする必要はあるのか?」

「当然よ……………見惚れるような私をまだ見ていないでしょう?」

「いや、もう十分見てるけどな」

「……………」

俺の作った料理やりサのクッキーを美味そうに食べる彼女も。猫に頬を綻ばせる彼女も。空を見上げる彼女も。そして、何よりもステージで歌う彼女も、俺の中ではいつだって絵になる姿なのだから。

そう伝えると、彼女はその目を大きく見開いて。

「そう……………だったわ。奏人は私のことを、知っているものね」

「ああ。友希那も俺のことはよく知ってるだろ?」

「……………ええ」

「まあ、そういうことだ」

言って、お互いに見つめて笑い合った。それと同時、二人の間に会話が無くなる。

先ほどまでの甘ったるいものではない。相手を理解して心が通じ合ったような、そんな心地よい静けさ。これが共有できるのは彼女とだけだ。

「……………」

「……………」

沈黙の中、再び浮き輪ごと波に乗り始めた友希那は、気持ちよさそ

うに目を細めて空を仰いだ。

その、年不相応なあどけない笑顔に心を奪われる。

……ほんとにもう、この歌姫はいつだって俺を魅了し続けるんだから。いつだって惚れ直してしまう。困ったものだ、ほんとに。

溢れた思いを誤魔化すように絡める指に力を込めると、友希那は淡くはにかんだ。

そんな彼女の表情を愛おしく思いながら、俺もしばらく水に身を任せていると。

「友希那、奏人、ビーチボールで遊ぼうー！」

向こうからリサたちのそんな声が聞こえてきた。

確かにちよつと友希那を独占しすぎたかもしれない。そろそろ行かないと拗ねられそうだ。

「向こうに遊びに行くか、友希那」

二人の時間を少し名残惜しく思いながらも誘った俺に、友希那はこくと頷いて。

「……そうね。皆とも遊んでみたいわ」

「よしきた」

「……」

「どうした？」

「……こうして浮き輪を引いてもらうのも少し申し訳ないと思つて」

「そんなこと気にすんなよ。つうか逆は流石に格好つかないでしょうが」

「それでも、甘えすぎはよくないでしょう？」

「いや、そうでもないぞ？甘えてくれた方が男冥利に尽きるもんだからな」

リサたちの方へ向かいながらそう言うと、友希那は半目でこちらを睨んできた。

「奏人、あまり私を甘やかすすぎるのも良くないわ」

「そうか？好きでやってるんだからいいだろうってやめて友希那ほっぺつねらないで」

「ほら、こうして調子に乗るわよ」

「いや俺は別に嬉しいんだけど」

「……………」

「違う、違うから友希那。その変質者を見るような目を止める心に来る」

「……………何、頬をつねられるのが嬉しいのかしら」

「だから違って……………その、甘えてくれるのが、だ」

「……………ああ、甘えられるのが嬉しいの。それなら、奏人」

「うん？」

数秒のやり取りに気疲れしてげんなりと言葉を返した俺とは対照的に、友希那はにこりと笑って。

「あなたも甘える側になってみる？」

「は？」

呆けた声を漏らした俺に、しかし彼女はその笑顔を崩すことはなかった。

それから、Roseliaの皆で遊んだ後。施設内のレストランにて。

「……………これ美味しいな」

「こつちのムール貝もどうかしら」

「お、じゃあもろう……………」

「はい、どうぞ」

「え」

「えじゃないわよ。奏人を甘える側にするためだわ」

「いや一人で食えるんだけど。普通に取らせてくれよ」

「だめよ。ほら、あーん」

「……………」

「ちよつと、口を開かないと食べれないわよ」

「いや友希那さんここ公共の場。人いるから。恥ずかしいだろ」

「今はみんなナイトステージを見に行ってるわよ」

「ああ、それで全然人いねえのか……………隙がねえ」

「早く、奏人」

「ていうか何、友希那それするためだけにここ残ったの？俺を甘やかすために？」

「……そもそも、奏人は私が移動しないからここにいるのでしよう？」

「口に出さないでお願い。そういうのは察して恥ずかしいから」

「ふふっ………はい、奏人」

「え、やだそんな脳味噌蟹味噌カップルみたいなことしたくない……」

「………そう………」

「ああいや、冗談だ。あ、あー………」

「！はい、あーん」

「あ、あむ………」

「どうかしら」

「………味しないんだけどこれ」

「？そんなことないでしょう、貝料理よ」

「いや、なんて言うか………ほら、友希那も。あーん」

「………」

「おい顔逸らすなそれはずるだろ」

「………するのはともかく、されるのはちよつと」

「大丈夫だって人いねえし」

「……ちよつと、手を繋ぐのは反則でしょっ………あむっ」

「………どうだ？」

「………味がしないわね」

「だろ？」

しつかりバカップルをかまして若干後悔しながらも夕食を済ませたり。

「わあ！花火が上がったよ！あこがドラムを叩くときも出ないかなー」

「いやそれはちよつと危ないかなあ………」

その後、皆に合流したナイトショーで。

「みんな、ショーにすっかり夢中みたいね」

「ああ、燐子は衣装に目キラキラさせてるしあこは演出に興味津々だ

しな」

「ええ、来てよかったわ」

「そうだな……」

「……………」

「……………」

「……………私には二人ともお互いを見つめ合ってるようにしか見えませんが」

「……………」

「……………」

紗夜の苦笑と指摘に二人して頬の熱を上昇させながらも手を握りあったり。

そんなこんなでどこか甘ったるい雰囲気テーマパークを、俺たちは時間を忘れるほどに楽しんだのだった。

7話

秋。

食欲の秋やら読書の秋、といった言葉が飛び交う季節だ。

うん、美味しいものが食べたい。没頭できるような本も読みたい。

秋万歳。

「……そう言うけれど、私とあなたは秋どころか一年中音楽と言ったほうがしつくり来るわね」

予約の取れなかったライブハウスの代わりとして俺の住むマンションの一室で。

音楽の休憩ついでに秋の娯楽を訴える俺に、隣の友希那は軽くため息を吐いた。

「まあ確かに一年中やってるけども……」

思えば彼女とこうして二人で音楽をするようになってもう長い。

ライブハウスで練習に打ち込む時間もいいけれど、今みたいに家のソファーに座ってのんびりと音楽を楽しむのも乙なものだ。

お互い音楽家だからなかなか飽きも来ないし。飽きたら飽きたでそばにいる相方に絡めば大抵相手されるから退屈にもならない。

けれども、季節感がほとんど無いと言うのはやはり寂しいもので。「いや、せつかくの秋なんだから美味しい物食いたくないかっていう話なんだけどな」

「美味しいもの、ね……」

なんかないか、と問いかけた俺に隣に座る友希那はふむと頷き。

「……この前行った、紅茶の美味しいカフェくらいかしら」

「ああ、あそこか。確かに美味しかったけど」

「でも、そのくらいよ。私はそこまで食欲旺盛ではないから。あなたと音楽をする方が有意義なもの」

「まあ友希那はそうだよな。紅葉とか似合いそうだから勿体なくはあ
るけど」

脳裏に、紅葉色に染まった木々を背に微笑む友希那の姿が浮かぶ……先週くらいに見たような、目を輝かせてクレープにかぶりつく姿よりははるかに絵になるな。いやあれはあれで健康的で可愛かったんだが、やはり友希那の持つ儂げな雰囲気には美しく儂いものが似合う。

「……それなら、今度見に行きましようか、紅葉。少し遠いけれど、綺麗に染まるところがあるから」

「お、おう……今の話のどこに意欲が湧いたんだ友希那……」

「……別に、どこでもいいでしょう」

「いやいいけど顔背けるなよ……ま、まあアレだ。楽しみだな、紅葉」

「……楽しみなのは、紅葉だけなのかしら」

「……いやそういうのは言わなくても察してほしいというか」

「そう？」

こちらの意図を読まれややげんなりとする俺の隣で、友希那は頬を赤らめながらいたずらっぽく笑っていて。

答え分かって聞いてるよなこれ……まあいいけど。俺の彼女が不器用で可愛いのはいつも通りだし。

「……その、いい絵になるだろうな、とは思った」

「……………」

照れ臭くなりながらそう告げた俺に、隣に座る友希那はその顔をより一層赤くして、

「おっと……………」

「ころん、と俺の膝へと寝転がってきた。

「ちよ、友希那？」

「……………」

慌てた俺の声に、しかし友希那は無言のまま。

急に甘えん坊モードと化した彼女に頬の熱を上げる俺の眼前、彼女はいつになく満足げな顔でこちらを見上げて、

「いいわね二人で過ごすの……………」

漏れ出したのは、ファンやRoseliaの皆にはとても聞かせられないような気の抜けた声だった。

危ねえ。顔真つ赤じゃなかったら思いっきり抱きしめる所だった。それで友希那がキャパオーバーになって動かなくなるまでがデフォ。うーん、可愛い。

「……あのさ」

「……何よ、何か言いたそうね」

「いや顔そんな赤くしながら言われても……無理すんなよ、恥ずかしいなら」

「別にいいでしょう、二人きりだから」

「……俺の精神的負担は考慮されないのか？」

「たった今私がダメージを受けたわ。これは正当な反撃よ」

「今そんな歯の浮いたようなこと言ったか？」

「言ったわ」

「そうかなあ……」

「……その、嫌なら言ってくれていいのよ」

「あれだ、俺が何もしてなくても甘えてくれていいからな。そんなの考えなくていいぞ」

「あ……」

苦笑しながらその頭をそつと撫でると、彼女は一瞬驚いたような顔をした後、淡く笑みを浮かべた。

「というか相も変わらさず甘え方が下手というか……いや一周回って上手いのか？甘えることを対価としてしか受け取れない友希那、面倒臭可愛い。」

「……」

「どうした？」

「……冷静に考えると恥ずかしいものね」

「あー……まあ平気だろ。二人きりだしな」

「……そうね」

そう、彼女の真似をして告げたこちらの回答に笑顔を見せ、それから彼女はそつと、こちらの頬に触れてくる。

俺もまた彼女の頬をふにふにと触れば、くすぐったそうに友希那が微笑む。

「……こういうの、慣れてきたよな」

ぽつりと呟いた俺に、友希那も思うところがあつたのだろう。

「……ええ」

友希那は目を見開いて、それから淡く、その笑みに幸福を滲ませた。

「リサや紗夜、あこと燐子——それから、奏人。皆のおかげよ」

「……そうか」

「……」

迷いなく頷く友希那。そこに、かつての『孤高の歌姫』の面影はない。

『私たちは言ってしまったえば仕事仲間よ。わざわざ世間話をするような関係ではないでしょう?』

話すことといえば業務連絡以外最低限、のスタンスであつた彼女は、しかし。

『別に……他愛のない話をするくらいなら』

『どこかに出かける?別に構わないわ。たまには気を紛らわせないと』

少しずつ俺やRoseliaの皆に心を開いてくれて。

『私は、私たちはRoseliaなの——この5人でこれからもずっと歌いたい』

『ありがとう。奏人に出会えて、本当に良かったと思つているわ』

いつしか、共にある事を願つてくれるようになり。

こうして今、俺の膝の上で笑つてくれている。

「……夢を見ているみたいだな」

「夢になんてさせるつもりは無いわ」

夢見心地でそう漏らした俺に、友希那は微笑を浮かべ、それでいてどこかむつとした表情を見せた。

手のひらを重ね、その耳を当然のように真つ赤にして、それでも俺を映す金色の瞳は、俺から離れることはない、という確信を告げている。

そう迷いなくこちらを見つめる目は、あの時から少しも変わっていない。

真つ直ぐで眩しい、いつだって見惚れてしまうその在り方。

……ああ、本当に。

「……友希那」

「？」

この歌姫は、俺の心を掴んで離さない。

「絶対幸せにする……約束だ」

「！……………」

彼女の手を握りながら告げたプロポーズじみた言葉に、友希那は驚いたように目を丸くして、

「そうね、楽しみにしてるわ」

「いやちよつと顔を俺に押し付けなないで。そういうのは俺の目を見て言うことだろ」

「……今は顔を見られたくないのよ」

「俺もさつきひどい顔してたと思うんだけど」

「たしかに、あなたも幸せそうな顔だったわね」

「いやそれは——」

お互いの瞳に相手の姿を映しながら紡ぐ、他愛もない話。

そうして二人、じやれつくように軽口を叩き合いながら、俺たちは永遠にも感じられる時間を共有したのだった。

それから数時間後。

「お待たせ友希那。寝る前だしミルクは多めに……と、マジか」

「ん……」

マンシヨンの一室にて。

カップを載せたトレーを持ってきた俺を迎えたのは、新曲の楽譜片手に穏やかな寝息を立てる眠り姫だった。

『今日は奏人の家に泊まる』と友希那から聞いていたので、寝る前に彼女の好きな甘い紅茶でも出そうと淹れてきたのだけれど、どうやら無駄になりそうだ。

俺はトレーを近くのテーブルに置き、ソファアで眠る歌姫のもとへ向かう。

……穏やかな寝顔だ。こんなにも可憐で儂げな少女があんなにも力強い声で音楽を生み出すなんて、なかなか想像できるものではない。

「お疲れ様、友希那」

絹のような髪を撫でながらそう告げると、彼女の表情には心なしか喜色が浮かんだ。楽しい夢でも見ているのだろうか。

この前は俺の名前を寝言で呟かれたせいで一人悶絶する羽目になったから、寝言には気をつけてほしい。

この子そういうところあるからな……ほんとに恋愛初心者なのか疑いたくなる。いや普段は思いつきりポンコツなんだけど。

「まあ、嬉しいのに違いないんだけどな……」

苦笑を浮かべながらぽつりと呟くと、彼女は小さく身じろぎをした。

ふと、流れゆく穏やかな時間に、胸の内に込み上げるものがあつた。

親愛なる歌姫。

どこにいても輝く、紫炎の薔薇。

こうして彼女のそばにいられることが、たまらなく幸福に感じる。

最愛の少女に、俺はずっと恋をしている。

「……好きだ」

自然と漏れ出た言葉と共に、その額に唇で触れる。

我ながら浮かれてると思うが、当人が寝ているなら……まあ、問題ないだろう。

なんて考えていると。

「……」

先ほどから、眠り姫の頬がほんのりと赤くなっていることに気がついた。

「……あの、もしかして友希那さん起きてます?」

「……なんで敬語なのかしら」

おずおずと問うた俺に、友希那はぱちりと目を開けて言葉を紡ぐ。

やだ、これ恥ずかしい……何が悲しくて浮かれきった結果一人自爆してるんだよ俺。

「随分と積極的ね。リサにでも教わったの？」

「おい俺の信頼……てか友希那、鏡持ってきてやろうか。顔真っ赤だけど」

「私は少女趣味じゃないわよ……それで？」

「は？」

呆けた声を漏らしたこちらの眼前、彼女は赤らんだ頬をそのままに上目遣いで、

「……その、額だけなの？」

「……」

恥ずかしがるように、拗ねられたように告げられ、一度呼吸が止まった。

そして我に返って駄目人間一步手前であることに気がついた。

いや大丈夫か俺。

まあしようがない。目の前の可愛い生き物が可愛いのが悪い。

「……友希那」

「……ん」

込み上げる想いを含めて名を呼ぶと、銀髪之歌姫は瞼を閉じ、ついと顎を上げる。

その表情に愛おしさを感じながら、そっとお互いの距離を失くす。

そして、永遠にも思える一刹那を共有したあと、唇を離れた友希那は口を開き、

「……及第点ね」

「そんな幸せそうな顔してるのにか？」

「……次は言われる前に」

「精進します……」

そう言う彼女は、しかし紡いだ言葉とは裏腹に幸せそうに微笑んでいる。

いや俺たちにはこれで限界。もうお互いに一杯一杯だよほんと。一度のキスでこれなのに、世の中には外でこういうことをする頭蟹味噌カップルが存在するとか。この世のバカップル達は羞恥心をどこ

かに捨ててきたのだろう、間違いない。

一人うんうんと頷く俺に、友希那はくすりと微笑み。

「……奏人」

「ん？んむっ……」

もう一度、今度は彼女が俺に触れてきて。

ああ、これもうどつちがバカツプルか分かんねえな、なんて考える俺を他所に、最愛の歌姫は、

「好きよ、私も」

ふわりと、蕩けるような声と共に微笑むのだった。

挿話

「どうしたもんかなあ……」

放課後、俺はライブハウス前のカフェテリアにて、録音機器に繋がったイヤホンを耳につけながらむう、とうめいていた。

ふとした時に閃くメロディー自体はいいのだが、それらを合わせたリ調整するのはやはり難しい。

「……また今度友希那に聞いてみるかな」

珍しく練習を休みにした歌姫の顔を思い浮かべたところで、俺は残り僅かとなったコーヒーを口につけて、

「ん？」

たった今入店してきた5人の少女に、思わず目を見張った。

店内が少しぎわめくのも頷ける。

彼女達にはそれ相応の魅力があるということだ。

その可憐な容姿も、高いレベルのライブも、観客を魅了するには十分なものだから。

「わ、Roseliaだ！」

「サインとかもらえるかな!？」

どうやらファンらしい女子高生がきやいきやいと騒いでいるのを尻目に、俺は微笑みながら彼女達がいるであろう入り口付近から背を向け、

「……………」

「うおっ!？」

そして、こちらをジト目で見つめてくる銀髪の少女と対面した。

おかしい……さつき五人で入店したばかりなのに何で一人で俺の前に回り込んでるんだ……？

これがトップレベルのバンドボーカリストの実力か……。

戦慄する俺を他所に、彼女は酷く不機嫌そうな顔をしていて。

「今、私たちを避けようとしたわね？」

「いや、避けようとかしてないって……ただちよつと退店しようとしてただけで」

「それが避けてるわけではないとどうやって証明できるのかしら？」
「……いや、でもいろいろあるだろ？俺なんかと話してるのを見られるのは……ほら？」

傍目から見たら実力派ガールズバンド@男子一人なんてどんな構図が分かったもんじゃないし……。ファンからの捉えられ方次第では俺は彼女たちの邪魔になり得る。そういうこともあって、Roseliaを結成してからこここのところ、あまり人目につく場所での交流は避けていたわけで。

わたわたと弁解する俺を前に、友希那ははあと一つため息を吐いて。

「私たちは別に恋愛禁止のアイドルなわけでもないし、あなたは私たちの歌を作ってる関係者よ。話していても何もおかしくないじゃない？」

「そうは言ってもなあ……」

見れば、周囲の客から視線に殺気というか珍獣を見るような物珍しさが混じりつつある、ような。そりやそりや。

今をときめくガールズバンド……しかもその実力派ボーカリストがどこの誰かも知れない男子と若干なりとも親しげに話してりや珍しいと思うだろう。Roselia結成前なんて俺と友希那の関係について変な噂も流れてたくらいだ。まあ気持ちは分かる。誰だつてそーする。俺だつてそーする。

「……やっぱり良くないんじゃないか？」

具体的には彼女の立場とか。

そう言外に含めれば、彼女はふむ、と頷いて、

「……なら、そうね」

「おお」

何か案を出してくれるようだ。さすが、デキる歌姫は違う。これだから好き。友希那大好き。もちろんファンとしてだ。そうじゃないとこの天然系歌姫に致命傷喰らうから。

……いやていうか待てよ、目の前の彼女が提案するなんてシチュ

エーションでポンコツ友希那さんにならない可能性があるか？

どこか不穏な空気を感じ始めながらも言葉を待つ俺に、彼女はその綺麗な形の口を開いた。

「今後あなたがそういう態度を取るなら、私はあなたの黒歴史を晒すわ」

「晒す」

「Roseliaとしての全てを活用して全力で晒すわ」

「全力で晒す」

「そうね、例えば……」

「ば、馬鹿っ」

「……あら、止めるならもうそういう態度を取らないってことよね？」

「……いや、これじゃ脅迫だろ。もつとこう、なんか建設的な案は無かったのか、友希那さん」

「……交渉には向いてなさそうね」

げんなりとした俺に、むむ、と難しそうな顔をする友希那。

いや交渉とかそんなもんじゃなかった。むしろ子供の駄々だった……まあ、いいか。仕方ない、とため息を吐いて、俺は彼女に微笑みかけた。

「分かった。今後は人前でもいつも通りにするわ」

「そ、そう」

ほっと胸を撫で下ろす友希那。

いやなんだその反応。そんなに人前で俺と話せないの嫌だったのか。

……まさかな。そういう反応で俺を惑わしているに違いない。まあ現在進行形でがつつり惑わされてるんだけど。

「でも本当にいいのかよ。恋愛云々はまだしも、ファン心理とかさ……」

「問題ないわ。私たちが肯定してくれる人も大事だけど……」

言いながら、彼女は俺の手をそっと握り、上目遣いで俺を見て、

「私にとっては、奏人と交流を持つことも同じくらいに大切だから」

「お、おお……」

「あなたは私にとって大事な人だから。その……さつきみたいな態度は少し寂しいような気もするの」

「友希那……」

「とは言っても、別に奏人だけが特別なわけではないわ。もちろん Roselia のみんなも大事だから」

「……いや、俺はその Roselia のみんなに入っていないのか？」

「……」

「……」

いや、そつか……俺はみんなに抱く友情以外の何かがあるのか。それをある程度人のいるカフェテリアで言われたと。

え、なにこの地獄。

気がついたら周りの目がなんか生暖かいものになってる気がする。

「……」

一方で、俺の発言に赤らめた顔を俯かせたまま、こちらの手をにぎにぎと握ってくる友希那。

この子周り見えてないんですけど……。ていうかそういう分かりやすいリアクション本当にやめてほしい。愛おしさが爆発して思わず告白しそうになる。

「そ、それで、みんな待たせてるけど良いのか？これから女子会だろう？」

「い、いえ。女子会というか前のライブの反省会と言うか……良ければ奏人もどうかしら」

「あれ、いつも通りの反省会なら俺も呼べばよかつたんじゃないか？」

「だってあなた、ライブハウスでやろうって言うじゃない」

「いやまあ、言うけど」

「……リサが、カフェテリアに行きたいって言うから」

「……」

「おかしいわね、普段はスタジオやファミレスなのにどうして今日はカフェテリアで反省会なのかしら……」

「……」

まあ十中八九目の前で不思議そうに小首を傾げている歌姫の恋バ

ナを聞こうとしたんだろうけど。なにこの子首傾げてるの。可愛い。公共の場で告白紛いのことしたの自覚ないの可愛い。

いやまだ決まったわけじゃないけどな。友希那が友愛と恋愛を履き違えている可能性もあるし……いや仮にそうだとしたらこの子魔性の女すぎるでしょ。男泣かせになるぞ。

「まあ、あれじゃないか。偶にはなんか変わったところでやりたいってことじゃないのか?」

「……そうね。それで奏人、この後予定あるのかしら?」

「いや、特にないけど」

「なら反省会に参加して。あなたもRoseliaの一員なんだから」

「俺も?今日は女子会だろ」

「リサには連れてきてって言われたくらいだし、みんな奏人のことは慕っているから問題はないわ」

「……友希那は?」

問うた俺に、友希那は柔らかく微笑んで。

「言う必要があるかしら?」

「……無いな、全く」

「でしよう?それなら行きましょう」

「ああ」

そう言って、俺は上機嫌そうに歩く彼女に手を引かれたのだった。

それから俺は、急遽女子会に飛び入り参加することになったわけだが。

『それで、友希那く、どうなの?』

『どうなのって、何が?』

『うわあ、友希那本当に自覚ないんだね……』

『……あの、音無さん』

『紗夜、隣の会話は気にしないで良いから。燐子もあこもそんな目で俺を見ないで。ほら前のライブの振り返りしよう早く』

『でも奏人さんと友希那さん、いつもくっついてます!』

『いいか、あこ。今はライブの話をしてるんだ。だからその話はやめよう。な、紗夜?』

『では、共有してるイヤホンを外して握っている手を離したらどうですか?』

『あ……………』

『……………』

『ええ、無意識に繋いでたの…………』

『ちよつとその本気でドン引きしてる声出すのやめてリサさん。心にくる』

『…………このホットミルク…………甘いです、氷川さん』

『奇遇ですね、私もです』

『いや燐子どこでそんなこと覚えたの…………ほんとにやめてくれ…………』

何故か俺が集中砲火を浴びることになったり。

『…………ですから、ここのパートでもっと…………』

『なるほどなあ…………』

『奏人、コーヒー持ってきわよ』

『お、サンキュ』

『音楽してる時は砂糖一つよね?』

『おお、合ってる合ってる。てかなんで知ってるの』

『いつも見てるから』

『…………そ、そうか』

『ええ』

『……………』

『わお…………もう、友つ希那ったら〜』

『……………』

『いや俺悪くないでしょ紗夜さん、その目やめて怖いから…………』
楽曲のアドバイスをする紗夜に無言の圧を受けながら、味のしなくなつたコーヒーを飲んだり。

『それで、みんなは帰ったけど、どうしましょうか』

『うーん、そうだなあ…………ライブの振り返りも曲のアドバイスももら

えたしなあ』

『……少し、膝を借りるわね』

『ん？ああ……え？』

『……』

『お、おい……』

『なんだか、安心するのよ……不思議ね。鼓動は、いつもよりずっと早いのに』

『友希那……』

『重かったら言つてちょうだい、すぐに退くから』

『……全然。羽みたいだよ、お前は』

『……それは、軽すぎるわね』

生殺しに遭い、流石に大分少なくなった周りからの視線による羞恥に悶えたり。

そんなこんなで日が暮れて、俺の放課後は終わりを告げた。

翌日。「せっかく友希那をからかおうと思ったのに返り討ちにされた」とリサが言い広めたお陰で、友希那は羞恥で顔を真っ赤にして俺を三日ほど避け、俺は俺で他の顔馴染みガールズバンドの少女たちに白い目で見られることとなるのだが、それはまた、別の話。

挿話二

某月、休日。

ライブハウスの一室にて、ガールズバンド『Roselia』は普段通り次のライブに向けて練習に励んでいた。新曲の練習は始まったばかりで、手探りながらに皆練習に精を出している。

自分自身の一番の出来を作り出す。無駄な時間を減らし、気を抜く時間も控えめなこの練習風景にも慣れたものだ。このストイックさはRoseliaの魅力であり、強みでもある。そもそも友希那がそういうタイプだから、皆が彼女に波長を合わせた結果なのかもしれない。

「……そのはずなんだけどな」

「何かしら、奏人」

「い、いや……なんでもない」
「そう」

俺の返答に対して素っ気なく返し、しかしにこにここと上機嫌そうに笑みを浮かべながら、Roseliaが誇るボーカルの友希那は、楽譜と顔を合わせる俺を眺め続けていた。

おかしい。普段なら滅多にRoseliaの練習中に気を抜かない友希那が、どう見ても上機嫌に曲のフレーズを口ずさんでいる。今にも花のエフェクトが舞いそう。

彼女のことを知っている人たちからすれば、多重人格なのではと疑われていたに違いない。まあ、俺や皆は乙女な友希那さん知ってるからそこまで驚かないけど。にしたって珍しい。これで練習に手が回らないどころか調子がめちゃくちゃにいいんだから、まあ、いいのか。
「……いやいや」

さすがに見て見ぬふりはできない。可愛いのはそうだけど怖い。友希那が、ではなく友希那が何故かめちゃくちゃに上機嫌な理由がわからなくて怖い。俺なんかやらかしたか……？

「ちよつと奏人、何したの〜?」

「……いや、マジで思い当たらない」

小声で責めるような口調のリサに俺もまた小声で返しながら、もう一度今いるライブハウスの一室を見渡した。

紗夜はギターで試奏してるし、あこと隣子もまたそれぞれ練習中、それでもって俺が曲の調整をしているというこの現状。友希那は全体的なアドバイス中。

やっぱり普段と変わったことはないように思える。

「でも先に来てたのは友希那と奏人でしょ、何かしたんじゃないの?」

「いや、先来たって言っても途中で寝たんだよ、俺」

「え、そうなの?」

そう。

練習の時間よりも早めにライブハウスまで足を運び二人で感覚を慣らすという、いつものルーティーンを今日も遂行してたわけだが。

『ふぁ……あ……』

『あら、欠伸なんて珍しいわね』

『ああ、ちよつと昨日夜更かししすぎてな……』

『そうでしょうね。ここのベーステンポなんて普段より大分違うもの。大方、夜まで調律してたんでしょう?』

『……その通りです』

『いいかしら、奏人。あなたが私たちの曲を作ってくれるのは嬉しいし、実際助かっているわ。あなたの歌はいいものばかりだから』

『お、おお……そこまで言われると照れるんだが……』

『でも、そこで体調を崩したりしたら本末転倒よ』

『……まあ、はい。仰る通りで』

『そういうわけだから、仮眠を取りなさい』

『……今?』

『今』

『どこで?』

『此処で』

『……いやフローリングの上で寝ろって?体痛くなるんだけど』

『……』

『ちよ、何してんの友希那さん。なんで椅子並べてるの』

『ほら』

『……いやほらじゃなくて。足ぼんぼんじゃなくて。此処ライブハウスの部屋だぞ？誰か来たらずいだよ』

『ここ角部屋よ』

『いや皆来るし……』

『集合時間まで一時間半くらいあるわ』

『いやでも……』

『別にいいでしょう。家だと私が膝貸してもらってるんだから、偶には』

『いやいやいや、流石に悪いから寝るなら床で寝るごめん友希那、分かった。膝借りるからそんな悲しそうな顔しないで俺に効く』

とまあ、そんなやり取りがあり。

『……どうかしら』

『すぐく……柔らかいです』

『そ、そう？寝辛くないかしら』

『いや、全然。毎日ここで寝たいくらいいい』

『もう。からかわないでちょうだい』

『……まだ早いかな』

『……せめて大学に進学してからかしら』

『……』

『奏人？』

『……悪い、友希那。ちょっと寝るわ……』

『ええ、おやすみなさい。リサ達が来たら起こすわ』

『……ん、頼む……』

少し眠かったからこのライブハウスの一室で膝枕を堪能するとかいう周りの見えないカッパルみたいなきことをしただけだ。

我ながら浮かれすぎだろ。周りに人いなくてもマシだったとはいえ、最近は俺も友希那もブレーキをまともにかかけられてない。反省しない……。

いや、振り返ってみても全く分かんない。

俺は俺で友希那が夢に出て来たから機嫌はいいんだけど……どう

考えても友希那との関連性が見当たらない。

「だから、ほんとに分かんないんだよなあ……」

「……いろいろ言いたいことはあるけど、確かに不思議だね〜」

「……何かしらに怒ってて、その当て付けをしてるとか？」

「うーん、どうだろう……」

「おい幼馴染」

「し、仕方ないでしょ？友希那に恋沙汰なんて無かったんだから分からないの！」

そうやり取りをしながら、紗夜と会話を弾ませている友希那を見る。

なんだかんだ起こされた時にはまだ誰も来ていなかったから、誰かに見られた照れ隠しっていうのも考えられないんだよなあ……。

「でも、友希那は怒る時はちゃんと怒ると思うけどね〜」

「まあ、確かに……」

ふと呟かれたりサの言葉に頷きを返す。

まだ友希那と恋人関係になかった頃、曲を作るのが楽し過ぎた等の理由で多忙なこともあり、一日三食カップ麺で済ませていたことがバレた時はギターを取り上げられて一時間正座させられた。正座自体は辛くなかったのだが、そのまま友希那の家に連行され彼女の親にも軽く説教を受け、最後の方は責任感と心配が入り混じった友希那が今にも泣きそうになってしまった。あの事件は相当堪えた。

考えてみると、友希那は怒って当たりに来るより自分で抱え込みがちなタイプだ。怒ってるわけじゃない、気もする。

「だから、気にすることないんじゃない？友希那がそれだけ奏人と上手くいってるってことでしょ？」

「そういうもんか……」

「そういうものだよ〜」

あくまで気楽に言うリサに、俺のちっぽけな不安は瞬く間に消えてなくなった。

「……まあ、ここで膝枕はさすがにやりすぎだと思うけどね」

「うっ……それは、返す言葉がないんだけど」

「どうせ家だとお姫様抱っことかしてるんじゃないの〜?」

「……………」

「…………え、ほんとに?」

「やめてリサ距離取らないで寝落ちした時運ぶだけだから。公共の場で膝枕する友希那よりマシだろ」

「でも、そういうところも可愛いよねっ」

うーんこの甘々幼馴染。いやそうなんですけど…………可愛いからってなんでも許すのは流石にどうかと思うじゃないですか…………。

「じゃあ、そろそろアタシも練習混ぜてこよっかな。友希那拗ねちゃうし」

「あ、ああ。ありがとな、リサ。相談乗ってもらって」

「いいよ、全然。奏人と一緒にいる時の友希那はすっごい可愛いから…………それは理由になってるのか?」

「まあ、アタシは応援してるってことだよ」

「そっか。…………じゃあこれ、新曲のベースのキー調整したから。練習頑張つて」

「き、切り替えが速いね、ほんと…………」

そんな調子でややげんなりとしながら練習に加わったりサを尻目に、

「…………よし。頑張るか、俺も」

改めて気合を入れ直し、楽譜との睨めっこを再開しようとして。

「……………」

「どうかした?」

「いやなんで練習参加してないの友希那」

「今は楽器だけで合わせてるのよ」

「…………隣に座る意味は?」

「…………ダメ、かしら」

こちらの服裾を掴んで至近距離から上目遣いで見上げてくる友希那。

あ、これやばい。あまりに致命傷すぎる。

ちよっと待て理性、ここで抱き締めるのは流石にまずい。いくら愛

おしくなったからって触れるのはダメここ外だから……！だから耐えて。頑張れ理性。負けるな理性。

「……いや、問題ない」

「そう」

俺の理性とのせめぎ合いを制して絞り出した苦し紛れの返答に頬を緩ませながら、友希那は指を絡ませてくる。

……いや、これ絶対なんかあったろ。この浮かれっぷりはやばい。普段は外で手繋ぐのも顔赤くするのに。

「……………」

そんな俺たちをニヤニヤとしながら見つめる Roselia の面々。紗夜に至ってはため息吐いてるし。いや視線でなんとかしろって言われても困る。惚れた弱みなんだ。

「……はあ」

珍しく人前で甘えてくる友希那の猛攻に頬を赤く染めながらも、俺は内心首を傾げて、その手を撫でることで思考を放棄した。

「そろそろ帰りましょうか」

「お、もうこんな時間か」

いそいそと後片付けをする友希那に倣って、俺も荷物をまとめる。夕暮れ時。一足先に他のメンバーが帰って一時間ほど経過してから、友希那と一緒にライブハウスを出て茜色の道を歩く。

「今日の練習は大分進んだわ」

「ああ、一曲目なんて完成に近いだろ。二曲目も手を出しているんじゃないか?」

「そうね、視野に入れてみるわ」

「……喉は特に問題ないよな?」

「なに、本人より喉が心配なのかしら」

「い、いやそういうことじゃなくて……」

「分かっているわ」

あたふたとする俺に友希那はくすりと微笑んで、それからそつとこ

ちらの手に指を絡めてきた。

「あなたの作る歌は、私のことをちゃんと想ってくれてるから。心配していないわ」

「信頼されてるようで何よりだ。でもアレだ、辛かったら言ってくれよ?」

「安心してちょうだい。奏人に嘘はつかないから」

「俺も友希那のことは信じてるぞ?」

「それも分かってるわ」

紡いだ言葉とともに、友希那はこちらにゆつくりと身体を寄せてくる。

そういうことされると抱きしめたくなるから困る。ほんとに。

同時に降って来た沈黙も、彼女と二人なら心地良い。

そのまましばらく、無言のまま互いの手を確かめ合うように指を絡めながら帰路を歩いていたのである。

「……そういえば」

「何?」

「今日のはなんだったんだ?」

友希那の家が見えてきたあたりで、ふと気になっていたことを問いかけた。

「今日?」

「妙に上機嫌だっただろ?なんかいいことでもあったかなって思ったんだけど……」

「……ああ、あれのことね」

「いや何その含み笑い。初めて見たぞ」

友希那はにっこりと笑い、そして得意げな顔で言葉を続ける。

「あなたの寝言を聞いたのよ……その、私のことが好きだって」

「は?」

「奏人、夢の中でも私に惚れているようね」

「悪戯っぽくそう話す友希那に、思わず言葉を失ってしまう。じゃあ何か。」

寝言で名前を告げられただけで、好意を告げられただけで。それだけで人目も気にせずに俺とスキンシップを取るほどに上機嫌になったって、そう目の前の歌姫は言ったのか。

それは……可愛すぎるだろ、あまりにも。

「……はは」

「な、何を笑ってるの」

「いや、悪い。でも、友希那もこの前俺の名前呼んでたぞ。寝言で。泊まりの時」

「っ……!?!?……どうして教えてくれなかったのかしら」

「悪かったから、目を細めないでくれ……だって可愛かったし」

「……顔が赤くなっているわよ」

「……友希那も手震えてるけど」

どちらかともなく足を止めて、お互いを見つめ合う。

……ああ、ダメだな。俺はどうやら、彼女の良いところしか見られないらしい。

悪戯がバレた子供のように拗ねた顔を浮かべながらも顔を赤くする友希那に、たまらず愛おしさが溢れてしまう。

その輝く銀髪も、凜とした声も、俺を映す金色の瞳も、彼女の全てが俺の目を奪う。

「友希那」

「……なに」

「好きだ」

「……」

歯止めが効かなくなつて告げた言葉に、友希那は目を見開いた。それから、そつと近づいて爪先立ちをして、

一瞬。ほんの一瞬だけ俺に触れて、そしてすぐに離れた。

「ゆ、友希那……」

急な唇への感触に困惑する俺に、友希那は照れ臭そうにはにかんで。

「私も、あなたが好きよ」

その頬を茜色に染めながら、そんなことを言ってきた。
参った。

俺の想い人は、あまりにも可愛すぎる。

「……今度は奏人から、期待しているわ」

「……あ、ああ」

俺の返事にくすりと微笑むと、また明日、と言って友希那はもう大分近づいていた家の中へと去って行った。

「……やばいな」

残された俺はぽつりと眩きながら、自然と触れられた唇を撫でていた。

同棲してる銀髪の歌姫が可愛い 1話

じゆう、と油が跳ねる音。

心地よい生活音を聞きながら、俺は一人朝食の準備に励んでいた。今日は週にたった一度しかない日曜日。

ここ最近は何となく忙しかったので軽いものばかりで済ませていたから休日くらいはしっかりと休んだものを、とわざわざ早起きして作っているわけだ。

……まあ、朝食と言っても既に午前十時を回っているのだから、もはや昼食ではあるのだが。

「ん、よし」

フレンチトーストの程よい焦げ加減に自然と顔が綻ぶ。

メニューはフレンチトーストにフルーツ、サラダにスープ。

食パン一枚、酷い時はヨーグルト一つで済ませる日頃のそれと比べれば随分と充実したものだ。

「……そろそろだな」

軽く皿に盛り付けをしてから、俺はキッチンを出た。

およそ6年間住んでいる1LDKのマンションの一室を慣れた足つきで進みながら俺は寝室の扉を開く。

休日だからとひたむきに眠りこけている同居人を起こすためにだ。

「……………」

部屋に足を踏み入れた瞬間、まるで異世界にでも飛ばされたかのような。そんな錯覚に陥った。

それほどまでに、彼女が眠る姿は神秘的だったから。

「ん、すう……………」

初夏だからということだタオルケットをかけながら、彼女は吐息を漏らしていた。

陶器のような白い肌。窓辺から差す日光に明るく煌めく銀髪。人形のような端正な顔。

絵に描いたような、御伽噺の眠り姫がそこにいた。

「……いや、ダメだろこれ」

……うん、間違いなくダメな気がする。少なくとも一年間寝顔見してきたのにこの感想が最初に出るのはまずい。恋は盲目とはよく言ったものだ。

ほんとにもう。俺彼女のこと好きすぎだろ。

「……ほら、起きろ友希那」

若干自分の重さに頭を抱えながらも、肩を優しく揺する。

「んう……」

一瞬眉根を寄せて身を竦める友希那。

なにこれ猫みたい。可愛い。

「もう十時半だ。朝ご飯もできてるから」

「んん……？」

「お、よく起き上がったな。そのまま目を開けて……」

「奏人……？」

「ああ、おはよう友希那。もう朝つて言うか昼になるから起き——
ちよ」

「ん——……」

緊急事態発生。眠り姫が寝ぼけたままこちらの首根っこに抱きつき、そのまま体重を預けてきた。

薄手のパジャマから高校時代よりプロポーションの良くなった体の柔らかさが押しつけられる。

未だ慣れない感触に息が止まりそうな俺を他所に、当の友希那は二度寝を決め込もうとしていて。

「いや待て目閉じるな友希那。起きて、もう十時半だから」

「……まだ、十時半じゃない」

「休みだからって寝てばつかじゃダメだろ」

「……休日……休むための日でしょう……」

「いや、それはそうなんだけど……」

「……なによ」

「せつかくの休日だし……ほら」

「……むう」

言い淀む俺に、友希那は眉根を寄せ。

「……仕方ない、わね」

半目で、起床を約束した。

「よし。じゃあ早速朝ご飯を……」

「ん」

「え、いや何ですか友希那さん。なんで腕広げてるんですか」

「……」

「いやいやいくら人目がないからって朝っぱらからハグなんてそんな友希那さん」

「……」

「……友希那さん？」

「……」

「……本気か？」

「……ん」

「……甘えん坊だな」

「まずい……これはいいよまずい……」。

友希那も友希那で出来上がっちゃってるのも、そんな彼女を見てときめいている俺も。なんだその顔。幸せそうだな。絶対幸せにするわ……。

「……ほら、早く」

「分かったよ、歌姫様」

苦笑しながらその華奢な体との距離を無くした俺の肩に、友希那は額を擦り付けて、

「おはよう、奏人」

「……ああ。おはよう、友希那」

心底幸せそうな声で、そう言葉を紡いだのだった。

『お、お邪魔します……』

ありふれたマンションの一室にて。

おずおずと入室した友希那に、先に玄関へ上がっていた俺が苦笑を

浮かべたのは、つい一ヶ月ほど前のことだった。

『そんな緊張しなくてもいいだろ。これまで何回も入ってるんだから』

『……人のことを泥棒のように言うのはやめてくれないかしら』

『照れ隠しにしてはこじつけすぎる……』

『……』

『なんでそんなほっぺ膨らませてるの友希那』

『……照れ隠しって分かってるならわざわざ言わないでちょうだい』

『……ま、まあほら、そのへんは少しずつ慣れてけばいいこう。これから友希那の家でもあるわけだし』

『はあ……そうね。お邪魔します』

熱い顔を隠すように、律儀に挨拶をしてからそそくさと玄関に入ろうとした友希那に、俺は一つ提案をした。

『……うん。友希那』

『何かしら』

『こういう時は形から入っていいこう』

『どういうこと?』

『お邪魔します』じゃ他人行儀な感じがするから。今日から「ただいま」の練習もした方がいいと思う。たかが言葉だけど、それでだいぶ馴染みややすさも変わるだろ』

『まあ……一理あるわね』

『だろ?じゃあ早速』

と、そんな調子で彼女は頷いていたのだけれど。

『え、ええ。じゃあ……ただいま、奏人』

『ああ。……お帰り、友希那』

『っ……』

『?どうした、そんな顔赤くして』

『い、いえ、別に……』

『いや別にじゃないだろ。どうした。風邪薬なら中にあるぞ?』

『そうではなくて……もう、私ばかり不公平ね』

『はっ?』

『次は私が奏人を出迎えるわ』

『えーせっかく靴まで脱いだのにまた外出るの俺』

『いいじゃない、ほら早く』

『……まあいいけど』

『……入ってきていいわよ』

『あ、ああ……た、ただいま』

『おかえりなさい、奏人』

『……』

『……私の気持ちを分かってくれたかしら』

『いや、確かにいいな、これ……』

『ええ、そうでしょう。誰かに迎え入れられるのは奏人慣れてないだ

ろうし』

『それもあるんだけど』

『?』

『その、相手にもよるな、と』

ぼかんとした表情を浮かべた友希那は、俺の真意を理解したのかぼんつと顔を赤く染める羽目になり。

『そ、そろそろ上がるか。ほら友希那もその手離して』

『……延長してちょうだい』

『……了解』

そんな会話に、顔に朱色を浮かべたまま笑い合って。

そうして俺たちは、大学入学と同時に同棲を始めたのだった。

「友希那、今日は買い物に出かけるから」

「え?」

朝食後、すっかり目を覚ました友希那は食後のほちみつティーを飲みながら怪訝な顔を見せた。

改めて思うけど寝ぼけてる状態でああいうことするの反則だろ。覚醒して自分の行動認識した時の慌てようからして天然なのがこう……。そんなところも愛おしく感じるの我ながらももうダメになつて

きてるな……。

「ほら、最近食材も減ってきたからな。いろいろ買い出しに行かないと」

「そういうこと……」

こくと頷く友希那。

可愛い。違うそうじゃない。なんでこんな日常の一幕で俺はいちいちときめかなきゃいけないんだ。……好きだからだろうな。

はあ、と自分にため息を吐く俺に、友希那はことんと首を傾げる。

「どうかした？」

「いや、なんかもう俺はダメだなって……」

「そんなことないわ。もつと自信持ちなさい」

「あ、ああ……ありがとな……」

励ましてくる友希那には悪いが、やっぱりダメだな、人として。

微笑んでくる友希那に胸を撃ち抜かれてるこの凶とか。

ていうかなんでこの子は首傾げてるの。そういう小首傾げる動作とかが原因だと思うんですけど友希那さん。可愛いけど。自覚ないの可愛いけど。

「じゃあ、その……デート？」

「……まあ行くのは都心のスーパーだけど」

「そう……久しぶりね」

「あー確かに。ここ最近忙しかったしな」

しみじみと呟く彼女に頷きを返す。

メジャーデビューをしてからの Roselia は、俺たちが予想していたよりも数倍は人気が出た。

包み隠さず言えば、出過ぎた。

友希那たちはもちろん、あくまで補助に回っている俺にさえ仕事が回ってくる始末。未だ高校生のあこも連れた事務所での打ち合わせは当たり前。バンド全体での練習も、回数は増えるし時間は多いし濃度が濃くなるしで忙殺されまくり。つい先週大きなライブイベントを終えて、ようやく落ち着いたような形だった。

……そう考えると申し訳なくなってきたな。

「……なんか、悪いな。折角久々のデートなのに買い出しとかで」

「いいのよ、普段は忙しいんだから」

「つて言ってもなあ……」

休日なのだからもつと大学生らしいデートは無かったものか、と一人後悔に苛まれる俺に、友希那はそつとテーブル越しに指を絡めてきて。

「私は構わないわ。奏人となら、どこでだって楽しいもの」

「……………」

……危ない。愛おしさが増して危うく朝食味のキスが生じるところだった。

まったく、俺の彼女はほんとうに心臓に悪い。

「……………」

「いや、照れる羽目になるのにこんなことしたの友希那」

「……悪いかしら」

「……もう、存分にやってもらって」

「……………」

「……あー、なんだ、急にごめんな」

「……別に、構わないわ」

嬉しいから、と言いながら照れたようにそっぽを向く彼女を見て、まだ慣れてないんだな、と苦笑して。

こちらを向き幸せいっぱいの顔をしてはにかむ彼女に、俺もまた微笑み返して日常を噛み締めたのだった。

「やっぱり二人で出掛けるのはいいものね」

ふふ、と上機嫌そうに微笑みながら俺の隣を歩く友希那。

すごい幸せそうな顔しながら歩いてらっしゃる……。

この子自分がどれだけ可愛いかわかってねえよな絶対。

豊かな銀髪も、その人形みたいな容姿も、高校時代からより女性らしくなったプロポーシヨンも、いよいよもって魅力的な女性の極地に達し始めているって言うのに。いやまあ、他にも高校時代と変わった

ところはある。深くは言わないけど。

そんなわけで、そろそろ彼女の俺への熱が冷めてしまうのではと危惧しているわけだが。

「こうして歩いてるだけでも幸せね」

「……………」

……………まあ、うん。まったく問題ないなこれ。ていうか大丈夫かこれで。将来が不安になる。いや現時点でも既に不安だけど。

でもあれか、俺がこれからも一緒に居ればいいのか。

「……………シャンプーなんか見て、どうしたの？」

「……………いや、シャンプー見てたっていうか隣見てたら心臓に悪いというか」

「？」

いやなんで分かんないみたいな顔してるんですかね。その顔が致命傷だって分かんないかなあ……………。

「……………今のが気に入ってるのだけど、変えた方が良いかしら」

「え、そこ俺の意見参考にされるの」

「だって奏人、よく嗅ぐじゃない」

「……………まあ、そうだけど」

「日本人は黒髪が好き、みたい言うし、髪には気を使っているつもりだから」

「へえ、そりゃ知らなかったな。でも俺は友希那のが一番好きだぞ」

「そういうところ、あなたって……………」

「ん？」

「……………負けた気分だわ」

「ええ……………」

半目でこちらを見てぷいっと頬を膨らませる友希那。怒っているのも可愛いとか死角が無いんだけどどうすりゃいいんだ。

「……………その、嗅ぐと安心するの？」

「いや街中でこの話続けるの正気か？さつき親子連れの人めっちゃ見てたぞ？」

「で、どうなのかしら」

「……まあ、一応」

「そう……」

「……」

「……」

「………そういえば、友希那も手握るの好きだろ。俺の匂いじゃ悪いからハンドクリーム香り付きのやつにするか？」

「………それでは意味がないわ」

「え」

「………」

「………なんだ、俺の匂いは安心するのか？」

「まあ、一応」

俺を真似るように言っつてドヤ顔をする友希那。可愛いなちくしよ
う……。

「手握るの、そんなに良いもんかね」

「………そうね、好きだと思っわ。だっつて」

絡めた手に力が入る。自然と、俺も合わせるように力を込めた。

「ほら、ちゃんと握り返してくれるじゃない？」

「………そっか」

「ええ」

言っつて、満面の笑みをこちらに向ける友希那。

つらい。俺の恋人が良い子すぎて生きるのがつらい。

珍しい彼女からの攻めに頬の熱を上昇させる俺の眼前、何故かその
当の友希那もまた顔を赤く染めて俯いて。

「………」

「………友希那？」

「………」

「………どうした？」

「………忘れてちようだい」

「………いや、無理だろ。今更恥ずかしがっつたっつてお互い様だぞ」

「………」

真っ赤になった顔を見られたくないのか俺の肩に額をぶつけてく

る彼女に苦笑して、俺は頬の熱さを自覚しながら食料品売り場へと足を進めた。

食事の後は二人順番に入浴して、しばらく曲作りに励んでから、就寝の時間となった。

「夕食、とても美味しかったわ」

「そりや何より。休日だし、少しは腕によりをかけないとだからな」

「……私も今度作ってみようかしら」

「ええ、大丈夫かよ」

「多分平気よ……多分」

「今なんか間がなかったか？」

「……」

「ねえちよつと待てなんでそこで目逸らすのやめて」

「……でも、いつも奏人が作ってくれてるじゃない？だから私も何かしようかしらって思ったのだけど」

「別に気にしなくて良いんだぞ？それに友希那も最近手伝ってくれてるし」

「……でも」

「だから、良いんだよ。好きでやってることだから」

「私の為だから？」

「ああ」

「……」

からかい混じりの友希那の問いにノータイムで答えると、彼女は暗がりでも分かるほどに顔を赤らめて、俺の腕を枕にして額をこちらのそれと合わせてきた。

「……ずるいわ」

「……何が」

「昔はそんな素直じゃなかったじゃない」

「友希那こそこんな甘えん坊じゃなかったぞ？」

「……困るわ」

「何にだよ」

「あまり、かつこよくなりすぎないでちょうだい」

「俺より友希那の方が問題だと思っただよなあ……」

「……なら、お互い様？」

「……まあ、そうだな」

同じ布団の中で、額を合わせたまま微笑む。

「友希那、腕枕って寝づらくないか？」

「そんなことないわ。とても安心するから」

「そんなものか……」

「奏人にもする？」

「頭乗せたら腕折れそうだから怖いよ俺は」

「そんなにか弱くないわ」

照れたように笑いながらポコスカと俺の胸にパンチをしてくる友希那。

なんでこんなに可愛いんですかねこの歌姫様。ちよつとスキンシップが激しい気もするが、同じ布団に入ってるあたり今更ということとで納得する。

「家具買う時に真っ先にダブルベッド買いに行ったのがなあ……」

「結局奏人もノリノリだったじゃない」

「……そりゃあ、まあ。あんな風に言われたらな。俺も嬉しかったし」

「……………」

「……………」

「……ねえ」

「うん？」

「……奏人は今、幸せかしら。こうして私と一緒に生活してて」

「……もちろん。ずっと言ってるだろ」

不安げな表情を浮かべる彼女の体を抱きしめる。

「俺は友希那に会えて、こうして二人で生活して。一番幸せだった」

「……そう、ね」

そう言っつて、友希那は俺の背中に回した腕に力を入れた。

うん、こうして甘えてくれた方が俺としても良い。

言葉にしないと分からないものだ。……色々と。

「……友希那こそ、今日は幸せだったか？」

つられて問いかけた俺に、彼女は腕の中で確かに頷いて。

「……ええ、勿論。あなたといると、毎日が楽しい」

「……そうか」

それは何より、と友希那の髪を撫でる。

「……好きだ、友希那」

「……私も」

俺の何回目かの告白に対してそう言葉を紡いでから、薄桃色の唇が寄せられる。

そうしてお互いに赤くなった頬に苦笑して、目を閉じた。

これは、そんな物語。

同棲している歌姫と穏やかに過ごす日々の記録。

2話

「……風邪だな」

「……………」

体温計を眺めながら俺が判決を言い渡すと、友希那はベッドの中から潤んだ瞳で恨めしそうにこちらを睨んできた。正確には俺の手に持つてる体温計を睨んでいるのかもしれないが。というかそうであつて欲しい。

38度1分。

見紛うことなく高熱だ。

「……一応、風邪ひかないように気遣つてたつもりなだけどな……」
忙しくて栄養バランスが崩れがちだったから、出来うる限りバランスの良い献立を組んだり。

手足や首を冷やさないようにと手袋や靴下、マフラーをプレゼントしてみたり。

自分なりに手を尽くしたつもりだったのだが、それだけでは足りなかったらしい。

「……奏人が気にする必要は無いわ」

こほこほと咳をしながら申し訳なさそうに目を伏せる友希那。

「……たまにあるのよ。こういう事」

「たまにつて……Roseliaの頃は滅多に風邪引かなかつたよな。むしろ初めてまであるんじゃないか？」

「……………」

「え、友希那？」

「……………」

「……いや待て、まさかとは思うけどRoselia作る前……て言うか俺といた頃たまに喉の調子悪い時あつたな」

「……………」

言うのと、友希那は痛いところを突かれたとでも言うように俺から顔を逸らした。

その表情が、彼女の心の内を何よりも雄弁に語っている。

ほう、なるほどなるほど。

「……………」
無言でその小さな額にデコピンを打ち込む。

「いたっ……………」

「馬鹿か。いやまあ友希那は音楽以外はポンコツだけど」

「…………随分と失礼な言い分ね」

「事実だろ。…………なんで風邪引いてんのに歌なんて歌ってたんだ」

「……………」

うーん、だんまりを決め込むか。

仕方がないので汗の滲む頬に貼り付いた髪をタオルで拭いてやる。

「…………楽しかったのよ。奏人と一緒にいるの」

「……………」

タオル越しに撫でると、友希那は心地良さそうに目を細めながらぼそりと告げた。

え、何それ。俺そんな乙女な友希那さん初めて聞いたんですけど。

あの頃の友希那は音楽至上主義で、ライブハウスでライブしてるバンドに飛び入り参加してはその実力で心を折った挙句、年上だろうがなんだろうがそのバンドメンバーを完膚なきまでに批判して号泣させたこともあった。…………あの後処理大変だったなあ。友希那は友希那で悪いことをしたと思ってなかったから尚更。

まあそんなこともあったから、その時は俺が彼女と対等に話せる相手であったのは分かっていた。ただ、その空間を彼女もまた心地良いと思ってくれていたのは予想外で。

「…………そうか」

「……………」

「……………いって」

「?どうして自分で頭を叩いてるのかしら」

「いや…………何でもない。ちよっと早い蚊だ」

「?」

おかしい。

今の友希那は体調が悪くて、俺が看病しているだけの筈だ。過去の

惚気を思い出す流れではない。

どうして俺たちはこの状況の中無惨にラブコメっているのだろう。「だいたい、それで喉壊したり死んだりしたら元も子もないだろ。やめろよ、絶対。ぽっくり逝ったら皆号泣するから」

「勝手に死んだことにしないのでちようだい」

「死にそうだから言ってるの」

「……………あなたも?」

「そりや泣く。なんなら後を追いかねない」

「……………そう」

友希那はこくりと頷いて。

「それなら、死ぬわけにはいかないわね……………奏人の泣き顔は、みんなに見られたくないから」

「そんな酷い顔だったのか……………」

げんなりする俺に彼女はくすりと微笑みを返し、それからこほこほと咳をした。

「だ、大丈夫か。ほら、背中さすってやるから」

「大丈夫よ、こほつ……………過保護ね」

「リサたちに連絡は入れとくから、とりあえず友希那は寝ててくれ」

「……………奏人は、大学に行かなくていいのかしら」

「まあ、元々そんなに講義入ってるわけでもないし、友希那は一人だと何も出来ないし」

「……………本音は?」

「ごめん、見栄張った。友希那が心配なので看病します。させてください」

半目でこちらを睨んでくる友希那。

おそらく俺が大学を休むことに納得していないのだろう。

無駄に真面目というかストイックというか……………

ここで友希那が悪いわけじゃない、と言っても彼女は受け入れられないに違いない。

「まあ、とにかくアレだ。さっさと風邪治そう。ボーカリストなんだから喉は大事にしなきゃダメだろ」

「そもそも風邪をひかない方がいいのだけど」

「そりやどうしようもないな。馬鹿じゃなきやみんな風邪はひく」

「迷信ね……」

「だから、今日は全力で風邪治してくれ。寝て起きてご飯食べて寝て」
「……まるで引きこもりじゃない」

「いやそうだけどそんな自堕落にはならなくていいから……まあそういうことだから、友希那。俺も療養を全力で手伝う。どんなワガママも聞くから」

「ワガママ？」

「風邪の子特権って言うんだけど。風邪ひいてる時はどんだけ甘えてもいいらしい」

これはリサ情報だが、どうやらそういう不文律があるらしい。

かく言う俺も昔は親に果物をねだったりした。

友希那ももう大人だが、風邪の日くらい甘えん坊になってもいいだろう。

……いや、最近は常に甘えん坊みたいな感じだけど。全然風邪とか関係なく甘えてくるけど。これがまた可愛いから困る。

「……看病してもらえただけでも十分なのだけれど」

「そこは気にする必要ないんじゃないか。友希那だって俺が風邪ひいたら看病してくれるだろう？」

「それは、そうだけど……」

むう、と難しそうな顔をする友希那さん。

……いやそうか、看病してくれんのか。

俺が看病するために練習休むのは反対なのに自分の立場だと良いのか……ノータイトム返答すぎてびっくりだよ、まったく。

「……………」

「いや、いつまで考えてるの。適当にして欲しいこと言えばいいだろ」

「……………あなた、私のワガママなら大抵聞いてくれるから」

「……………」

そうだった。……いや自分でも甘い気はするけど断るのは無理。

目の前の歌姫に甘えられてワガママ言われたら聞く。誰だってそ

うする。そもそも友希那はあんまり甘えてくれるわけじゃないのが拍車を掛けてる気もするけど。

俺が友希那の甘やかし具合に頭を抱えている間、彼女はやはり難しい顔で何かを考えていたが、やがて。

「じゃあ、その……」

「お、なんかあるか」

「……ゼリーが、食べたいのだけれど」

「ゼリー……」

「……ダメ？」

「……………」

「か、奏人？」

「……悪い。ゼリーな。その辺で買ってくる」

言つて、俺はそそくさと寝室を出て玄関へと向かった。

「何なのあいつ……殺す気かよ……」

いや何アレ。掛け布団から目だけを出した状態から至近距離で放たれた一撃に心臓が貫かれたんですけど。ズルじゃんあんなの。

「はあ……心臓に悪い」

致命傷を受けて、それでも何とか持ち堪えた俺は近所のスーパーへと急いだ。

「入るぞ」

部屋の前で声をかけてから入室すると、友希那はスマートフォンを操作していた。

「おかえりなさい、奏人」

「おお、ただいま……何見てるんだ？」

横から覗き込むと、そこには先日俺たちのバンドが公開した曲のMVが流れている。

「せめて音楽の勉強はしようと思って」

「なるほど……ほんとに真面目だな。俺としては寝ててほしいだけ

ど」

「奏人と作って、Roseliaが歌った歌よ。もつと高いところを目指せる筈だわ……それで、ゼリーはあった？」

「ああ、買ってきたけど今食うか？」

「ただどうかしら」

「はいよ。桃とみかんとぶどうあるけど」

「桃をお願い」

「よしきた」

「……………」

「友希那？」

「……………」

「なんだ、実物見たら食欲失せたか？食べたくないなら片づけとくけど……」

「いえ、そうではなくて」

「じゃあ何」

「……………」

友希那は無言のまま、スプーンと共に差し出したゼリーと俺を交互に見つめるだけ。

……いや、まさか。流石にうちの歌姫はそこまでバカップル指数の高いことは出来ない。まあでも、一応……。

「……………あむ」

「おお……」

震えながらゼリーを乗せたスプーンを差し出すと、友希那はぱくりとそれを口にした。

餌付けに成功した時のような感慨がある。動物に餌付けしたことなんてないけど。大人しい友希那が小動物みたいだからかもしれない。

「早く、もう一口」

「……………はいはい、分かったから歌姫様」

明らかに風邪だけのせいではない赤く染まった頬に、半ば愛おしさと半ば呆れを感じてゼリーを掬っては友希那の口に運ぶ。

照れるんならしなきやいいのにと思わないでもないが、俺としては役得なので何も言うまい。

「……うまいか？」

「ありふれた味よ」

「そりやそうだろうな……」

「……でも、冷たくて美味しい」

「……………」

なんだろう。

今日の友希那はいつになく色つぼく見える。役得つて言うか目に毒になってきた。

「……はむ……ん……………」

ついに脳内でお経を唱え始めた俺を他所に、友希那はゼリーを食べ進め、あつという間にカップを空にした。

「お、お粗末様でした」

「……ごちそうさま」

言つて、友希那は上機嫌そうにこちらを見てきた。

「な、なんだよ」

「いえ、たまには風邪をひくのもいいものだと思って」

「……馬鹿言うなよ」

「あなたが風邪をひいた時が楽しみね」

「……………」

明日から本気で健康に気をつけよう。

友希那に甲斐甲斐しく看病なんてされた日には、熱にかまけて何をしでかすかまるで分からん。

「……ご飯作ってくるから。ちゃんと寝てろよ?」

風邪ダメ絶対と、そう心に誓いながら俺は寝室を出た。

「…………ごちそうさま」

「お粗末様でした。ちゃんと食べて良かった」

昼飯にと俺が作ったうどんを朝のゼリーをリピートする形で食べた友希那は、枕にぼすんと頭を預けた。

正直食欲がなかったらどうしようかと心配だったのだが、それが杞憂に終わって一安心だ。明日には治ってるだろう。

食欲が満たされたことで今度は睡眠欲が顔を出したのか、

「ん、ふぁ……」

「寝るか、友希那？」

「ごめんなさい、少しだけ眠るわ」

「少しと言わずたくさん寝ていいから。俺は……」

食器を片しとくから、と言って立ち上がろうとしたその時、シャツの端に抵抗を覚えた。

視線を移せば、友希那の細い指がシャツを遠慮がちにつまんでいて。

「……友希那？」

「……………」

返されたのは無言。

とはいえ、俺と友希那はもう数年の付き合いだ。さすがに慣れた俺は何も言わず食器の乗った盆を床に降ろしてからベッドの側に腰を下ろした。

それから伸ばされてきた彼女の手を握り、その顔を見つめる。

見れば見るほど綺麗な顔してんな。可愛い。

「……風邪、移らないと良いけれど」

「移るんなら昨日の時点で移ってるだろ。一緒に寝てるんだから」

「それは、そうだけど。その、今日も隣で寝てくれるのかしら」

「邪魔じゃなければな」

「……そんなことないわ」

「ん、じゃあ良い。隣で寝させてもらうから」

「……………」

「どうした？」

「……幸せだって、そう思ったの」

「俺といることが？」

「ええ、勿論」

「……変な趣味してるな」

「奏人こそ」

くすりと微笑んで、それから友希那は絡めていた指に少し力を込めた。

「……私こそ、あなたの邪魔になってないかしら」

「そんな訳あるか」

「本当に？」

「もちろん。家事自体も楽じゃないんだけどな」

それに加えて二人で音楽活動で忙しかったり、朝が弱くて風邪もひく彼女の傍にすることが。

「全然辛くないんだよ。友希那のためだと思うと」

「……そう」

凜とした声がほどける。

瞼を重そうに持ち上げながら、うとうとと友希那はおぼろげな表情になって言葉を紡ぐ。

「たくさん、甘えてるから、これ以上は、ダメになる……から……」

最後まで何とか言い切って、友希那は寝息を漏らし始めた。

「……ほんと、相変わらず」

相も変わらず、ストイックな歌姫だ。

普段から甘えてはいるものの、そんなのダメでもなんでもない、ごくごく普通の範疇だろうに。

「すう……」

朝のハグも、一つの布団で一緒に寝ることも、ゼリー一つ食べさせてもらうのも甘えだと思う、そのいじらしさがどこまでも愛おしい。

「……いつだってやってやるよ、そのくらい」

そう言っつて小さな手を握ってやると、淡く握り返してきた。

まあ、うん。もっと甘えられても俺なら受け入れちゃうんだろうけど。困るんだよな、これで本人としては無意識なのがまた。

「……惚れた弱みってやつか」

しかし困った。夕飯の買い出しに行こうと思っていたのだが、この

ままでは身動きが取れない。

……仕方ない。

ここは頼れるバンドメンバーに助けを求めるとしよう。

ポチポチとスマートフォンを触りながら、俺は安らかに寝息を立てる眠り姫兼歌姫を眺めていた。

そんなこんなで。

一夜明けると、友希那の風邪は無事完治した。

「迷惑をかけて悪かったわ」

「いや全然……」

それはいい。それはいいのだが。

「どう？調子は」

「最悪だ……」

バトンを渡すように、今度は俺が風邪をひいた。

いやまあ、予想していなかったと言えば嘘になる。ほとんど熱も冷めていたし咳もなかったからと油断して友希那の隣で寝たのが確実に悪かった。

「本当に隣で寝なくても……」

「おっしやる通りで……」

発端は友希那のワガママではあるが、それを追求するのはさすがに人としてダメだろう。

そもそもそのお願いを聞いたのは俺だし、後悔はない。幸せそうに笑ってたもんな、友希那。好き。

「……風邪だからストッパーが外れてるのかしら」

「え、何。声に出てた……？」

「……………」

「……………まじか。……………死にたい」

羞恥に天を仰いだ俺に、友希那は構わずれんげを差し出してくる。

「ほら、食べないと治らないわ」

「……………いや、自分で食べるから」

「……あーん」

「いや照れるんならやらなくても……」

「ほら」

「……んむ」

予想通り、友希那は熱心に看病をしてくれている。

お粥を作ってくれるとはつゆにも思わなかった。

いや、まあ。慣れてないのは分かるけど、それでも嬉しいもんは嬉しい。
しい。

「私も食べようかしら」

「ああ、昼飯用に作ったんだっけか」

「そうよ。一人も二人も変わらないから。……いただきます」

「……」

「……奏人。私これ砂糖と塩間違えてるじゃない。なぜ言わなかったの」

「いや、友希那の初手料理だから。何だって美味しいだろ」

「……作り直してくるから、食べるのやめてちょうだい」

「言っても元からそんな量入れてないから。ほんのり甘いくらいだし全然平気だ」

「変なところで頑固ね、あなたは」

「まあ、慣れてないことさせてる俺が悪いのもあるからな」

「……気にしなくて良いのよ。お互い様だから」

「友希那……」

「……それに、私の過失が大きいし」

「うん？」

「何でもないわ。それより奏人、口を開けて」

「……あーん」

「水も用意したから、飲む？」

「おお、さんきゅ」

「……」

「……あの、友希那？」

「……な、何かしら」

「そんな見つめられると飲み辛いんだけど」

「……何のことかしら」

「……まあいいけど」

渡されたペットボトルを再度傾けると、再び俺をじっと見てくる友希那。

何見てるんだ一体。

そしてその時折唇に触れる所作の意味は何だ。

疑問に思いながらも、

「奏人、寂しくないかしら。手を握ってあげるわ」

「……頼む」

至れり尽せりな状況に、俺は思考を放棄するのだった。

3話

「ん、んんっ……」

ふと目が覚めた。

食事と入浴を終えてから就寝して、既に二時間ほどが経過している。

彼女と同じ布団で寝る緊張からか、あるいは枕を新調したことからか。なににせよ眠りが浅かったようだ。

水でも飲もうとベッドから降りようとした矢先、隣にいたはずの彼女の姿が無い事に気づいた。

周りを見渡した先、マンションの一室に隣接したベランダに銀色の髪が煌めいて。

「友希那?」

「あ……」

驚かせないようゆっくりとベランダへ向かった先、彼女は振り返って笑みを溢した。

「ごめんなさい、奏人。起こしてしまっただかしら」

「いや、勝手に起きただけだ。何してたんだ? 街でも眺めてたのか?」

「それもあるけど……星を、見たくなつて」

「星?……ああ」

彼女につられて夜空を見上げて、言わんとすることに気がついた。

「今日は、七夕か」

眩いた俺に頷いて、友希那は頭上で輝く星空へと目を向ける。

その隣に立ち、俺もまた彼女の見ているものを見る。

「綺麗なもんだな、天の川」

「そうね、季節の都合上良く見えないことの方が多いし、それに……」
「それに?」

「……あなたと見ているからかしら」

「……そういう小恥ずかしいことよく言えるな」

「今は二人だもの……それとも、奏人は違うのかしら」

「んなわけあるか。……綺麗だと思うよ、俺も」

ふふ、と軽く笑う友希那。可愛い。

というか即答で返してしまっただが、おそらく彼女が求めている答えとは違うものだ。いや文言としては合ってるかもしれないが対象が異なる。綺麗だと言って欲しかったのは優しげな顔で星を見上げる友希那本人ではなく、頭上で広がる星空についてだろう。

そんなことを考えながらその可憐な横顔を眺めていると、
「奏人」

と。そう俺を呼びながら、彼女は穏やかな目でこちらを見て。

「あなたと一緒に居られることが、本当に嬉しい」

噛み締めるように、そう告げながら淡く微笑んだ。

——綺麗になったと思う。

俺が好きになった時よりも、ずっと、確実に。

それはきつと、彼女が自分の音楽に答えを見出せたからで。

俺の自惚れでなければ、俺を好きになってくれたからでもあるだろう。

「……七夕、か」

自分で考えといて照れくさくなって逸らした話題に、彼女はすぐに乗ってきてくれた。

「ロマンチックよね、一年に一度だけ会うなんて」

「俺は毎日会ってる方がいいと思うけどな」

「一年に一度、会いたい会いたいと思いを募らせるなんて、素敵だと思わない？」

「……まあ、たしかに」

「……もし私たちがだったら、どうかしらね」

「そうだな……」

彼女の質問に答えを探しながら、視線を件の天の川に移す。

織姫と彦星。

きつと今頃、一年に一度だけの邂逅を心から楽しんでいるのだろう。

……一年に一度ではなく、三年に一度だったら。

五年に一度なら。

十年に一度なら。
百年に一度なら。

いつかは、彼らも恋を諦め、川のほとりから去っていくのだろうか。
向こうへ手を伸ばせば届きそうなその場所にいることが、苦痛になるのだろうか。

その恋を諦めようと思って、手の届かないような場所へ向かおうとするのだろうか。

……そうして、恋心は潰れるのだろうか。

……ああ。やっぱり。

「……………やっぱり、俺はずっと会っていたいな。川を泳いででも会いに行くと思うぞ」

そうなるくらいなら、俺は友希那とずっと一緒に居たいと。悪戯混じりの声でそう呟いて、隣の彼女を見ると。

「……………友希那？」

そこには、夜闇の中でもはっきりと分かるほどに顔を真っ赤にした愛しの歌姫がいた。

「その……………」

「ん？なんだよ」

「えっと……………」

「珍しいな、友希那が言いごもるなんて」

「……………今のは、プロポーズと受け取っても、良いのかしら」

「……………」

そう、かき消えそうな細い声で告げられた言葉に、思考に空白が生じた。

なるほどなるほど。プロポーズとな。プロポーズね、いやまあ結婚を考えていないと言えば嘘になるけど……………は？

「い、いやこれは物の例えでだな、そういう意味は無くて…」

「違うの？」

「……………違うは、無いですけども」

ずい、と顔を寄せてきた上目遣いの友希那に頬の熱が上昇するのを自覚しながら、なんとか言葉を返す……………いやちよつと待ってやばい。

なにがやばいって至近距離の友希那がいつも以上に色っぽい肌
白いし柔らかいし良い匂いするしで理性が今にも音を立てて崩れそ
うだ。もってくれ俺の理性。

「……今夜は、月が綺麗だな」

「……………」

理性の崩落を抑えながら結果としてなんとか紡いだ言葉は、万感の
思いを込めた告白の言葉で。

鼻先がくつきそうなほど近づいた彼女の表情が、驚いたものに変
わる。

それを認識したと同時。

「今更ね」

言つて、顔の距離をそのままに彼女はこくりと頷いて。

「あなたと見るものは、なんだったって綺麗よ」

そう、たしかに言葉を返してきた。

一瞬呆然と置いていかれた思考に一步遅れて、彼女への想いが溢れ
る。

「……友希那」

「……奏人」

お互い、ほぼ同時に名前を呼んで、それからそつとその瞼を下ろし
た。

「大好きよ」

と、彼女はそう呟いて。

俺は満点の星空の下、彼女と唇を触れ合わせるのだった。

挿話三

「……………」

腹が、減った。

そんな自覚と共に、俺はぱちりと瞼を開いた。

時刻は11時半。就寝から既に30分ほど経過している。

「夕飯、ちゃんと食べたんだがなあ……………」

大学生となった今でも、未だ育ち盛りということなのだろうか。

そつと、右隣を盗み見る。

「……………すう……………」

俺が寝ているすぐ隣で、眠り姫は寝息を立てていた。…………この眠りの深さなら起こしてしまうこともないだろう。

そのいつ見ても可憐な寝顔に思わず笑みをこぼしながら、俺はそつと寢室を抜け出した。

「…………お、あった」

台所上のスペースを物色して、インスタントラーメンを取り出す。

手頃な価格でありながらそこそこのポリウムもあるこのインスタント食品は、まさに現代のマスターピースと言える…………健康面に目を瞑ればだが。

「前はずつと食ってたんだけどな……………」

一人で暮らしていた当初は、自炊なんて面倒くさいとか何とか言っ
てインスタント食品ばかりを食べていたものだ。

あれはあれで美味しかったのだけど、友希那と会ってから自炊をす
るようになった。健康に気をつけようと思ったのもその時だ。

…………まあ、うん。友希那にちゃんと美味しいの食わせたというのが7
割くらい占めてるけど。一緒に食べに行ったりするとよく笑ってく
れたからだけど。

我ながらチヨロすぎるな……………」

「…………満たされてるなあ」

お湯を注いで蓋に重しを適当に乗せてから、先ほど出てきた寢室を

傍目に思わず眩いた。

二人で大好きな音楽をして。

二人でささやかな幸せを噛み締めて。

二人での将来に、思いを馳せて。

「感謝してもしきれないよな」

あの日。あの冬の日に彼女と出会えてなければ、俺はこの幸せを今堪能することは出来なかったのだから。

「……………ありがとう」

あの日あの場所にいた友希那にも、彼女と出逢わせてくれた運命にも。

あともう少しで出来るであろうカップラーメンを見ながら眩いて、珍しくそんな感傷に浸っていると。

「……………何があるがとうなの？」

「うわっ!？」

突然耳元で囁かれた声に、思わず悲鳴を上げた。

このエンジェルボイスはまずい……………頭くらくらする……………。

「友希那……………驚かせないでくれ」

「随分と楽しそうなことをしているわね」

なんとか耐えて振り返った先には、パジャマ姿の美少女がいる。同居人である湊友希那は、眠い目を擦りながら俺の後ろに立っていた。

「起こしちゃったか?悪い、少し小腹が空いて……………」

謝罪の言葉を告げる俺に、友希那は申し訳なさそうに顔を俯かせた。

「……………やっぱり、色々と任せすぎたかしら」

「あ、いや違う。家事は俺がやりたくてやってるから。これはその

……………ほら、まだ育ち盛りだから」

「……………そう」

苦しい言い訳をする俺に、友希那は安堵しながらも目を細めて。

それからぎゅっと、こちらに抱きついてきた。

「ゆ、友希那?」

「……………」

身を固くするこちらに構わず、感触を確かめるかのように俺を抱きしめる友希那。

おかしい。俺の同棲相手はバカップル指数がこんな高くない……あ、これあれだ。寝起きの友希那だから甘えん坊なんだ。

こう、なんだろうな……幸せなんだけど、なんだろうな、こういう普段なら恥ずかしいことをポンポンやってこられると俺の心臓もたないし俺だけ恥ずかしいのがなんか……。

あれ、やつぱりおかしくないか？この子も俺に惚れてるんだよな？平等に恥をかくべきでは？

「ええ、確かに。縦はともかくとして、少しくらい横に育った方が抱き心地はいいかもしれないわね」

ほら、もう笑顔でこんなこと言っちゃってるもん。絶対寝ぼけてるもん。普段こんなこと言ったら自爆してるはずなのに……。

誰だよこんな対人兵器ほったらかしにしたの。近距離爆撃食らって致命傷の男性がいるんだけど。

……どつちも俺だから何も問題がなかった。

「……よ、横はまあ、俺が痩せ型だからだろうけど……縦はどう困るんだ？」

俺の身長はこの歳の平均くらい。

もう少しスラツと高い方が、隣に立つ友希那としても嬉しいんじゃないだろうかと。

そう思っつて、慌てながら尋ねたのだが。

問うた先、友希那はそつと爪先立ちをして。

「……………」

一瞬、俺の唇に柔らかな感触を与えてきた。

「…………ほら、ちようどいいでしょう？」

「…………そう、だな」

気がごちなく頷きを返す俺に、頬を赤くしながら満足気に微笑む友希那。

辛い。俺の恋人が可愛くて生きるのが辛い。

なにこれ。なんなのこれ。俺こんな小悪魔系友希那さん知らない。

こんな攻め攻め友希那さんの耐性俺ないんだけど。

困る……マジで困るこれ……。

「……友希那」

「え？ふわっ……」

愛おしさが溢れて、思わずその華奢な体を抱き寄せた。

「ありがとな、友希那。俺のことを想ってくれて。満たされてるなって、そう思ってたんだ」

誰よりも愛おしい、『かつて孤高だった』歌姫へ心からの感謝を述べる。

「やっぱり俺には友希那が必要……あれ、友希那？」

「あ……う……」

え、ちよつとこの子めつちや顔赤い顔赤いって。もしかして目が覚めたか？……このタイミングで？

「お、落ち着け友希那。大丈夫だから。恥ずかしいことしてたつつつてもここには俺以外ないから」

羞恥でプルプルと震える肩を優しく叩きながら言った俺に、

「……………っ！」

友希那は顔を茹蟠のように真っ赤にしながら、俺の腕の中で胸板にぐりぐりと額を押し付けてきた。

「まったく……」

ほんと攻めに弱すぎる。

こう、寝ぼけるたびに毎回自爆するのもまた可愛いんだよな……今のこれは多分俺からの攻めも原因だろうけど。

いやまあ普段からずっと可愛いし見慣れてるとはいえだ。可愛いもんは可愛い。世界の真理だからこれ。

それでいてしっかりしてて、良い子で、優しくて。

……やばいな。良いところしか見えない。これが惚れた弱みつてやつか……。

そう考えている間にも未だ俺の胸板に頭を預ける友希那に愛おしさを抱きながら、俺はその頭を撫でるのだった。

「……………ずるずる」

「……………」

深夜のリビングで、ズルズルと音を立てながら麺を啜る。そしてそれを目の前で見て複雑な表情を浮かべる友希那。やだ、視線が辛い……。こう、俺の体を心配してくれてるからだとは思うからありがたいはあるんだが。

……………食べにくい。

「……………ちよつと食べるか？」

「別に、食べたいわけではないわ」

「だよなあ」

友希那はあまりこういう食べ物を好まない。彼女の見た目だけ見てもジャンクフードとかインスタント食品なんて好んで食べるようには見えないから、当たり前と言えば当たり前なのかもしれないが。

「奏人が何考えてるか当てるわ」

「……………何だよ」

「反例は紗夜よ」

ふふん、とドヤ顔をしながら言う友希那。

すげえなこの子エスパーかよ。

いやまあ、確かに。あんないかにもクールビューティーな見た目と声と性格とでポテト大好きなんて想像できないけれども。

……………待てよ。

「そう考えるとアレか、友希那にも見た目からは想像つかない趣味趣向があるかもしれないってことだよな」

俺の知らない友希那の趣味か……………なんだろうな。意外と遊園地とか好きだったりするのか？騒がしいところは好んでいかなそうないメージがあるけど。今度連れて行ってみるか……………。

と、そこまで考える俺の眼前で、眼前の友希那は顔を赤らめながらこちらを見ていて。

「それを私に言わせる気なの？」

「……………いや、うん。知ってたわ」

「……私が甘えるのは奏人だけだわ」
「……………」

普段の彼女からは考えられないような細かい声で告げられた言葉に、心臓が大きく跳ねる。

そうだな、クールな見た目してる友希那が猫好きなのに俺に対してはもろ猫みたいになるのイメージつかないもんな。ついでに自分でそんなこと言っておいて恥ずかしがるのもいつものことだ。……可愛い過ぎるでしょこの子。

「恥ずかしがるなら言うなよ……せつかく目逸らしたのに」

「……言わなきゃ分からないこともあるでしょう？」

「それはそうだけどな……」

俺の言葉に顔を真っ赤にしながらも嬉しげにはにかんでみせる友希那。

「……………」

危ない。危うく醤油スープ味のキスが生じるところだった。

「あ……ふふ」

せめてものお返しとばかりにテーブル越しに手を繋いでみれば、友希那は上機嫌そうに笑ってテーブル下で裸足を触れ合わせた。

「……奏人」

「うん？」

不意に、友希那が呟いた。

「私も、感謝してるわ」

「……ほんとに珍しいな、友希那からそういうこと言うの」

「たまには考えることもあるわ。Roseliaとしての活動をしなかつた自分や、あなたと出会わなかつた自分を。だから私もきつと、満たされているのよ。十分すぎるくらいに」

いつもの友希那からは考えられない弱々しい声に、耳を疑った。

その達観したような儂げな瞳に、胸が締め付けられる。このまま消えてしまうんじゃないかと、そう思わせてしまうようなアンニュイな表情に、無意識のうちに握っている手に力を込めた。

「……奏人？」

「ダメだぞ」

「……何が？」

「今だけで満足しなくて良い。これからもずっと、友希那が求めてくれる限り俺は隣にいるから」

友希那が驚いたように目を丸くした。

らしくないのは分かっている。でも俺は決めたのだから。

「一緒に幸せになりたい。一緒に音楽をしたい。だから……」

だからどうか、幸せそうに笑ってくれと。

心のうちを、そう吐露し切る前に。

「……籍」

俺が望んだような、幸せそうに笑う友希那が告げた言葉に、紡がれた言葉が断ち切れた。

え、なんて言った？

せき？籍？いやいやそんなまさか。

「……え、と。友希那さん？今なんて」

「だから、籍」

「俺たち大学生だけど」

「……減点ね」

「……」

むす、と一転して不機嫌そうな顔で言葉を返す友希那に、げんなりとしながら俺もまた半目で返す。

「……不意打ちだろ」

「それはそうだけど、きっぱりと言って欲しかったわ」

そう言いながらも、言葉と反対に表情は晴れやかだ。……どうやら一本取られたらしい。……まあ、いいか。幸せそうだし。これで許しちゃうのが俺が甘いところだよ、反省しろ俺。

小さくため息を吐いて、俺はその華奢な手を両手で包み込む。

「今はまだな」

「……『まだ』？」

「ん？そうだけ、ど……あっ」

あれ、これ墓穴掘った？

「……私は、別にいつでも」

「い、いやこれはそのだな、言葉の綾って言うか流石に大学生のうちは早すぎるって言うか……」

「そ、そう……」

手を繋いだまま、お互いに目を逸らす。……いや気まずい。何この初々しいカップル感。中学生か俺たち。リサがいたら揶揄われて穴を掘ってでも隠れた。絶対。

「……その、すまん」

「い、いえ……からかった私も悪かったから」

「友希那」

「何かしら」

「……そういう言葉は、もっと慎重に選ぶから」

「……」

「だから、待っててくれ」

「……遅すぎたら、私からするわ」

「そこらへんの甲斐性は俺にもある。できるだけ早く決めるから」

「怪しいわね」

言って、絡ませた指に力を込める。

「でも、期待しているわ」

「任せてくれ」

その可憐な笑顔に胸を撃ち抜かれながらも返した俺の言葉に、友希那はどこか安心したような笑みを浮かべて。

「……待っているから」

そう、蕩けそうな声で語りかけてきたのだった。

番外編 花吹雪

桜。

いつの世も春の、はたまた日本の美しさの象徴として人を魅了し続けてきた木。

花見という国特有の文化に日本国民が心を躍らせていた頃。

俺もまた、彼女と二人桜を眺めていた。

「……………」

二人、並んで座るのは持参したレジャーシートの上。

見渡す限り続く山桜の樹々は、春の夜風に吹かれさあさあと心地の良い音を奏でている。

電車でおよそ一時間半の、とある山。

わざわざ足を延ばしただけあって、夜桜を見るには絶好の場所のように思えた。

「……………」

隣に座る友希那の顔は穏やかで、慈しみさえ感じる眼差しを山桜へと注いでいる。

美しいと、そう思った。

ずっと隣にいて、目を閉じれば浮かんでくる彼女の瞳。

安らいだ微笑。

三年経てど変わらない、永遠にも思える不変がそこにはあった。

「……………何？奏人」

視線に気がついたのであろう、こちらへと顔を向けた友希那は微笑を滲ませる。

「桜よりも私を見て楽しいのかしら」

「……………楽しいって言うか、まあ。見惚れてはいた」

照れ臭さよりも見栄を張ることを嫌がるのは、彼女の前だけのこと。

友希那の前では素の自分でありたいし、勝手に素の自分で振る舞っ

ている。

いつだって、俺は彼女の前で自分を偽ることはできないのだ。

「……………」

気恥ずかしい言葉に、友希那は何も言わずただこちらの肩に頭を乗せてきた。

心地よい重み。

そこにかけられた信頼も、或いは愛情も、背負っているような感覚。

「…………友希那は、桜が好きか」

何の気無しに、口を開いた。

「嫌い…………ではないけれど」

「特別好きではないって感じか」

「そうね」

言つて、友希那は俺に向かつてはにかんでみせる。

「でも、これからは好きになれそう」

「…………そりゃ、ありがたいな。誘った甲斐があつたつてもんだ」

「奏人は、桜が好きなのかしら」

「俺は…………ああ、俺は好きだよ、桜。夢い感じがどうにもな」

言つた俺の言葉に、友希那はふむ、と頷いて。

「じゃあ、月は？」

「月？…………あ、そういえば今日は満月か」

「満月と夜桜。いい景色じゃない」

「こちらに身体を寄せたまま、友希那は呟くように言う。

「覚えている？」

何を、なんて訊かなくても分かる。

「掘り返されると恥ずかしくなるんだが」

「あら、私は嬉しかったわよ。『二人で見ればいつだって見る月は同じだろ』、だったかしら」

「…………忘れてくれ」

「嫌ね。人生で一番嬉しかったし驚いたんだから。そうそう忘れないわ」

「…………負債の返し方は」

「安心して。奏人ならすぐに返せるものだから」

「そんならいいけどな」

くすりと微笑む友希那に、目を奪われる。

友希那は、この半年で驚くほど綺麗になった。

いや、ずっと昔から綺麗だったのは間違いないけれど。

俺が彼女を恋人として見るようになったからだろうか。

笑顔が増えた。恋人らしい行動にあたふたする初々しさは無く

なった。

Roseliaも変わった。

頂点を目指すその意志は変わらない。寧ろ強くなったと言っている。

それでも、その在り方は変わった。ただ上を取るためだけに存在しているわけでは無くなった。五人の輪には笑顔があつて、調和があつて、その真ん中には友希那がいる。

これからもきつと変わっていく。

彼女も、彼女を中心としたRoseliaも。

それでも。変わらない彼女の笑みが、声が、手の温もりが。俺の心を掴んで離さない。

だからこそ、だろうか。

「……友希那」

「なに、奏人」

「……好きだ」

「……………」

友希那は無言で俺の手を握った。

隣で俺を映す友希那の目が、不安そうに揺れながら俺に問いかけてくる。

——不安になったの？

ああ、その通りだ。

彼女の心に確かに俺は居る。二人で前へ行こうとしている。それは間違いなく自覚している。

それでも。綺麗になっていく彼女に、不安を覚えた。

喩えば、目の前の桜のように散ってしまいうんじやないだろうか。それが俺の想いか彼女の想いかは分からないけれど。彼女が変わってしまっても、俺は傍に居ることは出来るのだろうか。

そんな、いつかのセンチメンタルな思考とは少し違った感情に、「離れないわよ」

彼女は小さく呟いた。

「絶対に離れない」

泣きそうになる程愛おしい声。

しかし、それは力強い誓いのようにも聞こえた。

「分かった？」

優しげな笑みのまま、彼女は問うてきた。

何を、なんて聞くのは野暮だ。

「……悪かった。これじゃ前と一緒だ」

自らのやったことを謝罪した俺に、彼女はにっこりと微笑んで。

「それなら良かった」

そう、見惚れるような笑みで返してきた。

「……似合うな、山桜」

「?どういうこと?」

「いや、なんでもない」

さつきまであんなに格好良かった彼女が、きよとんと首を傾げるのが少し可笑しくて。

くすくすと笑う俺の右腕を、友希那はむっとしながらぎゅう、と抱きしめた。

「いや、夜桜と満月あるのにどうして俺を見上げてるんですかね友希那さん」

「月と桜には悪いけど、見上げるなら奏人の方が良いわ」

「……そうか。見上げられるほどの身長差があつて良かったよ」

いつも通りのやり取りが、後ろ向きな思考をすっかり消し去った。自分自身の単純さに苦笑し、それから見つめ合う。

美しい金色の瞳は、月明かりの横光と共に俺の顔を覗き込んでいる。

不意に彼女はその目を閉じ、ついと顎を上げた。
暗黙の了解。

俺と彼女だけの合図を確かに受け取って、その淡い薄桃色の唇に唇を寄せる。

一瞬。

一瞬触れ合うだけの、挨拶代わりのようなキス。

それを、友希那は好んでいた。

「……………ねえ、奏人」

「なんだ、友希那」

唇へ手を当て、その頬を淡く染めながら、彼女は桜と、それから月へと目を向ける。

「今夜は、月が綺麗ね」

「……………今夜も、だろ」

俺もまた、月を見上げる。

燦然と輝き桜を照らす月へ、その想いを込めるのは少しばかり不安があるのだが。

「……………これからも、ずっと綺麗だろうよ。友希那と見るものならなんだって」

「……………そうね」

頷き、すり寄ってきた彼女の肩を優しく抱く。

壊れてしまいそうなほど華奢な体。

今なお俺を魅了してやまない大切な人。

その温もりを感じながら、桜へと目を向ける。

やっぱり、この気持ちは桜に喩えないようにしよう。

「来年」

「ん？」

「来年もまた、桜を見に来ましょう」

「……………来年だけか？」

「……………分かってるくせに」

言って、指を絡ませてくる。

「また、春が来るたびに桜を見るか」

「今度はリサたちも誘う？」

「……いや、2人で来よう」

「そうね。でも、花見はいつかしましょう」

「それは、もちろん」

互いに頬を朱に染めながら繋げる他愛もない会話。

その温かさに触れながら。

どうか彼女と見るものが、いつまでも美しくありますようにと、
そ
う天上の月に願った。

湊友希那生誕記念 (21 10 / 26)

10月26日。

放課後のライブハウスの一室に、心地よい音を奏でる声が入屋の中に響いていた。

ずっと——具体的にはおよそ二年間聞いてきたそれは、その長い時を経た今でも美しいまま。

「視線の先には、この声の出元。

聴くこちらの心を魅せる音を響かせるのは、細く綺麗な形の喉。

俺の作った曲に彩りを与える銀髪の歌姫は、額に汗を滲ませながら必死にマイクに向かって口を開いていた。

「……………」

友希那は絶え間なく喉を震わせていたが、やがてマイクから口を遠ざけ、やや前のめりだった姿勢を起こしてから、ふうと一つ息をついた。

「お疲れさん」

弾いていたギターを提げ、それから労いの言葉と共にタオルを投げた俺に、友希那は珍しくポニーテールにまとめた髪を揺らしてから満足そうな微笑みをこぼした。

「相変わらずいい曲を作るわね」

「そりやありがたいな。友希那の喉も万全だし次のライブに間に合いそうじゃないか？」

「そうね、リサたちも各自で練習を進めているでしょうし、今度は合わせる練習にしましょう」

人一人分ほどの間を開けて俺の隣に座った友希那は、手に持った楽譜を一瞥してから、心なしか寂しそうな笑みを浮かべて。

「……………今日リサたちが計画してくれた誕生日会、あなた本当に行かないの？」

「いやさすがに女子会にしとけ……………男が行くのは俺もみんなも気まずいから」

「そう……」

友希那が、はあと嘆息を漏らす。そういう顔されると申し訳なさと、もしかして行くべきかと悩んでしまうのは俺が彼女馬鹿だからだろうか。

……しかし、ここまで引きずるのもまあ珍しい。普段からこういうことはメリハリつけてるはずなんだけどな友希那は。

とまあ、そうなるとアレだ。誕生日に初めてどこかの誰かとの二人つきりになったから浮かれてちよつと鈍っているのかもしれない。彼女の誕生日を知ったのがそもそも去年のことだし、その頃の彼女とはもう少しドライな関係性だったはずだ。

彼女が浮かれきってることって、喜ぶべきなんだろうか。今はともかく、公共の場とかだと怪しいレベルの浮かれ具合だからな……可愛いからなんでもいいんだけど。

「……まあ、一緒に誕生日を祝うなんて初めてだからな。気持ちがかかるのは分かる」

「そういうことでは無いわ。私はあくまでみんなが折角企画してくれただから誘っているのであって私があなたに来て欲しいとかでは」

「分かった分かった、俺が悪かった」

急に早口で反論を始める友希那に苦笑を浮かべながらそう言うのと、彼女はその端正な顔をむつとさせて。

「……」

「……なんでそんな顔するの友希那」

「……私は来て欲しいのだけど」

「ごめん友希那我慢して」

主に俺の精神の安寧と周りからの目のために。

「……………しようがないわね」

言外にそう含みながら頭を下げて謝った俺に、友希那は残念そうにそう言った。

罪悪感がひしひしと響いてくるが、こればかりは我慢してもらうしか無い。

毎日のように顔を合わせているからこそ感覚が麻痺しがちではあ

るが、Roseliaのメンバーは全員とびきりの美人なわけで。そんな美人で同じ年の少女たちに男子高校生一人が混ざってパーティだなんて、ほとんど火薬庫みたいなもんだ。爆発でもしたら俺の平和な日常と社会的地位がお先真っ暗。ただでさえ周りの男からの目が痛いので、それに火を注ぐわけにはいかない。越えてはいけないラインをわきまえるくらいの理性は残っている……と、信じた。そうは言ってもまあ、そんなこと友希那もちゃんと分かっているだろう。だからこそわざわざ二人の時間を作ろうと、俺とライブハウスに来てくれているんだから。

「ま、あれだ。初めてって結構良いよな」

話題転換も兼ねてそう言うと、友希那は少し考えるような素振りを見せた。

そう、『初めて』。

ファーストキスしかり初恋しかり、みんな何かと初めてを大切にしたらがる。

それはやはり、新鮮で印象的だからだろうか。

俺にもよく分かる。

初めての恋人……友希那とかいや待て目の前にいるのに何考えてるんだ俺は。

相変わらずの彼女馬鹿な自分に頬の熱が上昇するのを感じる俺の眼前、顎に手を当てて考えるようなそぶりを見せる彼女は、

「……ええ、そうね。初めてのものは、いろいろと大切なもの」

そんなことを呟きながら、片手でそつと髪を——髪をポニーテールにまとめている髪飾りを撫でていた。

俺がちょうど一年前にプレゼントした、紫色の髪留めを。

10月26日。

彼女の誕生石に似せたアクセサリ。

それを、認識した途端。

「
思わず言葉を失う俺に、友希那はハツとした表情を見せ、それから耳を真っ赤にして俯き、

「……違うのよ」

「な、何が」

「プレゼントは、リサたちから貰ったことがあるの」

「そ、そうか」

そう、弁解のように告げられた言葉に、心臓の鼓動が早まる。

誕生日プレゼントを貰ったのは初めてではない。だからこの髪飾りも彼女の『初めて』を向ける対象では無い。

勘違いするな、と。友希那はそう言いたいのだろうか。

けれど、彼女は初めてと聞いてその髪飾りに触れた。

なら、彼女が想起した『初めて』の対象は。

その髪飾りは、彼女にとって一体何の、誰の象徴なのか。

「……………」

言葉を失い、ただ見つめるしかない俺に、頭を上げた彼女の揺れる視線がぶつかる。

「奏、人……………」

震える声で、彼女は俺の名を呼んだ。

「その……………」

「……………友希那」

言つて、どちらかともなくお互いに顔を近づけ合う。いつの間にか、俺と彼女の間にあった距離は手が触れ合うほどに短くなっていた。

俺の目に映るのは、切なげに目を潤ませてこちらに身を乗り出す友希那。

「……………」

「……………」

指を絡めあい、そして今にもその距離をゼロにまで縮めようとしたとした俺たちの体の動きは、

——ピピピピピッ。

そんな、電子音に遮られた。

「……………」

「……………」

無言になり、鼻の先にある俺から体を離してスマートフォン電源をつけた彼女は、その画面をじっと眺めてから、はあ、とため息を吐いた。

「だ、誰からだ？」

「……リサから。そろそろ準備ができたからおいでって」

仕方ないわね、と名残惜しそうな顔をしてから、友希那はふっ、と穏やかな笑みを見せた。

「そういうわけで、奏人」

「うん？」

彼女は、いつかの夕焼けを思い出すように、スマホの画面から顔をゆるりと振り向かせてから、

「一緒に行きましょうか、誕生日会」

「いや待てそれは行かないって話じゃん」

「いいじゃない、リサも『奏人も捕まえてきて』って言ってるわよ」

ほら、と言いながら見せられた彼女の携帯の液晶には、確かにリサからのそんなメッセージが映っていた。一応皆にも断つただけだな……全員諦めが悪いというか危機感が無いというか自覚が無いというか。

うーん、いいのかこれ。こうまで言ってくれている分みんなは不満には思わないだろうけども……流石に抵抗心が勝る。

「……それに、せっかく誕生日プレゼント買ってくれたんでしょ？」

「……気づいてたのか」

「当然よ。奏人からわざわざ誘ってきたのだし、気が付かないはずがないわ」

ふふん、とドヤ顔を浮かべながら髪をかきあげる友希那。いやまあ片手がこつちの手握ってるから全然様になってないんだけど。可愛いが勝ってるんだけど。

しかし……まあいいか、ここまで頼まれてるし、何より俺も行きたい。プレゼントも渡せてない。別に同級生に見られることなんてないからな、うん。きつと大丈夫だ。

「……そうだな。ちゃんと喜びそうなもの買ってきたから。楽しみに

してるよ?」

自分を納得させ、ドヤ顔のお返しとばかりに言ったこちらに、友希那はくすりと笑みを溢して。

「あなたからの物なら、何だって嬉しいわ」

「……ズルいなほんと」

思わぬカウンターアタックに肩を落とす。何ですかこの子。全然恋愛初心者じゃないですけど。めちやくちや良い子で訝してくるんですけど。いつの間にこんな……いや俺のせいかこれ。

「……なんか甘えるの上手くなったな、友希那」

「……あなたが甘えさせ上手なのよ」

「そうか?」

「ええ」

お互いに淡く微笑みながら、温かな空気を共有する。

似たもの同士だとかこういう空気が心地よい。叶うならこのままでも良いくらいだ。

とはいえ、

「……よし、そろそろ行くか。皆でちゃんと誕生日いしてやるからな」
せつかく皆が計画してくれた誕生日パーティーを無下にするわけにもいかない。

気持ちを切り替えるためそう言って歩こうとした俺は足を踏み出し、

「……………ん?」

そして、不意に訪れた淡い引力と、温かな手の感触を覚えた。

「……………えと、友希那?」

振り返って見た先、そこには俺の手をぎゅっと握りしめた友希那が。

足を動かさない歌姫に戸惑いつつもその顔を見つめる俺に、彼女はどこか照れくさそうな面持ちで口を開いて。

「その……あなたこそ誕生日、楽しみにしていてちょうだい」

そんな、魅力的な言葉をこちらに送ってきた。

「」

突然の言葉に反応する余裕もなく、思考に空白が生じる。

……まったく。そんなこと、言わなくても楽しみにするのに。相変わらず不器用というか生真面目というか。そういうところがどこまでだって愛おしい。

「……気の長い話だな」

一歩遅れて溢れたいじらしさに、胸を締め付けられながらそう言っ
て笑うと、彼女もまた笑みを浮かべた。

その空気に安らぎを感じながら、俺は彼女の小さな手のひらをそつ
と握り返し、

「何がいいかしら。猫用のグッズなんてどう？」

「おい俺に猫飼わせようとするな。せめてちゃんと生活の目処が立つ
てからな」

「……二人で暮らす時はいいわよね」

「……………」

「ちよつと、奏人？」

「……ごめん今抱きしめたい欲を抑えるのに忙しい」

「聞いたこともないわよそんな欲……」

「あつちよつとやめて友希那今くつつかないで」

「……………ふふ」

「やだこの子めつちや幸せそう」

夕闇に染まる町の中、彼女と二人目的地を目指し歩み進んだのだつ
た。

ちなみに余談ではあるが。

「あら、奏人……どうしたのかしら、どんよりとして」

「ああ、友希那。いや、ちよつとさつきな……」

「？」

「こう、なんか勘違いされたというか。弁解に手間取ったと言うか」

「よく分からないけど……大丈夫？熱がある……いえ、額の温度は私
とそんなに変わらないわね」

「いや友希那ここ外だから。なんならライブハウスの正面だから。こ
ういうスキンシップが怒られる原因なんだけどな……」

「?嫌なのかしら」

「……嫌じゃない自分があるのが悔しい」

翌日。

他のガールズバンドの少女たちに先日の様子を目撃され、次いでそ
の周りを気にしないやり取りに冷たい目を向けられることとなった
のだが、それはまた、別の話。

これは、そんな記録。

俺と彼女との穏やかな日々を切り取った、その端々。

白丁花

「リサ、こっち切り終わったけど」

「ありがと〜奏人、次はこっちお願いしていい？」

「はいよ」

12月25日。つまりはクリスマス。今井家のキッチンにて、俺は料理作りに精を出していた。

キッチンに並ぶ食材の数々は、これからパーティの主役を飾ることになる料理の材料だ。

「それにしたって多いな……」

俺が調理を開始してから十数分。目の前の材料の山の減りはどうにも遅いように思える。まあ六人分だもんな……こんなものかもしれない。

苦笑をこぼしながら、俺がまた野菜に手を伸ばそうとした辺りで。

「……………」

見慣れた容姿の美少女が、俺の隣に寄ってきて。

手伝ってくれるのか、と尋ねようとした俺は、しかしその言葉を発する前に凍りついた。

「……………友希那？」

俺の恋人——友希那は料理ができない。というか音楽以外に関しては基本的に不器用だ。プールに行った時のビーチバレーといい、出会った当初の勉強といい、無頓着が故に出来なかったのだろう。

とはいえ最近、泊まる時なんかは俺の家で手伝いをしてくれることもある……のだが、それは専ら料理の盛り付けだったり食卓の準備だったりで、調理という調理に手を出したことはない。

そんな彼女が、俺の隣で包丁を握っていた。

「友希那、なにを……ちよちよちよ友希那待つて待つて」

「何かしら」

「いやきよとんとしないで……何してんの今。紗夜たちと飾り付けしてたんじゃないのか？」

「飾りつけの作業は終わったの。何か手伝うことはないかしら」

「それはありがたいけどその包丁を一旦下ろしてくれ頼むから」
慌てながら言葉をかける俺に、友希那は淡々と答えつつ包丁から手を離さないままで。

よく見ると、その目には確かにやる気で満ちている。この子なりに何か手伝いたいってことなんだろう。まあ、うん……もう高校生だもんな、野菜を切るくらいなら大丈夫だろ多分。ちよつと不安ではあるが。

「この野菜を切ればいいの？」

「そうだけど……待って早まるなちゃんと教えるからその包丁を下ろして」

「……奏人が教えてくれるのかしら」

「悪いな、皆手離せないから……」

「別に不満なわけじゃないの。むしろ……」

「友希那？」

「……………」

あ、この子照れてる。

めちやくちや口もごもごさせてる。可愛い。

「……………っー」

あ、目があった。

ハツとして表情をいつものものに戻した。可愛い。

まあ基本的にはクールだもんな友希那。慌てて表情を取り繕うところも意外に子どもらしい彼女の魅力だ。

「な、何でもないわ。早く始めましょう」

「ああ、うん……ってだから待って待てまずその手が危ないから友希那。野菜切るときは手丸めないと」

「手を……っ？」

「ほら、猫みたいにさ」

「にゃーん……」

ほとんど聞こえないような小声で呟きながら笑う友希那。可愛い。

「……………」

「ど、どうしたの？顔が険しくなったけど……」

「い、いやなんでもない」

「本当に？大丈夫かしら」

「いやほんと、何も問題はない」

ただちよつと連続でクリティカルダメージをもらったから悶えそうになっただけで。

この子さつきからいちいち可愛いなんて思いつつ、友希那の背中にまわり、頬の熱を誤魔化すように後ろから彼女の手を握り猫の手の形に包む。

「……………」

「ほら、これが猫の手で……………」

「……………」

「友希那？」

「……………」

問いかけた俺に、しかし友希那は何も反応を示さず。

俺は遅れて、彼女の体躯を後ろから抱きしめる形になっていたことを自覚した。

「あ、悪い……………」

慌てて離れようとした俺は、しかし胸板に感じた質量によって止められてしまい。

「えっと……………友希那、離してくれないか。色々問題だから」

「……………別に問題ないわ」

「……………」

慌てるこちらを肩越しに細めた目で睨む友希那は、不満げに赤らんだ頬を膨らませながらそう呟いた。

小動物みたいなこと無意識でしてくるこの子……………場所関係なく抱きしめたくなるから控えめにして欲しい。

「いやまだ料理終わってないから……………」

「……………」

「ゆ、友希那は盛り付けしといてくれ。俺野菜切つとくから」

「……………」

「友希那、俺の肩は枕じゃないんだ……………」

言葉を出さずに、拗ねた顔のまま俺の肩に後頭部ををぐりぐりと押し付けることで不満の意を表明する友希那。

うーんこの甘えん坊が可愛い。最初はもつとこう、遠慮がちだったんだけどな……おかしいな……。まあ、うん、遠慮されるよりは甘えてくれる方が嬉しいっちゃ嬉しいんだけど。これが俺やこの子の家だったら思いつきり甘やかしてたね。危ない、俺にも自制はできた。

数日前、自制してくださいと苦笑いしながら言ってきた紗夜に向かって内心でガツツポーズをする俺を他所に、友希那は此処が今井家だと思いついたのか、はたまたひとしきり満足したのか。

「……ごめんなさい、浮かれていたわ」

そう言つて、名残惜しそうにようやく俺の腕を解放してくれた。

そういう顔されると甘やかしたくなるから困る。友希那には悪いが、流石に人の家でイチャつけるほど俺も彼女もメンタルは強くないからしょうがない。しょうがないんだが、心なしか罪悪感がある。

「……また今度な」

せめてものお詫びにとそつと言つたこちらに、友希那は手元の野菜から目を逸らさなのまま。

「期待しておくわね」

「……………」

「……何よ？」

「…………いや、また甘えてくるんだなって」

「今更でしょう？ほら、早く準備しましょう」

「…………ああ」

少し籠が外れていたのを自覚したのか早口で話す友希那。結局照れ臭くなつて慌てるんだからもう。

「じゃあまずは——」

その様子に微笑を浮かべ、それから俺は、ぎこちない空気を誤魔化すように料理のレクチャーを始めるのだった。

二週間前。

『クリスマスパーティーをしましょう！』

バンド練習の終わり際、その声をあげたのはあこだった。

『実はですね——』

彼女曰く。

ポピパの戸山さんが、パーティーで使う全てを自分たちで用意するという本格的なクリスマスパーティーを計画しているとの事。

『へえ、手が込んでるな』

『あこはそれが羨ましくって！Roseliaでも同じようにパーティーをしようと思ったんです！』

『私は……いいと思うよ……』

『私も賛成です。ただでさえ最近は練習を詰めていたのですし』

賛同と共にとんとん拍子で話が進んでいく中、

『良いんじゃない？私は賛成かなく。友希那は？』

『そうね、たまにはこういうのも良いかもしれないわ』

微笑みながらそう告げた友希那に、俺は彼女の成長をひしひしと感じて感極まっていたのだけれど。

『じゃ当日はみんな頑張つてな。おじちゃん一人で家にいるから……』

『？奏人さんも来るんですよね？』

『え？』

『『『『え？』』』』』

そこでまた、彼女たちとの認識の差を実感させられることとなり。

『最初から来るつもりがないのはどういふことですか』

『いや待って紗夜さんが怖い。だって女子会の方が良くない？俺要らなくない？』

『奏人さんもRoseliaの一員なんですから来てください！』

『友希那さんの誕生日パーティーと……同じです……』

『だからヤバいんだって燐子。俺あの後めっちゃ冷たい目向けられてたんだけど』

『うくん、来なかったらどうしようか、友希那？』

『いやリサさんそれ半分脅しなんですけど。もっとこう、交渉の方面で来て欲しいなっていう……』

『そうね……』

『友希那さん?』

『例えば、みんなに奏人が私に告白してきた時のことでも——』
『行きます』

『変わり身はや……』

『音無さんは扱いが簡単ですね』

『それはもう支配者側のセリフなんだよ紗夜』

『湊さんはどう思いますか?』

『間違つてはないわよね』

『あれ、扱いが……』

『でも奏人は私の頼みなら基本的に——』

『ちよつと友希那まだやるの?』

とまあ、俺の黒歴史もとい友希那甘やかしエピソードが赤裸々に語られかけるといふ事件も起きたのだが。

それはともかく、そんなやり取りの末、俺はRoseliaのクリスマスパーティーに参加することになった。

しかしまあ、やはり男1人というのはどこか申し訳なさもあるわけ
で。

「やっぱ女子会にすべきだろ……」

二人料理の盛り付けをしている中思わずそんなことを呟くと、友希那はじとりと目を細めてこちらを睨んできた。

「Roseliaでのパーティーならあなたも参加してちようだい」

「いや……こう、普通は女子だけがいいとか気にするもんじゃない
かってことなただけど」

「みんなが嫌がるとでも思っているの?」

「それは、まあ、うん」

「なら問題無いじゃない。あなたはもっと周りからの信頼を自覚した
方がいいわ」

「そういうもんかね……」

「ええ」

うーむ。いまいち納得いかないが、まあ彼女が言うのならその通りなのかもしれない。

なんとなく納得して、お互いの家で料理をする時のように二人並んでキッチンに立ちながら言葉を交わす。

「ていうか、今更だけど飾り付けだけじゃなく料理まで手伝って平気か？向こうで休んでもいいぞ」

「任せつきりは私が良くないの。それに、ほら」

言つて、微笑を浮かべながら移した視線の先には、リサとあこを手伝う紗夜と燐子の姿があった。

「みんな準備するから良いのだと聞いているし、私が何もしないのはおかしいわよ」

「まあ、たしかに……無理だけはすんなよっ」

「……あなたは少し過保護だと思うわ」

「大切だからな」

「……そう」

それだけ言つて、嬉しそうに笑みをこぼす友希那に俺もまた笑みを返し、それから味付けの終わったサーモン一切れを菜箸でつまみ差し出す。

「友希那、ちよつと味見して」

「いいわよ……あー……」

「美味しいか？」

「ん……そうね、味付けはちょうど良いと思うわ」

「よし、じゃあこれで……」

完成、と言葉を紡ごうとしたその時。

俺の視界の端に、ぽかんとした表情を浮かべるバンドメンバーの姿が映り。数秒遅れて、俺はここがリサの家だったことを思い出した。

「……………」

「……奏人？」

急にフリーズした俺を不自然に思ったのだろう、友希那は自分の背後に目を向けて、

「っ……………」

彼女たちを認識した途端、俺と同じく事態を把握してぽんつと顔を赤く染めた。

……………これ今思いつきりハグしたら気絶したりするのかな。いやまあしないんだけど。案外この子普通に受け入れてきそうだし、なんか友希那には一緒になってどろどろしていきそうな危うさがある……………まあ何より俺の心臓が先にダメになるんだが。

「えつとく、奏人……………」

「あ、いや、違う。違うんだってリサ。家だところやって料理してたからその癖が出ただけで」

「……………家だと料理中に湊さんに食べさせているということですか？」

「まあ、そうだけど……………」

「……………」

「……………いやあの、すいません」

沈黙が漂う雰囲気になえられず、呆れ半分驚き半分の表情を浮かべる彼女たちに頭を下げて謝る。

「じゃ、じゃあアタシたちは料理運んでおくね」

「待て待てリサさんあなたの幼馴染が爆発しそうですけど」

「……………早めに終わらせてくださいね、音無さん」

「紗夜まで何？何を終わらせるの？」

「あこちゃん……………行くよ……………」

「ほえ……………」

「いやちよ、燐子まで待つてつてすごいあこがぼーつとして……………」

みんな羞恥でプルプルしてる友希那を置いてリビングへ行ってしまった……………いや当事者の俺に任せるってことなんだろうけど。羞恥で色々限界なのは俺も同じなんすよね……………」

「……………」

まあ確かに、最近ちよつと浮かれすぎていたような気もするけど。最近色ボケしてるってよく言われてるし。家と同じノリでやるのは失敗だったな……………これからは気をつけないと。

「友希那、そろそろ皆のところに……………」

言葉を続けようとしたところで、手に暖かな感触があった。

「……………」

「友希那?」

無言に問うた先、俺の隣に近づき指を絡めてきた彼女は、その耳まで真っ赤にさせながら上目遣いで言葉を紡ぎ。

「…………少しだけ、このままでもいいさせてちょうだい」

「…………あ、ああ」

「……………」

それきり黙って身体を寄せてくる彼女を見つめる。

何かいつも以上に声に余裕無かったな…………まあでも、うん、そうだ。俺だって友希那と変わらない。

恋愛初心者で、初心で、小さなスキンシップだって人前なら恥ずかしくて照れ臭くて、それで余裕が無いのは俺も同じだ。

それはきつと、これから先も変わることはない。

だから、二人で少しずつ歩幅を合わせる。ゆっくりと進んでいく。つくづく不器用な人間だなほんと…………お互いに。

「…………まあ、俺たちらしいっちゃらしいけど」

「……………」

苦笑いと共に放った言葉に、隣からの返事はない。その代わりとばかりに、こつんと肩に淡い衝撃が走った。

こちらの肩へと頭を預けてきて肯定を示す友希那は、俺と出会った日以降よく見せてくれるようになった穏やかな微笑を浮かべていて。

胸の中があたたかなもので満ちるのを感じながら、俺は彼女の手をぎゅつと握り返した。

それから俺たちは、クリスマスパーティーを存分に楽しんだ。

みんなで作った料理に舌鼓を打ったり、リサとあの作ったケーキを頬張ったり、ボードゲームではしゃいだり。

時間を忘れて楽しんでいる間に、とつくに日は暮れていた。

「楽しかったですね、友希那さん！」

「ええ、そうね」

夜、六人で言葉を紡ぎながら帰路につく。

笑顔を浮かべながらあこに頷いた友希那を横目に歩いていると、前を歩くりサが振り返って口を開いた。

「それにしても、ありがとね奏人。わざわざ着いてきてくれて。あこたちを送るだけなのにさ」

「まあな、女の子ばかりじゃ危ないし」

「意外ですね。てつきり湊さんがいるから着いてきたのだと思っ
ていました」

「いや違……くはないけどそれだけじゃないから。あれか？最近
ちよつと色ボケしてきたから信用が無くなったのか？」

「そんなことはないですよ」

「お、おお……ありがとな」

「いえ」

思いがけない即答に照れ臭くなりながら告げた返事に、紗夜はくす
りと笑みを浮かべ。

「あっ……」

「……？」

あれ、なんか表情が硬くなったような。

「紗夜？」

「いえ、何でもありません……あ、宇田川さんはしやぎすぎないでくださ
い」

急にそう言って、笑顔のままあこたちの方へ寄って行く紗夜。

え、なんだ急に。なんか苦笑いみたいな笑みになってたけど。俺変
なことしたかな……。

「……奏人」

「おお、友希那……」

「……」

「えっ何その顔は。怒ってるのか？」

「……別に、怒っていないわ」

「じゃあなんでそんなむすつとしてるのお前」

「随分と仲良さそうに話していたわね」

「いやまあ友人なんだからいいだろ」

「……紗夜も美人よね」

「ちよつと待って友希那勘違いしてるぞお前」

「……どうかしら」

むす、と顔を膨らませて俺を睨む友希那さん。やだ、この子すごい可愛い……面倒臭可愛い……。

しかしなるほど、紗夜はこの友希那を見て笑ってたのか。いや確かに拗ねてる友希那も可愛いけどこの誤解はちよつと良くない。

「紗夜とはそういうんじゃないから……だってほら、俺には友希那がいるし」

「……本当かしら」

「当たり前だろ。こうして手を握るのだって友希那だけなんだから」
「そう……」

華奢な手を取ってそう言えば、一応納得してくれたのか、友希那は軽くはにかんでみせた。

いや女の子としての自信なさすぎませんかねこの子……確かにRoseliaの面々は綺麗だし可愛らしいんだけども、友希那はその中でもとびきり可愛いんだけどな……あくまで彼氏視点だから当然なのかもだが。

とまあ、そんなことを考えながら歩いた矢先。

「あ……」

「雪……」

「ホワイトクリスマス、か」

「見て見て、クリスマスツリーが光ってる……！」

前を歩く彼女らの賑やかな声に釣られて上空を見れば、そこには確かに雪が舞っていた。

ホワイトクリスマス。

しんしんと降る白の結晶とクリスマスツリー、そしてライトアップされた街による幻想的な風景を見ながら、俺は友希那、と彼女の名前

を呼ぼうとして。

隣に視線を移し、そして何も言えなかった。
彼女は空を見ていなかった。

その瞳に、クリスマスツリーも映してはいなかった。
ただ、一箇所。

Rosealiaのメンバーが集う温かな空間だけを、友希那は微笑
ましそうに見つめていた。

その光景が、あまりにも輝かしかったから。

「……何かしら、奏人」

怪訝な目と共に放たれた言葉に、俺は何も返せなかった。

——友希那は変わった。

音楽だけを貫いてきた孤独の歌姫は、いつの間にか彼女らの気持ち
を理解できるまでに成長し、同時に大切に思えるようになっていた。

「ちよつと、奏人。大丈夫？」

「……あ、ああ」

「何かあった？」

「いや、ちよつとな」

未だ心配そうにする友希那をそう言ってなだめて、俺もまた彼女の
見ていたものを見つめる。

「りんりん、クリスマスツリーに雪が降ってるよ！」

「あ、あこちゃん……走り回ったら危ないよ……」

「まったく……。宇田川さん、白金さん、周りに迷惑ですよ」

「あはは。二人とも、気をつけてね」

友希那が大切に思う彼女らは、この貴重な日を存分に楽しんでい
る。

——良かったと、そう思った。

他人を理解しようとしなかった孤独の歌姫。

自分の音楽に疑問を抱いていた紫炎の薔薇。

その彼女が、今や同じバンドメンバーを大切に思えるようになった
こと。それだけである日友希那と出会えて良かったときえ思う。

……だから。

「……………」

だから、俺もまた彼女の支えになろう。
彼女が一人にならないように。

俺以外の前でも、穏やかな笑みを浮かべられるように。

滲んだ視界を拭き、溢れんばかりの想いを抑えてから、俺は隣に立つ彼女の手を握り問いかける。

「……いいクリスマスになったか？」

万感の思いを込めたこちらの言葉に、友希那は俺の手をぎゅつと握りなおして。

「……ええ。忘れられない日になったわ」

そう応えながら、慈しみの目を彼女たちに向けていた。やっぱりこう、どこか母性があるよなこの子……。なんだかんだで世話焼きなところといい、いい母親になりそうだな。

「……何、奏人。何か言いたそうだけど」

「ああ……いや、友希那はいい母親になりそうだなって思ったただけ」
「それはどうかしらね……一人娘なんて生まれた日には、あなたと一緒に甘やかしてそんな気もするけれど」
「……………」

「？急に黙り込んで、そんなに意外だったかしら。あなたは私に厳しいイメージでも持ってるの？」

「いや……俺も一緒なんだな、と」

「……奏人以外いるわけないでしょう」

「その、すまん……」

赤面と共にそう言った彼女を愛おしく思いながら、俺もまた頬の熱が上昇するのを自覚して言葉を紡ぐ。

「えつと……ありがとう、でいいのか？」

「なぜ疑問形なの」

「いやどう返すのが正解か分かんないから……」

「それは……たしかにそうかもしれないわ」

ふわりと微笑し、友希那はあくまで自然に俺に身を寄せてきた。

防寒具から覗く肌が赤く染まっているのがなんともまあ可愛らしい。

去年と変わった関係性に思わず顔が綻ぶ。

……そうだった。去年の雪も。

「……思い出って雪みたいだよな」

「急にどうしたの？」

「いや……去年も初雪は友希那と見たなって」

「そういえば、そうね」

そうだ。去年も、俺は彼女と雪を見た。

その関係は恋人関係ではなく、ただの音楽仲間としてだったけれど。

「だから、雪みたいだって」

「……確かに。雪も思い出も、降り積もって、なかなか消えてくれないもの」

「まあそういうことだ……これから、もっと降り積もらせないとな」

「……ええ」

思い出が、溶けて消えてしまわないくらい。多くの思い出を残そう。

「目指すは永久凍土だ」

「……ロシアにでも引つ越すの？」

「そんな極端な……まあ確かに永久凍土だけでも」

永遠はないと分かっている。それは、俺も彼女も理解している。

それでもきつと願うところは同じだ。

「来年のクリスマスもこうして迎えられるといいな」

「来年もホワイトクリスマスなんて考えにくいけれど」

「いやそうだけどな……そういうことじゃなくて」

「私と皆と一緒に、ということでしょう？」

「……お見通しか」

笑みをこぼす友希那にため息混じりでそう言って、空を見上げる。

いつかは、こういうことも格好良く言えるのだろうか。なんとも決まりが悪いな、と一人項垂れている俺を他所に、友希那は俺の手に指

を絡め、

「……奏人」

「何だ？」

「これからもずっと、あなたと」

降りしきる雪を邪魔しないような、そんな静かな声で言う友希那に
頷く。

「……ああ、勿論」

遅れて返事をしてから、俺もまた彼女の手を握りなおして。

「メリー・クリスマス」

これからも彼女と共に在れるようにと、雪降る聖夜に、ただそう
願った。

ポートルート

夏も終わりに差し掛かった頃。

沈み始めた日を尻目に、俺は一人街を歩いていた。

夏だというのにやや涼しげなこの時間帯は、街の中まばらに人が見られる。

「……」

その街並みを俯瞰しながら歩いていると、あるところで目が止まった。

『近くの神社で夏祭り！』という、なんとも時代錯誤ささえ感じるよ
うな、ありふれたチラシ。普段は気にも留めないはずだったんだが、
今日はこれが目的だ。俺も彼女も、こういうのをちゃんと楽しめるタ
イプの人間なのかどうかは分からないんだけど。

「……大丈夫かな、友希那」

なんとなく、不安になる。

家まで迎えに行く、とは言っているからそこまでは大丈夫だとし
て、心配しているのは合流した後のことだ。

あの歌姫は夏祭り特有の人混みだったり雰囲気だったり熱気は苦
手なタイプ……みたいなイメージがある。

それに加えて、今回の夏祭りを勧めてきたリサの意味深な笑み。

『友希那の服、楽しみにしててね』

「はあ……」

思い出すだけで、なんというか信頼が重い。

俺としても友希那と出かけるのは嬉しいんだが、その友希那が楽し
めなかったら本末転倒もいいところだ。それを俺と同様に理解して
いる彼女のメッセージは、つまり『友希那は任せたから一緒に楽しんで
きてね』という意図に他ならない。

まあリサからも信頼をもらってる、というのは嬉しい。Rose
ia 結成したばっかの頃なんて警戒心丸出しだったし。

それはともかく。結局のところ、今想定してる不安は俺がどうか

できるレベルだ。そこは俺の甲斐性に期待することにしよう。

と、そこまで考えたところで顔を上げると、いつのまにか友希那の家の前まで着いていて――

「いらっしやい、奏人」

――

「奏人？」

「……………いや、ごめん」

――顔を上げれば。家の前に、一輪の花があった。

……………違う。とにかく、彼女は浴衣を着ていた。正直、予想はしていた。いたのだけれど、目の前で首を傾げる銀髪之歌姫と浴衣との親和性がここまでとは予想していなかった。

整えて結えた銀髪に映える黒色がベースの着物。浮かぶ花柄は彼女の静かな雰囲気を柔らかくしつつ、金色の瞳が全体を引き立たせる。そして、元の美しさを際立てる薄い化粧。

端的に言えば、めちやくちや似合っていた。

「……………ちよつと、何か言ったらどう？」

「超可愛い」

「……………そう」

即答した俺に、友希那は満足そうにはにかみ、硬くなっていた表情を柔らげた。

「友希那、ちよつと気張ってた？」

「わかるの？」

「なんか表情硬かったし……………ああ、いまはいつも通りだけど」

「……………そうね、緊張していたかも」

だって、と彼女が続ける。

草履と地面をこすらせながら、俺の頬に手を伸ばして。

「好きな人に特別な服を見せるのって、緊張するわよ？」

――

そんな殺し文句を、至近距離で放ってきた。

ふわり、と淡い笑みを浮かべているものの、その頬は赤い。慣れないことをして恥ずかしいのだろう。そもそもこんな振る舞いは彼女

らしくもない。それに気が付いてようやく、くらりとした理性が落ち着いた。

「無理すぎ、友希那」

笑いながら頬に触れる手を握って下ろすと、彼女ははあ、とため息を吐いた。

「なんでため息」

「……リサに教えてもらったのよ、こうすれば惚れ直すって」

「惚れ直すどころか倒れそうになったぞ」

「それなのに……」

「いやだから倒れそうになったって。綺麗すぎて」

「綺麗すぎて?」

「……綺麗で、可愛くて」

「ふふ」

俺の答えに満足したのか、友希那はくすりと笑いながら指を絡めてくる。

その動作に、胸が跳ねる。少しずつ、ではあるものの彼女はこういうことに慣れてきた。恋愛初心者の称号は返上するころかもしれない。

「なに?」

「いや、さっきのより今の笑いの方が好きだなあって」

「……さっきのは嫌いということ?」

「そうじゃなくて。もちろん可愛いんだけど」

「けど?」

「作った笑顔、みたいな」

「……よく分かったわね」

「え、凶星?」

「リサに教えられたのよ。『奏人をぞつこんにしたいでしょ』って」

「……あのなあ」

ぎゅ、と手を握る。その言葉に、どれだけ胸を打たれているのかわかっているのだろうか、この歌姫は。

金色の瞳を正面から見つめながら、万感の思いを込める——俺

が、どれだけ。

「——好きだよ、友希那」

息を呑む音。

耳までこれ以上ないほど赤らめた友希那は、くるりと振り向いて背中を向けた。

「友希那？」

「……いいから、はやく夏祭り行きましょう」

「……ああ、うん」

震えている声すらも愛おしい。

手を引かれるがまま彼女の横に並び、隣を歩く。

下駄の鳴る音と草履の擦れる音が重なっていくのが心地よい。

温もりは変わらない。離さないように、離れないように。硬くも緩くもなく、互いに引き寄せあうように手のひらを重ねたまま。

「そういえば、奏人」

「うん？」

「あなたも、浴衣似合ってるわ」

「……ほんと、そういうのずるい」

「あなただって言ってくるじゃない。さつきから」

「言うのはいいけど言われると照れるから」

「そう……」

「ちよまって友希那、なんで口を耳に近づけてきて」

「……これはリサだけじゃなくて、皆に言われたのだけど」

「？え、なに」

「私のもっと口にした方が良いらしいのよ、奏人みたいに」

「勘弁してくれ……」

「そもそも、私ばかり照れているのがおかしいわ。そうね、まずは——」

「友希那さん？」

夏祭りの開催地につく頃にはお互い真っ赤かもしれない、と慌てながら。

賑やかな声と共に、俺は友希那と歩みを進めたのだった。

きつかけは友希那たちからの苦言だった。

『奏人、少し無理をしすぎじゃない?』

『せっかくの夏なのに音楽しかしないのはどうなの?』

『音無さん、さすがに少し休んだ方がいいと思います』

『……あの、息抜きをしないと……』

『奏人さんっていつ寝てるんですか?』

とまあ、高校最後の夏休みのほとんどをRoseliaの補助としての活動に費やした俺は、それはもう心配をかけまくった。

今考えるとかなりヤバイ生活を送っていたように思う……思い出したくもない。オーバーワークなんて言葉も生ぬるいレベルだった。そんなこんなでRoseliaの面々に半ば強引に休暇を押し付けられ、夏祭りの話をまりなさんとリサから持ち掛けられ、友希那を誘った結果、こうして夏祭りまで足を運んでいる。

……色んな思惑が渦巻いてる気がするけど、それは置いておいて。夏祭りの会場の中では、家族連れや男女、年代くらいの数人グループがちらほらとそれぞれ思い思いに過ごしていた。

夏祭り、と言ってもそこまで仰々しいものではなく、小さな神社でのお祭りであり夏も終わりだからか、人混みはそこまで激しくない。しかし、自分自身がこんなところに来ること自体考えていなかった。それが今や浴衣まで着て想い人と一緒にいるのだから、なんとも不思議だと思う。

それと同じくらい、屋台で買った焼きそばをちびちびと食べている友希那、という絵面も不思議だ。

「で、どうだ?初めての屋台メシは」

「……美味しいわよ」

「そりゃよかった。ちよつと不安だったんだよな」

会場から少し外れた広場のベンチに座りながら。俺と隣り合う友

希那は顔を綻ばせた。

その傍らには、先ほど笑顔で手に入れた水ヨーヨーが転がっている。

「まだ食べるか？」

「ええ、いただくわ」

言つて、彼女は俺の手元にあるパックから焼きそばを口に運んだ。それを見ながら、俺もまた焼きそばを食す。濃いくらいのソースからの素朴な味わいがどこか懐かしい。こういう味でも口に合ったようによかった。

友希那は特別食にうるさいタイプではないし、どこかのギター担当ほど偏食でもない。

とはいえこういう場の食べ物を好むかどうかは分からなかったから。そんな安心を覚えてから口に残った香りを瓶ソーダで流し込んでいると、隣から控えめな視線を感じた。

「……」

「どうした友希那、やっぱり口に合わない？」

「いえ……」

「俺と同じ皿つてのが嫌とか」

「それはないわ」

「お、おお……」

食い気味に否定してきたな……嬉しいやら恥ずかしいやらで頬が熱い。

「じゃあどしたの」

「あまり、こういうことを言うべきではないと思うけれど」

「うん？」

「私、奏人の料理の方が好きだと思って」

「……………」

「……………なによ」

「いや……………この後家寄ってから帰るか。なんかリクエストあるか？」

「そうね……………」

箸を片手にふむ、と顎に手を当てる友希那。

その姿はあくまで自然体だ。……なんだろうな、この俺だけ照れてる感じは。この歌姫無敵か？

ぽかぽかとした温かさを紛らわせるようにスマホを構えると、顔を上げた友希那とぼちりと目が合った。

「……写真撮っていいか？」

「聞かなくても撮っていいわよ……そういえば、改めて見てどうかしら」

「いや、ほんとに綺麗。友希那の浴衣姿なんて初めて見たってのもあるけど」

「私もあまり着ないものね。それに、この浴衣は新しいものだから」

「え、これ買ったの？」

「そうだけれど……変？」

「めちやくちや似合ってる。そうじゃ無くて、もしかして初お披露目？」

「ええ」

「……なんていうか、初お披露目が今日で良かったのか？」

「今日だから、良かったの」

「……それはさあ、ずるくないか」

「結構頑張ったわよ」

「むやみに言うなよ、そういうの」

「相手は選んでるわ」

「一言一句が全部ずるいの、ずるすぎ」

頬の内側を甘く噛んで、蕩けそうな表情を押し止めながら携帯の液晶を叩く。

パシヤリ、という軽快な音と共に、浴衣姿で仄かに笑う友希那が写真に収まった。

「……………」

「どうしたの？奏人」

「いや、写真が綺麗すぎてびびった。大丈夫かなこれ。皆に見せたらすごいことになるぞ」

「どんな写真よ……」

「ほら」

写真を映す液晶を彼女に向ける。

友希那はじつと写真を見つめてから、瞳を細くして、

「やめましょう」

「なにを」

「リサや紗夜たちに見せるのを、よ」

「なんで」

「なんでも」

「ええ……」

わかった？と念押ししてくる友希那に困惑しながら、俺も写真に目を落とす。

自分で言うのもなんだけど、被写体が良いおかげで写真はほとんど完璧だ。背景の夏祭りから漏れる夕日色の光も、友希那によく似合う浴衣も、彼女が幸せそうに溢す笑顔も。これ以上に上手く撮れた写真は無いくらい。

見せたがらない理由が分からないんだけど……。

「何がダメなの、これ」

「……これ、私奏人を見てるわよね」

「？まあ、そうだな」

「つまり」

「つまり？」

「この顔は、奏人だけに向けている笑顔だから」

「……見せないの、それは」

「見せられないわ」

「そっか……」

やばい。

今日の友希那、いちいち悶えることを平気で言ってきてずっと顔が熱い。

「じゃあ、俺の中だけで大切にしろ」

「そうしてちょうだい」

「……なんかさ、こうやって写真を改めて撮るってのも久しぶりだよ

な」

「そうね……いつの間にか、奏人と居ることは自然になっていったから」
「あー確かに。そういう理由か。確かに昔は写真少しは撮ってたな」
「初めて撮ったときも奏人からだったわよ」

「そうかも」

「あの時の写真は……」

「あ、これか？歌ってるけど表情硬いやつ」

「なに、その言い方……奏人もあるわよ、表情が硬いの」

「え、でも少しは柔らかい顔してると思うぞ」

「?どうして?」

「楽しかったから、あの時からずっと」

「………私も楽しかったわよ」

「そうか?あんなに『音楽以外は興味ない』って言ってたのに」

「あれは……!奏人だって、ほら、『湊さん』ってずっと固い呼び方で」

「いや友希那だって『音無さん』呼びだったろ」

奏人が、友希那だって、と昔話に花を咲かせる。

変なところでムキになるのは、俺と彼女の共通点の一つだった。

「いや、昔の友希那、笑顔なんてほとんど無かったからな……ほら、この猫とのオフショットくらい?」

「奏人も……この、一緒に新しいギターを選んだ時の写真くらいよ」

「その時の友希那、めちゃくちゃいい笑顔じゃん」

「でもほら、友希那の料理初挑戦の写真とか。すごい緊張してる」

「料理はしたことなかったのよ。奏人はカップラーメンだけで生活してた時期もあったし……」

「その節はご迷惑を……」

「このケーキとか、懐かしいわね」

「どれ?……ああ、友希那の誕生日に買ってきたやつ」

「届けに来たあなたをお父さんが捕まえて。彼氏だって勘違いしてた

のよ」

「あの時の友希那のお父さん怖かったな……」

「これも友希那いい顔じゃん」

「……この写真、いつの？」

「えっと、フェスの時のリサの隠し撮りだから……まだ付き合っていない頃、のはず」

「そうよね……？」

「……なんで手握ってんの俺たち。こんな浮かれてたっけ」

夏祭りの余韻は、いつのまにか互いの笑顔を見つける時間へと様変わりしていった。

写真を流して、思い出を追う。

時間が進むにつれ、笑顔が増えていた。

二人での写真が増えていた。

微笑む金色の瞳に、自分が写っていた。

それが、どうしようもなく嬉しかった。

「あ——これ、さっきの写真だ。もう追いついたのか」

「意外と時間がかかったわね。こんなに写真が残っているなんて思わなかったわ」

「どうだった？」

「……何がよ」

「友希那の変わり様を見て」

「——そう、ね」

目を見開いて、考える素振りを見せる友希那。

きつと彼女の頭の中では、今日まで歩んできた思い出がたくさん駆け回っているのだろう。

喜びもあった。後悔もあった。挫折もあった。

そうして途中で転ぶようなことがあったとしても。それでも、と強く前を向けるのが湊友希那という——俺が恋した少女なのだ。だからきつと、彼女は聞かせてくれる。その全てを乗り越えたような、そ

んな言葉を。

「写真より実物が目の前にいるのだから、そつちを見たらどう?」

「ちよつと待って」

考えるより先に口が動いた。

あれ? おかしいな、俺の想い人ってこんなに色ボケしてたっけか。

「なによ」

「なによじゃなくて。もつとこう、ふさわしい言葉とかがさ」

「——本当に、それだけよ」

ふわりと、淡い笑み。

俺の好きな、自然に漏れ出たような微笑み。

その表情に、胸の奥にある恋慕が溢れ出しそうになる。

何度も胸を撃ち抜かれたはずの笑顔に、俺は今も惚れ直している。

「私は変わった。奏人のおかげで。」

だから……あとは、これからも見ていてもらうだけ。思い出だけじゃなくて、この先変わっていく私を」

「……それは、いいな」

「あなた、昔自分で言ったこと覚えてるのかしら」

「いろんなこと言ってきたからなあ……」

「ずつと見ているって。たしか、そういう話だったでしょう?」

「ああ、言った」

「私と歩いて行きたい、とも」

「それも言ったな」

「だから、それを守って。」

今日みたいな日だけじゃなくて……ずつと。私はもう、Roseliaだけの湊友希那じゃない。あなたの隣にいる湊友希那は、きつとあなたが見てくれていてるだけでどこまでも行けるから」

「——もちろん、言われなくても」

顔を上げると、ちょうど風が吹き、隣の銀髪がなびいた。どこかの茂みから猫の鳴き声が聞こえる。

耳をすませば聞こえる虫の音が、秋のものに変わりつつある。唸るような暑さも、少しおさまってきた。

夏が終わるのだと、そう思った。

それだけで——夏が終わるというだけで、言いようのない寂しさがある。いや、今までは確かにあった。けれど、今は。

不意に。

パシヤリ、と聞き慣れた音が隣から聞こえた。

音の出どころを振り向くと、自慢げにドヤ顔を浮かべる友希那がスマホを構えていて。

「どうしたんだ、急に」

「私だけ撮ってもらうのも味気ないでしょう?」

「いや俺を撮ってもさあ」

「この横顔も、リサたちには見せないから」

「ああうん、めっちゃくちや緩まった顔してる自覚あるからそれはいいんだけど」

よっぱど嬉しいのか、友希那は微笑みを漏らしながら俺の写真を眺めている。

そう、今は。こうして隣に想い人がいるのだから。

寂しがつてなんて、いられない。

そう考えると、気が楽になった。

晩夏特有のからつとした空気を思い切り吸い込んで、吐く。

「吹っ切れたみたいね」

「気づいてたのか」

「それは、もちろんよ。奏人のことだから」

「そっか……ありがとな」

「ええ」

夏の終わり。景色の彩度が一段階落ちる頃。どこか切なさのある季節だろうと、俺の隣には世界一美しい花がある。そんな当たり前のことを、忘れかけていた。

ようやく合点がいった。

どこか焦っていた夏の日々。

やけにこちらを気遣ってくる友希那。

哀愁に息詰まるような錯覚。

その全ては、きつと。

「友希那は、俺がいなくてもきつと歩けるから」

「……そうかもしれないわ」

「だからまあ、焦ってたんだ。友希那を繋ぎとめたくて」

「勘違いだつて、分かったかしら」

「おかげさまで」

「そう。ならいいわ」

頷く友希那の表情は、どこか晴れやかだ。

「私は奏人と歩いていく。」

確かに一人でも歩いて行けるかもしれない。でも、一人でしか歩けないわけじゃない。二人でも、歩いて行けるわ」

「ああ」

「だから、奏人」

友希那が立ち上がって、こちらに手を差し伸べる。

その手を、迷いなく取って立ち上がった。

慣れない下駄と草履の感覚を、互いに支え合うように。

「焦る必要はないわ。」

もし何かあっても、奏人がしてくれたように、私が奏人の手を引くから」

「……俺、そんなに引いてきたっけ」

「数えきれないくらいは」

「ほんとか?」

「私が嘘をつくと思うの?」

「全然」

「そういうことよ」

「そういうことか」

そこまで言つて、お互いに笑いあう。

それだけで幸せなのは、我ながらちよろいというかベタ惚れというか。……本当に、ダメにされてる気がする。

俺の様子に安心したように浮かべる笑顔も、少し潤んでいる瞳も。

見ているだけで抱きしめたくなくなってくるの、だいぶ重症だな……。

「じゃ、友希那。改めて夏祭り行くか」

「これから?」

「そ、まだ焼きそばとヨーヨーだけだし」

「そうね……」

「もしかして、帰る時間だったりするのかな?」

「まだ大丈夫よ……そうね、行きましょう」

「ああ、ちよつと待って、友希那」

「なに?」

「せっかくだし、二人の写真撮ろう」

「……別にいいわよ」

微笑む友希那を愛おしく思いながら、スマホを構える。

彼女は今の自分を見てほしいと言ったが、それは思い出に残さなくていい、というわけではない。

これからもきつと、二人での日々をたくさん残していくのだろう。

これは、そのひと欠片。

「ほんとうに撮るの?」

「いつか見返したいだろ?」

「そうね、十年後あたりにでも」

「……まあ、そう」

「……ほら、はやく」

「ああうん、じゃあ」

「奏人、頭をもう少し寄せて」

「いやこれ以上だとぶつかって」

「こつちを向いて、首を傾けて」

「おかしいな、この角度ツーショットじゃなくない……? マウスとマウスにならない?」

「……」

無言でこちらをじっと見つめてくる友希那。

その瞳に吸い込まれそうになりながら、顔をそつと近づける。

「友希那」

「……なにかしら。人はいるけどそんなに――」

「好きだ」

「っ、急に――ん」

祭りの喧騒がずいぶんと遠くにあるように感じた。

永久にも思える一瞬に身を預ける。

胸板にかかる体温を抱きしめる。

愛おしさで溢れる唇で互いの体温を交換しながら、思う。

願わくば、どうか。

これからずっと、彼女との日々を残り続けられますように。

祝言

「それで、そのときリサが……待って奏人。この話ほんとうに楽しい？」

「うん？そりゃ。俺の知らない友希那の話はどんなのでも楽しいからなあ」

「……変わってるわね」

「ええ……」

「自分でも変わってるとは思わないのかしら」

今頃苦笑いを浮かべながらスマートフォンと向き合っているのだろうと当たりをつけつつ、私は電話の向こうの恋人に問いかけた。

時刻は深夜11時をとくに回った頃。作曲の話し合いにと始めた奏人との通話は、その主目的をすっかりと逆転させてからかれこれ2時間近く続いている。

「……そんなにか？」

「私とこんな時間まで電話する人なんて奏人以外いないわ」

「あー、それは変わってるって言うか？」

「見る目があった、ってことだと思っただよな」

「何をよ」

「ほら、好きになる人を」

「……」

「……なんか反応ないと不安なんだけど」

「……」

「友希那？友希那さん？」

「……なんでもないわ」

奏人に聞こえないよう、はあと息を吐いて熱い頬から意識を逸らした。軽口の応酬のような会話の中で突然好意を伝えてくるのには、いつまで経っても慣れそうにない。奏人にはそういうところがある。

「結局私が照れるのね……」

「え、なに？」

「別に。相変わらずもの好きだと思っただけよ」

「……嫌なら電話とかやめるけど」

「……嫌とは言っていないわ」

「ならまあ……ていうか確かにだいぶ遅くなってきたな」

「そうね、あともう少しで日付が変わりそう」

「そろそろ終わっとくか？明日もまあまあ早いし」

「……終わるの？」

「……いや、もう少し話すか」

「方向転換が早いわね」

「友希那がすごい寂しそうな声で言うから」

「もしかして、照れているのかしら」

「いや……まあ、照れてるけど。そう言う友希那だって、顔がにやけてる」

「声色だけで分かるわけ——」

そういえば奏人は分かるのだった、と言葉を止める。

自分で言うのもおかしい話だけれど、Roseliaを結成する前の取っ付きづらい性格の頃から私と一緒に数年歩いてきた彼のことだ。通話越しの声で表情を言い当ててるなんて簡単なことなのかもしれない。

皆に言わせれば、『惚気？』とどこか呆れられるのはよく分からないけれど。

「そういうえば分かるんだったな、って声」

「……占い師でも始めたら？」

「友希那専用の？」

「私専用の奏人って……もうとっくにそうじゃない」

「……」

「どうしたの？」

「……友希那ってたまにすごい殺し文句を言ってくるよな」

「あなた、今にやけてるわね」

「友希那も占い師？」

「私は奏人専用だわ」

「顔真っ赤にしなから言うなよ……」

そんなやり取りの後で少しの沈黙があつて、同時にふつと笑い声を漏らした。心地良い掛け合いに、ベッドに移動して枕に顔を埋めたい衝動が湧き出てくる。

「なんか友希那も慣れてきてお互いに真っ赤になるの多くないか？」

「もとはと言えばあなたが私を照れさせるから」

「ああうん、たしかに昔はそんなだった記憶がある」

「でしよう？」

「でも最近の友希那は素でこつち照れさせてくるからなあ……」

「え？」

「え？」

「強いて言うなら私も、の間違い」

「て言っても俺はそんなに——」

「奏人」

「はい」

「あなたはもつと自覚するべきだわ」

「……すいません」

「……一応言っておくけれど」

「うん？」

「恥ずかしいくらいがちようどいいのよ、きつと」

「友希那……」

「もしかしたら、あなただけ恥ずかしがるのが一番いいかもしれないわね」

「友希那？」

なんていう、どうでもいいやり取りの後で。

「あ」

「え」

前触れなく会話が止み、間の抜けた声が重なった。

「どうしたの？」

「ああ、えつと——友希那、誕生日おめでとう」

「……？」

不意打ちまがいに告げられた言葉の後、困惑とともにふと液晶の上部に視線を寄せれば、小さなアナログ時計は確かに0時00分を示していた。

それからややあつて、スマートフォン振動とともに皆からの「誕生日おめでとう」という旨のメッセージが届き始める。

なるほど、今日は10月26日……私の誕生日だったようだ。どうやら奏人との電話で、今日の日にはすっかり頭から抜け落ちていたらしい。

……まさかとは思うけれど。

「……奏人、これを言うために起きていたの？」

「半分くらいは。今年は一番最初に言いたかったからな」

「確かに、今までお母さんとリサより早かったのはあなたただけだわ。それで、あとの半分は？」

「いや、それ言わせるのか？」

「いいから」

「……友希那と話すの楽しかったから」

「……そう」

「喜んでもらえたようで何よりだ」

ああ、と返事にならない息が漏れた。

頬から伝わった熱がぽかぽかと体全体まで流れていくようで、胸が跳ねる。

誕生日の祝言なんて、幾度となく聞いてきた祝いの言葉ではあるけれど。彼から言うそれがこうも質量を伴うものになるとは思わなかった。

「奏人」

「うん？」

「……ありがとう」

「」

万感の思いを込めた感謝の言葉に、返ってきたのは沈黙で。

「?どうしたのかしら」

「なんて言うか……今の友希那の顔が見えないの、残念だなんて」

「どんな顔だと思うの？」

「今の友希那、すごい良い笑顔だと思うんだよな」

「その言葉、あなたにもそのまま返すわ」

言いながら、ふらふらとベッドに近づく。作曲の続きなんてまた今度でもいい。二人でやれば、どうせすぐにでも完成させられるのだから。

ベッドに体重を預けごろりとうつ伏せに寝転がったまま、顔を枕で支えるようにして液晶に映るアイコンと顔を向け合った。

「それで、どうして今年は一番最初にこだわったのかしら。去年までそんな素振り無かったのに」

「え、まあ……言わなきゃダメか？」

「ええ」

画面から、『あー』とも『うー』ともつかないうめき声が聞こえる。

普段からしつかりしてるくせに、妙なところで不器用な奏人のことだから、どう伝えるべきか躊躇っているのかしら。どう伝えられたって気にしないというのに。

「言い方に迷ってるの？」

「いや占い師はもういいから……ほんと、大した理由じゃなくて。最近忙しかっただろ？お互い音楽だけやるわけにもいかないし」

「高校生だものね」

「しかも3年生。まあ俺と友希那は会ってる方だけど、話す機会そのものは減ってたから。ここ最近みたいには会えない日も結構あって」

「それで？」

「……だから、まあ」

「なによ」

「ちゃんと伝えたくて。友希那が俺の特別だったこと。言葉だけじゃなくて、こういうのでも」

「……あなたって」

本当に、呆れるほど不器用な人だ。

だいたい、奏人は自分を客観的に見れていないのよ。私が笑えば、幸せそうに微笑みかけてくるところとか、言葉の端々に常に私を気遣

う様子を見せてくるところとか。

そういうことがあるから本当は常日頃からとつくに伝わっているのだけれど……私のために考えてくれたのには悪い気はしない。

「とりあえずそんなところ……なんだけど」

「……そう」

「明日はちゃんと顔合わせるから、またその時に」

「……そう」

「友希那同じ言葉しか喋れなくなってる？」

「……別に」

「とりあえず今日は終わっとくか」

「……そうね」

「返事のバリエーションが少なすぎる」

「それは奏人が——」

言いかけて、言葉を飲み込んだ。

私もこのまま奏人と話を続けてしまえば明日に響く——というより羞恥心で動けなくなるだろうことは分かっている。……分かっているけれど、もつと話していたいという矛盾もあるのが難しい。

「明日直接話そう、友希那」

無意識に口角が上がる。

私が欲しい言葉をいつもと変わらぬ調子で言ってくるのだから、まったものじゃない。どうしてこう、奏人は私の心の機微に聡いのかしら。

「そうね……」

「じゃ、おやすみ友希那。また明日……じゃなくて放課後に」

「……ええ、おやすみなさい」

無機質な通話時間だけの表示が画面に浮かんだのを確認してから、私は息を吐いた。ベッドの上で体の向きを変え天井を仰いでから、布団の中で足を小さくバタバタとさせる。そうでもしないと、いろいろな感情が渦巻いてどうにかなくなってしまいそう。

「……明日」

呟くように漏れた、自分でも驚くくらい、切なさや恋しさを含めた

声。

その声でようやく少しだけ……本当に少しだけ、嵐のような気持ちの昂りが落ち着いた。明日になれば。皆と奏人と、また話ができる。そう思うと自然に瞼が閉じられるのだから、自分のことながら分かりやすい。

無意識に口許に笑みが浮かぶのも仕方がない。これに関しては奏人が全面的に悪いのだから。

「また、明日」

明日なんて言おう、どんな顔で会おう、なんて思考はどこかへ行っってしまった。きつと会ってみれば、いつも通り。軽口を言い合って、たまに顔を赤くして……そんな幸福に身を任せられる。

ほどける意識。冴えていた目はもう閉じられて、眠りにつくまで数秒もない。満たされた気持ちのまま、私は睡魔に身を預けた。

「……奏人」

声質がずいぶんと柔らかくなったと思う。昔が特別尖っていたわけでもないのにそう感じるのは、彼女が成長なり変化なり、多くの人と関わる経験をしてきたからだろう。

「ねえ、奏人」

「うん？」

「本当に手伝わなくて良かったのかしら」

「いいから。今日くらい俺に全部任せてくれ」

「……いつもそうじゃないかしら」

「そんなことないぞ」

マンションの一室。二人用の食卓を挟んだ声にそう返すと、友希那は「そうかしら……」と呟いてむむ、と少し悩むような顔をした。

生真面目だなあ、こういうところ。律儀とも言うのかもしれない

が。思えば今まで友希那は甘えたことが多くなかったのかもしれない。

「何よ、こつちを見て」

「ああ、真面目だなんて」

「私が？」

「そ、友希那が。誕生日なんだから今日くらい甘えてればいいのに」
言って、小さな食卓を埋めるように並ぶ料理を皿によそう。

ややカロリーを抑えめにした料理の数々は、先ほどまで俺が作っていた友希那の誕生日のお祝いであり、彼女が作るのを手伝おうとしていたものでもある。

「ほい、これ取り分けといたから」

「……………」

「…………複雑な顔してるな。そんなに申し訳ないのか？」

「そうではないわ。ただ納得いかないだけ」

「じゃあ洗い物を一緒にするのはどうだ？ いろんなのを少しずつ作っちゃったからその分調理器具も多くて」

「ええ、もちろん」

ようやく聞こえたいつも通りの穏やかな声に微笑を浮かべてから、二人分の「いただきます」の音が重なった。

「改めて。友希那、誕生日おめでとう」

「…………そんなに繰り返し返さなくても」

「言い過ぎると薄っぺらく感じる？」

「…………別にそうは言っていないわ」

Roselia 御用達のパーティ会場…………つまるところリサの家は、今日は諸々の都合で会場にできなかつたらしい。そんなわけで、苦肉の策で友希那の誕生日パーティを後日に回したのが一週間ほど前のこと。

それはいい。いやリサは「当日じゃない…………」って凹んでたけど。皆慰めてたしそこは大丈夫。

で、問題は。

「ていうか友希那のお母さんたち、本当に大丈夫だったのか？」

「奏人と夕ご飯を食べる、と言ったら喜んで送り出してくれたわ」
「……………」

問題は、目の前でパスタを美味しそうに食べる彼女の、その両親だった。どうして誕生日に男と夕食なんてことを許したんだろうか。

「なに、その微妙な顔」

「いや…………ちよつと信頼が重いって言うか、それでいいのかと思わないでもないって言うか」

「誕生日はまた別の日にお祝いしてくれることになったって、私言っただでしょう」

「そうだけどそこじゃないだろ。せつかくの誕生日なのに俺のせいで友希那と過ごせないのは親として悲しいもんじゃないかって」

「随分お母さんたちのことを気にしてるわね」

「まあ、友希那の親御さんに対する印象は良くしておきたいし」

いやこれ改めて言うのと恥ずかしいな…………ああもうほら友希那も顔赤くしてるし。俺の方が恥ずかしいんですけど友希那さん。

そろそろ友希那の親御さんに、特にお父さんにちゃんと挨拶に行かないと…………。会うたびに嬉しいような寂しいような表情をされて気まずいんだよな。交際の報告自体は快く受け入れてくれたから、嫌われてるわけじゃないと信じている。

「…………今のところは大丈夫よ」

「…………そうだといいんだけどな」

「そもそも奏人の料理を食べたいって言い出したのは私だから、あなたが気にする必要はないわ」

「本当にこんなんでいいのか、誕生日プレゼント」

「だから、そう言っているでしょう」

む、と眉をひそめてこちらを見る友希那。

怒っているというより呆れているような表情に、どう言っただけものかと考える。

「誕生日プレゼント、めちやくちや悩んだんだよ。食器とか香水は割と出かけた先で買ったたりしてるし」

「リサから聞いたわ」

「…無難なアクセサリーは友希那も困るだろうし」

「紗夜から聞いたわ」

「…だから、何か友希那の好きなものにしようと思って」

「あこと燐子から聞いたわ」

「…それでまあ、今日一日友希那の希望を聞く、つてのをプレゼントにしたわけなんだけど」

「その希望があなたの家で夕ご飯を食べることよ」

「……………」

「どうしたの？」

「……ちよつと待つてほしい。」

「え、なんで俺の相談が全部友希那に筒抜けなんだ」

「別に皆から聞いたわけではないわ」

「マジ？」

「……皆から露骨に聞かれただけよ」

「それじゃん」

何してんだあの子たち。

いやまあ隠してくれとは言っていないしサプライズになったら嬉しい程度だから別にいいんだけど。友希那の観察眼がすごいのか、Roleiaメンバー全員友希那に甘いからか。いやどつちも旦那これ……。

「それにしてもよく分かったな」

「別に。勘とか、占いのようなものよ」

「昨日のことと言い、ずいぶん的中率の高い占いだ」

「そうね」

素っ気ない返事の割には浮かべている笑顔は満足げだ。言葉の響きほどなんとも思っていないわけではなく、少なからず嬉しそうにしているあたりが可愛らしい。

「で、その誕生日プレゼントはどうだ？」

「美味しいわ……これ、初めて食べたけれど。新しく作ったのかしら」

「ああ、それ。初めて作ったんだけど美味しく出来てそうで何よりだ」
「相変わらず料理が上手ね」

「ここ数年で急に上手くなったとも言っな」

「そうなの？」

「その原因が首を傾げるなよ」

「? どういうこと？」

「ん? いやだから、友希那に美味しく食べて欲しいから練習したんだって、料理」

「……………そう」

かあつと頬を赤く染めながら、彼女は消え入るような声で相槌を打つ。さつきから恥ずかしがってる……………というよりは嬉しくなってるんだらうな。なにそれ可愛い。これだから友希那は可愛い。

「言ってなかったっけ、これ」

「ええ、初めて聞いたわ」

「えつと、まあそういうことなんだけど」

「だから味付けも私好みなのかしら。これも占い？」

「占いつて言うか……………味に関しては友希那好みでもあつて俺好みでもある、みたいな」

「？」

「あ……………友希那の為に作つてたら、いつの間にか俺の好みも友希那に近づいてたみたいで」

「……………そういうこと」

「……………そういうことです」

そう。クールな見た目からは想像が付きにくいけど、彼女は意外と食べさせがいがあるタイプだ。美味しいものを食べると、自然と溢れ出たような微笑を浮かべてくれる。

で、俺が惚れ直すまでがワンセット。ちようど今も。うーんこのベタ惚れ具合。皆に呆れられるのも分かる気がする。

「いや、自分でも驚いたんだよ。自分用の夕飯とか作るときも友希那好みの味付けになつてて」

「……………染められてるわね」

「俺が友希那に？」

「それもあるけれど……………」

そこまで言つて、友希那は照れたようにこちらに視線を向けてきて。

「私も奏人に、とも言えると思つて」

「恥ずかしげに放たれた言葉に押し黙る俺を他所に、友希那は「例えば」と言葉が続ける。

「奏人が私のことを分かってくれるように、私も奏人のことを分かるようになっていることか」

「……それ、昨日の電話のことか？」

「そうね……他にも、例えばこの料理も」

「これ？」

「……普段からここまでの料理を食べたいとは思わないけれど、誕生日の度に期待するくらいにはなるかもしれないわ」

「……何年くらいをご所望で？」

「少なくとも見積もってもあと50年ね」

「……長いな」

思つてた数倍長くて具体的な数字だつた……。50年か。計画的な貯金始めないとダメだこれ。あと本気で親御さんへの挨拶とかも……。

「いくらなんでも染められすぎじゃないか？」

「なら、奏人はその責任を取つてちょうだい」

「それはまあもちろん……ていうか俺も友希那に染められてるっていう話は」

「私は責任取れるわ」

「そんなドヤ顔で……」

うん、かつこいいいし可愛い。相も変わらず奇跡的なバランスで二つが両立してるのがすごい。友希那の魅力が存分に生かされている。惜しむらくはカメラを向けると照れが勝るところだ。可愛いから良いけど。

「……それにしても」

「？」

「友希那、いろんな顔するようになったよな」

言つて、自覚する。昔の友希那からは考えられない表情の豊かさだ。こういう表情を見る度彼女との積み重ねを自覚して嬉しくなるのは自意識過剰だろうか。

「私が昔と変わったということ?」

「ま、それもあるけど。俺の彼女、可愛い顔が多くて幸せだなつて」

「……………あなたのそういうところ、これからも慣れる気がしないわ」

「なんで勝手にダメージ受けてんだ……………」

顔を赤らめて並べられたカトラリー類に手を伸ばす友希那に苦笑を浮かべながら、俺は口を開く。

「俺もだけど、そのへんはゆっくり慣れていけば良いぞ。焦らないで」

「……………遅すぎるかもしれないわ」

「じゃ、たっぷり時間をかけてくれ」

「それでいいの?」

「数十年は一緒にいるつもりなんだろう?」

「……………」

「なら、慣れるくらい時間はあるだろうから」

「……………たしかに、そうね」

彼女はそう呟き、おもむろに視線を料理に向け。

「……………口、開けて」

「友希那?」

呆けた声を漏らした俺の口元に、パスタを巻きつけたフォークを差し出してきた。

頬をほんのりと赤く染めちやつて……………恥ずかしいならやらなきや良いのに。いやそこを指摘すると照れて拗ねてで機嫌を損ねるので飲み込む。あのモードの友希那、可愛いんだけど当人的には好きじゃないらしいし。

「ちよ近い近い鼻にソース付くから。無言で押し付けけないで」

「……………こういうことも、慣れていくんでしょう?」

「友希那、もしかして春からこういうことしようとしてる?」

「春?」

「あれ、やっぱり自意識過剰だったか。忘れてくれ」

「気になるわね」

「いや……てつきり春から一緒に暮らすもんだと思ってて」

「……」

友希那が斜め下に視線を逸らしたまま固まる。本気で気にしてなかったんだろうな……彼女にはどこか抜けてるといえるか、天然なところがある。

天然可愛い歌姫に癒されながら、差し出されたパスタを取り敢えず飲み込んだ俺は彼女に笑みを向けてから口を開き。

「ほら、こつちに友希那の私物増えてきただろ？」

「……そうね」

「まだちゃんと言えてなかったと思って」

「……」

「……その、高校を卒業した後一緒にここで暮らさないか。俺はできるだけ長く、友希那の隣にいたいから」

零れ出た言葉は用意していたものではなく、あまりにも不甲斐ない台詞で。俺の雰囲気につられてやや緊張気味だった友希那は、それを聞いてふつと顔を綻ばせた。

「構わないわ」

「え」

「何よ、その反応。奏人から言い出しといて」

「いや、もつと考える時間あるんじゃないかと」

「必要ないわ……答えはとつくに決まっていたから」

とんでもなくかつこいい台詞だ。危ない。めちやくちや照れてる顔で言っただけで即死だった……。なんとか致命傷で済んだ。

「……俺、結構緊張してたんだけど」

「その緊張は次の機会まで残しておけるわね」

「……給料3ヶ月分とセットで？」

「……私はいつでもいいわ」

「いや自分から言っただけで照れるのはどうなんですか友希那さん」

「別に照れているわけじゃ……そもそも、今更じゃない。月に2、3回は泊まっているから」

「まあそうなんだけど。けじめと、あとは意地だな。こういうこと、俺から言いたいし」

「次が遅かったら私から言うわ」

「新車のチキンレースかよ……」

そんな会話の後で、お互いぎこちなく顔を見合わせ。

「……ふふっ」

「……ははっ」

熱くなった頬からなんとか意識を逸らしながら、俺たちは残っている夕食に舌鼓を打っていた。

やや長めの夕食を終えた後。友希那の後に入浴を終えてから、ベランダへと向かう。

「誕生日おめでとう、友希那」

「今日で6回目よ、それ」

「言っとくけど本気で祝ってるから」

「分かっているわ」

華奢な背中に向かって声をかけると、友希那はその銀髪を揺らしてこちらを見た。俺もその隣に立ってから、彼女にならって空を見上げる。

人一人分の空間。手を伸ばさずとも少し寄せれば触れ合える程度の、一番心地よい距離感。それだけの余白が、俺と彼女の間にある。

「風呂あがってこんな時間に外出るの寒くないか？」

「平気よ、上着を羽織っているから」

「見間違いやなければ俺のパーカーに見えるんだけど、それ」

「……いけなかったかしら」

「……いやいいけど。今の友希那、違う理由であったかそうだな」

「……」

苦笑とともに放った声に、友希那はふい、と真っ赤な顔を背けるこ

とで返答する。どうやら凶星らしい。相変わらず照れ隠しの仕方が可愛いんだから。

微笑ましく思いながら、しばらく何も言わずに外の気温に身を任せた。時刻は10時すこし前。あと2時間ほどで、昨日の電話から丸1日が経過しようとしている。

「楽しかったか、今日」

「ええ」

少しの沈黙を埋めるように放った言葉にノータイムで相槌を返した友希那を横目に見て、思わず顔が綻んだ。可愛い。俺のパーカーに口元まで顔を埋めた歌姫が可愛い。

可憐で可愛らしいってだけですごいのに、歌声が綺麗でかっこいいとかいう魅力もあるのずるすぎるな……。最近は特にそのギャップにやられてる気がする。気を許して幸せそうに笑ってる友希那が一番可愛い。

「……何を考えているの」

「友希那がこの1年も幸せに過ごせますようにって」

「そこは幸せにする、くらい言わないのかしら」

「今ので後々に言う予定だった台詞の案が一つ潰されたんだけど」

「後々？」

「……まあ、次の機会というか」

「……そう」

くすり、と笑みをこぼしながらどちらかともなく余白を無くす。

恥ずかしさを隠すようにベランダの手すりを伝って手を伸ばせば、細い指がこちらと絡まった。そのまま手の甲を撫でられる。ひんやりとした指先がくすぐりたい。

「……楽しそうだな」

「ええ、もちろん」

「なら良かった」

「……奏人は私に甘すぎるわ」

「友希那は自分に厳しすぎるからな。これくらいがちょうどバランス取れてるんじゃないか」

「……それ、あなたがいなくなったときにバランス崩れるじゃない」
「いや、その心配はないだろ。ずっと一緒にいるつもりだし」
「……………」

返答はない。代わりにとばかりに、友希那は俺の腕に体重を預けてきた。

「……友希那？」

「……私の顔色は気にしないでちょうだい」

「いや無理があるだろ。そんな赤くしといて」

「奏人も心臓の音がすごいけれど」

「聞かなかったことには」

「できないわ」

「できないのか……」

「忘れるつもりもないから」

「そこまで言われたらお手上げ」

心臓の煩さに顔の熱を上げる俺の眼前で、友希那は満足そうな笑みを携えて夜空を見ていた。なんかチラチラこっち見てる気もするけど、そこはスルー。反応したらお互いに自制が効かなくなるから。

というか今日ずっと思ってたけど、友希那のギアのかかり方がおかしい。ナチュラルにスキンスリップしてくるし、いつもより距離が近い。おかげですつとドギマギさせられてる気がする。

「ん…………」

「眠いか、友希那」

「……そうね、少しだけ」

「いや結構眠そうだな……取り敢えずベッドまで行こう」

「ふあ…………ええ」

声がふにゃふにゃで可愛らしいけど、こんなところで寝落ちされると風邪を引く。早めにベッドまで歩いてもらわないと。

「歩けるか？」

「難しいわ」

「友希那、なんで動かないの」

「……今日は私の誕生日よね」

「そうだけど」

「奏人からの誕生日プレゼントはまだ有効でしょうか？」

「まあ」

「……それなら、運んでちようだい」

「……恥ずかしくないか？」

「ちようどいいのよ」

「そういえばそうだったな」

変なギア入ってる友希那が強い……つよつよだ、つよつよ友希那だ。大丈夫かなこれ。抱っこまでしたら爆発しない？どっちも。

「えつと、じゃあ……ほら」

「……前？」

「え……もしかして背負うだけで良かったか？」

「いいえ、折角だから」

「折角って何」

俺も友希那のことと言えない色ボケっぷりだな、と苦笑しながら真っ赤な顔のまま腕の中に飛び込んできた歌姫を受け止め。

華奢な背中と膝裏を支えて彼女を抱え上げた俺は、しかし突如首に腕を回されぐいっと引つ張られた。

「……ち、近くないですか、友希那さん」

「そうかしら」

「今日の友希那どうしちゃったんだ」

「正確には、どうかさせられたのよ」

「自業自得ってことか？」

「ええ。だから奏人には責任があるわ」

「嬉しい責任転嫁だな、それ」

「ふふ」

こつんと額を合わせる。

触れ合う髪先の感触がくすぐったい。額越しに感じる体温は、もうじき冬だというのにやけに暖かった。お互いに恋愛初心者だところいうことになる。いい加減慣れたい気もするけど……いややっぱいいか、照れてる友希那可愛いし。

「ありがとう、奏人。こうして誕生日をあなたと過ごせて良かった」
「こちらこそ。今年も祝えて良かった。まあお互い様ってことで」
「ええ」

合図もなく、最後の余白を埋めた。

お互い顔を真つ赤にしながら、不器用に恋心を募らせていく。想いを伝えてから1年以上経つ今でも俺は友希那に恋をし続けているのだから、我ながらどうしようもない。きつとまた彼女に魅せられる1年になるのだろうと、なんとなくそう思った。

ちよつとどころじやなくて

「……終わるなあ」

「何が？」

反応されることを想定していない独り言だった。イヤホンを耳に挿して、ギターの弦を弾いて、たまにコーヒーを喉に流しながらタブレットPCに指を滑らせる。そんな緩み切った状態からぽつりと漏れ出た言葉を、隣に座る歌姫は耳聡いことに拾ったらしい。

「いやほら、今年が」

「まだ大晦日まで数日あるけれど」

「今年はRoseliaの年末ライブがあるだろ？で、明日からはそれまで練習漬けなわけで。実質今日が大晦日みたいなもんだ」

「無理があるわ」

昼下がりの我が家にて、大学入学以降の同居人である友希那は小さくため息を吐いた。いかにもほとほと呆れたと言わんばかりの表情は、こちらの脈絡のない話題に小首を傾げてるようだった。

「急にそんなことを言って、どうしたの？」

ソファの背もたれにぐでんと身を投げ出してから、「いやあ」と気の抜けた言葉を紡ぐ。

「今年もいろいろあったなっと思うことがあって」

「たとえば？」

「友希那と暮らし始めたこととか、Roseliaのツアーライブとか、Roseliaのメディア出演とか」

「……そう考えると、確かにいろいろ変わったわね」

「だろ？」

Roseliaとしての活動の幅はもちろんのこと、彼女にとって帰る先まで今年が変わっている。激動の一年と形容しても何ら不思議じゃない。

ふむ、と考える友希那を横目に見る。なんというか、それこそ俺と彼女の距離感も変わっている気がする。慣れたのかどうか分かんない

いけど、パーソナルスペースがお互いに寄り始めてる、ような。たとえば、そう。

「……友希那」

「どうしたの」

「ちよつと、近くないか」

「……いけないかしら」

「どんとこい」

こうして友希那からこちらに寄りかかってくるアクションにも、もう慣れたものだ。いや嘘。全然慣れてない。触れ合うたびにドギマギして、結局お互い照れる羽目になるのを今年は何度も繰り返してる。この初心な感じはいつまで続くのやら。

「少し、考えてみたのだけれど」

「うん？」

「ほら、今年変わったことについて」

「ああ、そういえばそんな話だったな」

言って、腕の中にある華奢な体躯の柔らかさから意識を戻す。意識していると理性がすごい勢いで削られて危ない。この歌姫破壊力がすごい。油断していると撃ち抜かれるんだよな、心臓とか庇護欲とかもろもろ。

「学校生活も、Roseliaとしての活動も……あなたとの距離感も少しずつ変わってきているわ」

「そうだな」

「なら逆に、変わってないものもあると思わないかしら」

「なるほど？」

「例えば、その……」

「？」

顔を真っ赤に染めながら言いよどむ友希那。なんだろう、彼女にしては歯切れが悪い。あとその照れながら上目づかいでこっちを見てくるの、抱きしめたくなくなってくるから抑えてくれ。俺がダメ人間になりかねない。

「リサや紗夜、燐子もあこも、私の大切な友人だわ」

「ああ、変わんないってそういう……」

「ええ。きつと、皆との音楽が楽しいことも」

とても大切に、変わらないものよ。噛みしめるようにそう言って、友希那はそつと目を閉じた。

「それから、もちろん奏人も」

「俺？」

「当然よ」

やわらかく頷いたかと思うと、火照る頬にひんやりとした指先が触れる。

「あなたへの想いも、変わっていない。今年が終わってもきつと変わらないわ」

「……そりゃ、ありがたいな」

照れ隠しのつもりなのか、顔を見られたくないのか。真意はぼんやりとしか掴めないが、こつんとかかる肩への重みはここ何年かで慣れ親しんだものだ。

「変わらないといえば」

からかうように、笑うように。不意に咳かれた声色には、彼女のそれにしては珍しいことにそんな感情が滲んでいて。

「奏人の癖も変わらないわ」

「癖なんてあるか、俺」

「なくて七癖、という言葉を知らないの？」

「俺が知らなければないってことにしてもよくないか？」

「私が知っているわ」

「俺より？」

「そうね。あなたのことはよく分かっているから」

何年一緒にいると思ってるの？と言外にそう含ませた目線を向けられては、俺は何も返せない。素直に両手を小さく上げて降参の意を示せば、友希那はくすりとした微笑をこぼした。

「照れ隠しが下手ね」

「誰かさんに似てな」

「それで、さつきは何を見ていたのかしら」

「……バレてたか」

「奏人、隠し事があるときの癖は分かりやすいから」

「……………」

「急に黙り込んでどうしたの？」

「いや……俺も知らない癖を友希那が把握してるの、なんか嬉しいな、と」

「……………いいから」

可愛い。頬を真っ赤にして目線を逸らす歌姫が可愛い。こちらの腕を抱きしめてくるあからさまな照れ隠しに吹き出しそうになりながら、膝の高さほどのテーブルに視線を向ける。開かれたままのタブレットPCは、角度からして肝心の液晶は見えていないようだ。

……できれば教えたくなかったんだけどなあと思いつながら、俺は観念したように口を開いて。

「せっかく年末だからな。今年最後の買い物になんか買おうかと思つて」

「それで？」

「クリスマスプレゼントも用意できなかったし、せっかくならサプライズで何か贈ろうと」

「え？」

「化粧品とかは肌に合うかどうかもあるし、小物をいくつか買うのもいいけど。どうせなら一つ、それなりのものを、と思つて」

「待って」

「で、そういうしてるうちにもう年末間近まで差し迫つてると」

「ちよつと」

「そういうわけで」

友希那の趣味嗜好はある程度理解しているつもりではあるし、何を贈つても喜んでくれるだろうな、とは思ふ。とはいえ、できるだけ良いものを選びたい。彼女に少しでも感謝が伝わるように。そんな考えばかりが先行した結果――

「終わるなあ、今年」

「今ならその言葉の意味が分かるわ」

先ほどの焼き直しの台詞に、友希那は苦笑いを浮かべた。

「要するに、サプライズプレゼントを選ぶ期限が近づいていて焦っていたということね」

「いやほんと、面目ない……」

「別に怒っているわけではないわ。少し驚いたけれど」

「驚いた？」

「あまり聞かない気がするわ。年末に贈り物をするなんて」

「まあなんていうか、個人的に特別なんだよ、今年は」

「どうして？」

「友希那と年越しできるから」

去年は、というより今までは、当然ながら友希那は家族と年越しを過ごしていたはずで。今年もそうだろうと思っていたところに、彼女からこの家で新年を迎えると伝えられたのは記憶に新しい。

本来なら家族で過ごす日を俺と一緒にいてくれるというのは、それだけで。

「言っちゃえばそれだけなんだけどな、ちよつと嬉しいんだ。友希那と、お父さんお母さんには怒られるかもしれないけど」

「……確かに、少し」

「どうぞ」

「〴〵ちよつと〴〵嬉しい、なの？」

「怒るのそっちかよ」

「……それ以外ないと思うけれど」

「それ以外ないのか」

「復唱しないでちようだい」

「ちよつと恥ずかしくなってきたか？」

「……………〴〵ちよつと〴〵じゃない、かもしれないわ」

「なんだそれ」

会話が落ち着いてから、お互い嘖き出したように笑い合う。

中身の無い、なんでも無い会話にも案外乗ってくれるのは彼女の意外な魅力だ。

ひとしきり笑って落ち着いたところで、ソファから起き上がって夕

タブレットPCを手元に寄せた。

「候補はどんなものなのかしら」

「それが結構迷ってて。アクセサリーとか、美味しい焼き菓子の詰め合わせとか、大きめのクッションとか。そもそも消え物にするか残るものにするか」

友希那とともに液晶を覗きこむ。候補がいくつか載ってる通販ページをスクロールしても、これだと言えるものは見つからない。

「友希那、でっかい猫のぬいぐるみいるか？」

「……………置き場所がないわ」

「結構迷ってた…………」

「ここは思い切って家具を買い替えてみるのはどうかしら」

「家具…………言ってもそんな壊れそうなやつあったっけ」

「最近、ベッドの弾力性に問題があるような気がするわ」

「老朽化か？いやでもそんな極端な使い方してないような…………」

「あとは、そうね…………」

そう呟く横顔がやけに真剣で、思わず笑い声が漏れる。この子音楽以外でこんな真面目な顔つきになることあるんだ…………。

「すっかりサプライズ感なくなっただな」

「そこまで拘っていたの？」

「…………まあ、一応。友希那に手伝わせるのもなんか悪いし」

結局のところ、これに関しては俺のわがままでもある。一人でなんとかしたいという思いは常々あって、けれどなんだかんだで友希那の手を借りるのが多くなるのもまたいつものこと。

二人でこうして雑談に身を任せる時間が心地良くて、ついついそれに甘えてしまう。その結果、今まさにこんなことになっていて。

「なんていうか、俺の決断力不足に呆れてる」

「…………もしかして、結構本気で焦っていたのかしら」

「サプライズの内容を一緒に考えてるこの現状をサプライズにしようか、なんて考えてるくらいには」

「どこか奏人らしいわ」

みつともない俺の言葉に、友希那は淡い笑みを浮かべ。

「別に気にする必要はないわ。気持ちだけでも嬉しいと言えればいいかしら」

「いやでもなあ……」

「それに、結構楽しいから」

「楽しい、か」

「こうして二人で決めるのも、昔は無かったことよ」

「確かに」

言われてみればそうだ。サプライズ云々は関係なく、友希那と買い物をするのはそれだけで距離が縮まったのを実感できて楽しい。……うん。ならやっぱり、友希那に喜んでもらえるようなものを選びたい。ここはサプライズではなく、正面から。

「アクセサリーはさ、結構いいのを見つけたんだよ」

「なら、それは？」

「良いものってそれなりの値段するから。で、金額も金額だから勝手に買うのもなあと思って」

「別に、好きに買って構わないわ」

「いやだから……これから俺だけの家計じゃなくなるわけだし、今のうちから気をつけないとっていう」

「……どういう意味かしら」

「……わかってて聞いてるよな？」

少なくともそんな顔赤くしながら訊くことじゃない。絶対確信犯だこの子……どうすんだこれ。揶揄う手札なんて手に入れた友希那、俺耐えられる自信無いんだけど。

「ま、まあそんな感じでアクセサリーの候補はいくつかあるんだ」

「……たとえば？」

「んーと、ほら、これとか。軽めの腕時計。そこまで高くないけど良い感じの色じゃないか？」

「それもいいわね。でもこっちもどうかしら。シックな雰囲気ですきめ」

「あー、それもいいな。比較的手頃だし」

これはもう決まりだ。友希那からのお墨付きもあることだし、悩ん

だ分思い切って躊躇わず購入ボタンをクリック――

「――待って」

「友希那?」

「その、もう少し、考えてみても良いと思うわ」

液晶にタッチしかけた指が、華奢な両手にすっぽりと覆われる。ひんやりとした指先は、先ほどよりもほんのりと温もりを帯びていた。

「これはあくまで私の周りの子の価値観の話であって、私個人の好みではないのだけれど」

「保険が多い……」

「せっかくアクセサリーを買うのなら、もう少し意味を持つものにしても良いと思うわ。種類も豊富よ。例えば指輪とか、ネックレスとか、指輪とか、ブレスレットとか、指輪とか、髪飾りとか、指輪とか」

「なんかラインナップに偏りがあるような」

「……予行練習にもなるわ」

「……なるほど」

二人しておもむろに立ち上がってから、上着を羽織る。

「行くか、アクセサリー探し」

「……そうね」

とはいえ、何を購入するかはとづくに指し示されている訳なんだけど。お互いに分かっているくせに触れないのは、口に出した瞬間照れて収拾がつかなくなるからだ。いやわけわかんない。恋愛に強いのか弱いのかはつきりしてくれ。俺の心臓のために。

そうぼやいてから、俺は住み慣れたマンションのドアノブを握った。

我が家を後にして、肌寒い舗道を靴で叩く。年末だというのに、昼下がりの時間でも街にはあまり人が見られなかった。

「やっぱり年末ライブって練習の予定が詰まるよな」

「ええ。休日は今日1日だけだわ」

「スケジュールがハードすぎる……俺はともかく、友希那たちは無理しすぎるなよ」

「これでも楽な方よ。事務所との話し合いも奏人が大半を請け負って
くれているから」

「役に立ててるか?」

「当然よ」

自信を溢れさせた声色でそう断言してくれるのだから、これ以上に
安心することはない。

声だけじゃなくてこうして歩く佇まいまでかっこいいんだからこ
の子すごいよな……なんで私生活は緩んじやうだろう。いや友希
那に限らず Roselia だって基本的にはかっこいいのどこか抜
けてるといふか、年相応の微笑まじさがある。そういうところも魅力
なんだろう。

「ライブか……アクセサリーとか付けてもいいのか、ああいうのって」

「……その手があつたわ」

「どの手だ」

「指輪をして歌うのもパフォーマンスになるかもしれないわ」

「ならないだろ、絶対」

「……それか、奏人に付けておいてもらおうかしら」

「俺に付けて何になるんだ」

「売り切れのサインになるわ」

「そんなことしなくても、俺はとっくに友希那のものだって」

「……………」

頬を赤くしてはあ、と大きめのため息を吐く友希那。

大人びた顔の彼女にしては幼なげな表情に熱い頬を緩めていると、
彼女は目を細めながらこちらを睨んできて。

「そういう不意打ち、いつまで続ける気なのかしら」

「友希那がそういう反応してくれる間はずっとかもな」

「今年で終わりだわ」

「その自信はどこから来てるんだ……そもそも今年はもう終わるん
だって」

おかしいな、声色はさつきと同じなのにちつとも信憑性がない
……。そりやそうだ。俺も友希那も恋愛は不慣れというか、奥手とい

うか、こと恋路に関しては進歩が遅いわけで。初心な時期が長いのは当然と言えば当然のこと……これ言ったら皆に呆れられたんだよな。俺と友希那は結構本気でそう思ってるんだけど。ともかく、少なくとも見積もってもあと3年はこんな感じのやり取りが続く気がしている。

「……そう考えると、いつか当たり前になるのか」「なにが？」

「今年こそ初めてだけど、二人での年越しが。あと何年こういうやりとりで年を越せるのか、結構楽しみになってきた」

「……ずっと二人とは限らないわ」「えっ」

「奏人が考えているようなことじゃないから、そんな悲しそうな顔しないで。だから、その……何年かしたら増えるかもしれないでしょう、人数」

「……………」

ため息を吐くのは、今度はこちらの番だった。

なんなのこの子。いじらしい表情でそんなこと言ってくるの反則。これもあと3年以上続くの？大丈夫か俺。ちゃんと生計が安定するまで我慢できる気がしない。

「……そういうつもりで買った方がいいか、アクセサリー」

「別に、急ぐ必要はないわ。いつか、もうちよつと高価な贈り物をお願いするから」

「それ本当に“ちよつと”か？」

「あなた次第ね」

「……もう少し待ってもらえると」

「ライブはともかく、お正月に家に帰るときくらいはつけて行くわ」

「急に銀行までUターンする必要が出てきた」

「冗談よ」

いや半分くらい本気だった……声のトーンが真面目だった……。据え膳、なんていう脳裏に浮かんだ言葉を何とかしてかき消す。こういうのは勢い任せにしちゃいけない。だからまあ、間違っではないと思うんだけど。

「……待ちぼうけにさせちゃってるか」
「？」

きよとんと首を傾げた友希那は、それからかけられた言葉の真意に納得がいったのか朗らかに笑って。

「気にする必要はないわ。ゆっくりで」

「ゆっくりでいいのか」

「ずっと隣にいてくれるから」

「……それは、まあ」

淡くはにかむ笑顔に、ぼんやりとした返答を返す。

友希那のそばにずっといるつもりではあるものの、改めて彼女の口からそう聞くと信頼がこそばゆいというかなんというか。受け取る時のテンションが難しい。どう捉えるのが正解なんだろう、これ。

「私こそ、急かしているかしら」

「それこそ気にすんな」

「……そう？」

「歩調を合わせるのって、難しいからな」

「そうね」

「だからまあ、ゆっくりで」

ただでさえ俺たちは距離の測り方が不器用な部類の人間だ。普通よりも時間がかかっていることは自覚してるし、焦ってもうまくいかないことくらいは分かる。恋愛めちやくちや得意な友希那とか想像できないし。俺も然り。だからこうして、不器用に、不安定にくっついて歩幅を合わせていくしかない。

「それに」と、いたずらっぽく言葉を続ける。

「早いと皆になにか言われそうだし」

「たとえば？」

「付き合うのはあんなに遅かったのに、とか」

「ああ……」

容易に想像がついたのか、友希那は小さく笑みをこぼした。皆のことを思い浮かべて何よりも微笑まじさが先に出るあたり、彼女の Roselia への想いが見てとれる。

「なら、早すぎるのも考えものね」

「そういうこと」

「遅すぎるのは？」

「……待たせないよう善処します」

「期待しているわ」

何気ない動作で、ゆっくりと手を取る。少しだけ冷たい手は特に驚いた様子も見せず、小さな隙間を埋めるように指を絡めてきた。

「寒くないか、友希那」

「別に平気よ。奏人の手は温かいから」

「じゃあ友希那は心が温かいんだ」

「どういうこと？」

「そういう迷信。手が冷たい人は心が温かい、みたいなやつ」

「手が温かい人は？」

「もしかしたら俺は心が冷たいのかもしれない」

「その迷信は信じられないわ」

「即答」

「だって、奏人は温かいから」

「手が？それとも心が？」

「両方よ」

合わせ慣れた歩調に、時間の経過を実感する。軽口の応酬をしているうちに、つないだ手のひらはとつくに二人分の熱を共有するようになっていて。

「友希那の手も温かくなってきたな」

「嬉しそうね」

「そりゃ、寒がってほしいわけじゃないし」

「……手だけじゃなくて、全身を温かくできる方法があるのだけれど」

「……家じゃダメか？」

隣の歩調に合わせ足を止める。そつと視線を移すと、そこには心なしかむすつとした表情で抗議の念を送ってくる友希那が。

「別に、今さら照れるようなことでもないでしょ」

「いやそんな顔赤くしながら言われてもな」

「鏡でも見てみたら?」

「俺、そんな顔赤いか?」

「顔色というよりも、表情が嬉しそうだけれど」

「……わがまま友希那だ」

見透かされてる恥ずかしさから意識を逸らすように、ため息を一つ吐いてからこちらに寄せてきた体躯を抱き寄せる。頬の紅潮をそのままにした友希那は一瞬硬直し、それからすぐに全身を弛緩させた。まるで信頼の証とでも言いたげに体重を俺に預けながら、彼女はそれを見惚れるような顔をゆつくりと上げて。

「恥ずかしいのかしら」

「それはごっちの台詞。まあ、一応外だし。人通りがそんなになくても恥ずかしいものは恥ずかしい」

「どのくらい?」

「そうだなあ……」

友希那に甘えてもらえるのは嬉しさが大部分を占めるんだけど、確かに公衆の面前という若干の気恥ずかしさはある。ただ改めて考えてみると、この笑顔の前にその割合なんて微々たるものだ。

「まあ、ちよつとだけ」

「そのッちよつと、いつか無くなりそう?」

「今年で終わりだな」

「ほんとうかしら」

すぐに終わるわよ。どこか可笑しそうに、俺の腕の中で友希那は微笑をこぼしてみせた。

ブルースト・チョコレート

「ここは、さつき導出した公式を使って……」

「えっと、公式ってどんなのでしたっけ……!」

Roseliaが所属する音楽事務所のスタッフルームに到着するなり、俺の耳に届いたのは我らがドラマーの何とも情けない声。

俯く小さな彼女に声をかけるよりも先に、その隣で顔を上げたギタリストと目が合った。

「お疲れ様です、音無さん。早いですね」

「紗夜もお疲れ。あこの勉強見てんのか」

「そうなんです。二年生に上がってから、勉強超難しくて……」

「何やって……数学か」

はい、と力なく言って肩を落とすあこ。分かる。高校二年生の数学なんて俺だって見たくもない。

「奏人さん、数学得意でしたよね……?」

「……少しくらいなら教えられるから。さつきまで紗夜とやってた問題終わったら声かけてくれ」

「やった〜!ありがとうございます!」

うきうきと手元に視線を戻すあこを微笑ましく思いながら、彼女たちの向かいに腰を下ろす。

斜め前から「甘いです」なんて言葉が飛んできそうだったので、先んじてこちらから会話を振ってみることにした。

「にしても、呼ばれた時間ってもっと遅かったよな」

「はい。スタッフの方が先に通してくれました」

「なるほど。で、四ツ葉女子大組がまだと」

「確か、大学のガイドンスがあるという話でした」

「意外と長引いてるのかもな」

家を出る前の友希那も心底面倒くさそうな表情を浮かべていた。大学のガイドンスが楽しいだけで終わるわけないもん……俺もその気持ちはよく分かる。

特に友希那みたいに私生活を緩めているタイプだと、切り替えが大変なのかもしれない。

「音無さんは、なぜこんな早くから」

「ま、いろいろ。今度出す2ndアルバムの相談とかで事務所側と話すことがあつて」

「そういうことでしたか。ありがとうございます」

「気にしないでくれ。これくらいしか出来ないんだから」

Roseliaの補助といつても、俺にできるのは文字通りそのくらいだ。精々が曲作りを手伝って事務所との潤滑油になる程度。

そう笑うと、紗夜は「それでも」と淡く笑みを浮かべ。

「私たちはもちろん、特に湊さんの負担も減っているのは事実です」

「そうか？」

「はい。大切な人が落ち着ける場所になってくれるというのは、とても良いことだと思います」

噛み締めるように、大切そうに、彼女は言う。

その脳裏で、明るく爛漫な双子の妹が笑ってるだろうことは想像に難くなかった。

「友希那も、俺の家でくつろげてるならいいな」

「はい、きつと。……またずいぶんと嬉しそうですね」

「そりやな。一緒に暮らしてる以上不満が出ることもあるだろうし。今のところそれが無さそうだから」

「……そうですか」

呆れたようにため息を吐く紗夜を横目に、スコアを取り出して睨めつこを再開する。

なんだろう。なんか聞いたことを後悔してるような、でも嬉しそうな変な表情だったな……。

「奏人さん、今日は何の日か分かりますか？」

「え……まあバレンタインデー？」

「そうですー！」

ある程度きりがいいところまで問題を解き終わったのだろう、ぱつと顔を上げたあこの言葉にそう答えたところで、意外にも紗夜が食

ついでにきた。

「では、湊さんからバレンタインのチョコレートは頂いたきましたか」
「バレンタインチョコ？まあ、朝もらったけど」

「奏人さん、美味しかったですか？」

「ああ、美味かった。なんか回を重ねてることに腕を上げてる気がする」

「当たり前です。私も試食しましたから」

「……リサだけじゃなくて紗夜も付き合ったのか」

「白金さんも宇田川さんもいましたよ」

「全員かよ」

何やってんだ友希那。お父さんも試食で疲れたって言うたのに。彼女のお父さんからのタレコミも考えると、試作品のチョコレートは俺の想像よりも遥かに多いらしい。

愛されてる証左なのかなこれ……いやどうだ、友希那の完璧主義な気もする。前者だとしたら嬉しいんだけど。

「感想は伝えましたか」

「食べてすぐ言ったけど……なんだよ、その目。あこまで」

「友希那さんがすごく嬉しそうって、りんりんから連絡もらったんです！だから奏人さん何を言ったのかなって」

「今井さんからも同じようなメッセージが」

「え？いやそんな変なこと言ってないって。美味しかったってことと……」

「それと？」

「……やっぱ恥ずかしいからナシで」

「宇田川さん」

「はい、友希那さんに電話してみます！」

「分かった、分かったから待ってくれ」

完璧なコンビネーションにため息を吐く。最近になって実感したけど、この二人は結構気が合う。この前の担当変更の件なんかは特に顕著だ。姉妹がいるのがうまいこと波長を合わせてるのだろうか。

いやそうだとして、俺を追い詰めるのにそのコンビネーションを発

揮ってほしくはないんだけど。Roseliaのメンバーには結構そういうところがある。で、それが満更でもない自分がいるあたりうまいこと毒されてるような。

「それで、何を言ったんですか？」

「いやだから……その、幸せの味だって」

「幸せの味、ですか？」

「そ、幸せ」

観念したように言う俺に、疑問符を浮かべる二人。まあそういう反応になるよな。自分でもちよつとどうかと思うくらいだし。

「友希那って、毎年ちよつと甘めのミルクチョコレートくれるんだよ」
言って、思い出す。

友希那のことだから、いくらか理由はあるのだろうけど。彼女がバレンタインに贈ってくれるのは、ここ数年で市販のものから手作りには変わったものの一貫してミルクチョコレートだった。

「それがなぜ幸せの味に？」

「最初は気を遣ってくれてると思ってたんだよ。俺はコーヒーに砂糖入れることもあるし、甘いものもまあ好きだから」

「そうですね……」

「でもそのうち、友希那って苦めのチョコレートより甘いほうが好きだっつてことに気が付いて」

「それは、日頃の食生活などを見て？」

「まあ、そう。そのときは確証はなかったんだけど」

仮にそうだとしたら、友希那は自分の好きなものを毎年贈ってくれていたことになる。

彼女の本意をすべて読み取れているわけではないけれど。もしかしたら、なんて少しだけ考えられることもあって。

「自意識過剰かも、とは思いつつさ。自分の好きなもの、相手も好きだったら嬉しいから……なんて、友希那にもそういう考えがあったなら可愛いなって」

「……そういっ」

「だから、幸せの味。それに俺にとってのバレンタインといえはあの

味なんだよ。ここ数年ずっと貰ってるから」

今ではもうミルクチョコレートを食べるたびに友希那のことを連想するくらいだ。我ながら友希那のことが好きすぎるだろう。

「まあもう刷り込みみたいだけど」

「……………」

「……………」

「二人してなんだその顔」

「いえ……相変わらず湊さんのことが好きすぎる人だと呆れただけです」

「呆れるのかよ」

「でもでも、友希那さんも同じようなこと言っていました！奏人さんの料理は幸せになれる味だって！」

「……………そっか」

「見るからに浮かれないでください」

「いやそれは厳しくない？」

肩を落とす俺に、しかし紗夜は仄かな笑みを浮かべている。生暖かい目というか、微笑ましいものを見る目というか。一方のあこはあこで、にこにここと楽しそうな笑みを……なんか紗夜みたいな視線も混ぜてるな。なんだこれ。二歳下に向けられる視線じゃなくない？

「でも、それで浮かれるもんか友希那。今朝もちよつと照れたくらいだったぞ」

「奏人さん、それはよくないです！」

「宇田川さんの言う通りです」

照れ隠しで放った言葉に、一転して鋭い視線が向けられる。

「今井さんのキッチンをお借りしてチョコレートを作った時ですが、湊さんはかなり音無さんのことを気にかけてるように見えました」

「そうです！リサ姉の冷蔵庫の半分くらい試作品で埋まったんですよ」

「多すぎだろ」

「大げさではありません」

「マジっ？」

「はい」

至極当然、と言うように頷く二人。俺の記憶が正しければ、今井家の冷蔵庫はまあまああの広さがあつたはず……えあれが半分埋まったの？それはもうどういうこと？

「材料を買うときは『甘すぎるのは苦手だから』。作っているときは『ちよつと目を離せば無理をしがちだから』。何気ないことのように、そう言っていました」

「……それは」

「リサ姉にいつぱい教えてもらいながら、友希那さん一生懸命作つてましたから！」

「そうして贈つたものを『幸せの味』と言つてもらえたのなら、浮かれるのも無理はないかと」

「……」

「嬉しいですか？」

「……正直、かなり」

こういつた種明かしを、友希那は嫌うだろうか。……好みはしないだろうな。じゃああの照れは安心した反動つてのものあるのか。いや背景知っちゃうとことさら可愛く見えてくるの参るな……。

「ですから、音無さんも安心していいと思います」

「何に？」

「音無さんがチョコレートの味で湊さんと幸せを思い浮かべるのと同じようなことが、湊さんにもきつとあります」

「……それなら、いいな」

「きつとそうですよ！」

元気な声でそう励ましてくれるあこに笑みを返したあたりで、はたと気付く。

この会話だけ見たら微笑ましいだけで済んだものの、ロケーションが最悪だ。

すっかり忘れてたけど、ここ音楽事務所のスタッフルームだったよな。何回か顔合わせてる人もいるし、俺の話に聞き耳立ててる人もめちゃくちゃいるし。そこそこ大きな声で会話していたことも考える

と、俺の恋愛事情が赤裸々に広まっていくことは確実だ。……やだもう絶対生暖かい目で見られるじゃんこれ。今のところ恥ずかしさに悶えてないのは妙なプライドのおかげだ。

「……紗夜、いつから気づいてた？」

「初めから、でしょうか」

「なんで教えてくれなかったんだ」

「惚気話を外でするリスクを身をもって知るべきです」

「俺の羞恥心、だいぶ限界なんだけど」

「肝に銘じてください」

手で顔を覆う俺に、紗夜はぴしゃりと言い放つ。思えば高校生のころから紗夜には口酸っぱく注意されてたな……いやでも待てよ。

「今回のに限っては紗夜の誘導尋問じゃないか？」

「けれど、必要以上に詳らかに言ったのはあなたよ」

「それはそうなんだけど——って」

聞き覚えしかない声に振り返ると、そこには顔を真っ赤にしながらか鋭い視線を寄越す友希那が。

「お疲れ、ちよつと遅れちゃった」

「……遅くなってしまって、すみません」

「いえ。時間にはまだ余裕がありますから」

「なにに、あこは勉強見てもらってるの？」

「うん、数学の宿題なんだけど」

すぐそばで繰り広げられるなんとも仲睦まじい会話に、目の前の歌姫は参加しないようだった。

威厳たつぷりに立ち歌姫の名を冠するにふさわしい佇まいは、頬の赤色によってその雰囲気搔き消されていて。

「あの、友希那……」

「事務所に着くなり、スタッフの人に微笑ましい視線を向けられた私の恥ずかしさが分かっているのかしら」

「……すみません」

「スタッフルームで、大声で」

「……面目ない」

「……………」

頭を下げた俺にため息を一つ吐いてから、友希那は俺の手をゆつくりと取る。

「…………外、行きましょう」

「はい？」

「ちよつと、話があるから」

赤らめた頬はそのままに、視線を逸らしながら消え入るような声で彼女は言う。それが数年前から見られた照れ隠しの所作だということに気が付いて、思わず笑みがこぼれた。

容姿も大人らしくなって、幼さはその影を消しつつある。そのくせ、こういうところは変わってないんだから。

微笑ましさに了解、と小さく呟いてから、俺は友希那とともにスタツフルームを後にした。

……後ろで談笑に花を咲かせるメンバーの視線が呆れかえってることから、意識を逸らしながら。

「で、どうしたの友希那」

「自分が発言権を持つと思ってるのかしら」

「…………ないかも」

それは当然。時と場所、あと発言の内容。今のところ俺が許してもらえる要素は見つからない。

友希那に手を引かれるまま、音楽事務所の中でも人の気配を感じない場所を探す。

「…………ごめんな」

「別に、そこまで気を落とす必要はないわ」

「いやでも、あんまりいい気分じゃないだろ。自分のこと言いふらされるの」

「そんなふうには思っていないから」

声のトーンが下がったことを不審に思ったのか、友希那はその声に心配を滲ませながら足を止めた。

そのまま手を放してから、俺の前にゆるりと躍り出てくる。

「……嬉しかったわ」

「何が」

「紗夜も言っていたことよ」

「……ああ、幸せの味」

ええ、と頷く友希那。朝のことでも思い出してるのだろう、その端正な顔には微笑が浮かんでいる。

いやしかし綺麗だなこの子。銀髪から覗く控えめなピアスも大人っぽくて良い。大学生コーデは隣子やリサのアドバイスを重宝してるらしいんだけど、これは誰のセンスなんだろう。

「……何？」

「いや、嬉しかったんだなって。今朝は照れたきり全然口開いてくれなかったから、ちよつと安心した」

危ない。いつもの調子で見とれてた、なんて言えばさすがの友希那とはいえ怒らせかねなかった。再犯で現行犯逮捕だった。

「それは……」

「ああ、責めてるとかじゃなくて。ほんと、安心しただけで」

「別に、そのことを疑っているわけではないわ。ただ、今朝渡したものはリサにも手伝ってもらったものだったから」

「？リサと一緒に……別に毎年そうだっただろ。むしろそこまでしてくれるのが嬉しいんだから」

「そういうところも、知っているけど」

言って、何秒かの逡巡を経てから友希那は提げたショツパーから包みを差し出してきて。

「……これ。ここに来る前に一人で作ったチョコレートよ」

「一人？リサのアドバイス無しに？」

「そうだけど、そこまで驚くこと？」

「いや驚く驚く。友希那が一人でチョコレート作るなんて」

桜色を基調にしたラッピングに、控えめに小さなハートが添えられた意匠。おおよそ友希那らしからぬパッケージジョイスは、おそらくリサのアイデアだろう。

「……その包装は、リサが渡してきたものだから」

「ああうん、そうだろうとは思ってた」

「……」

「なにその微妙な顔」

「奏人のことだから、リサにからかい半分で渡されたと思っているでしょう」

「え、違うのか」

「間違っではないいけないけど」

「はあ、とため息を吐いてから、友希那はゆっくりと息を吸う。どうやら俺の発言に関してはどうも怒ってないらしいけど、この「仕方ないわね」と言いたげな表情はなんでだ。」

「……私がリサの要望を受け入れた意味を考えてほしいものね」

「えつと……?」

「本当にその気がないのなら断ってるわ」

ふいっと、赤くなった顔を逸らしながら彼女は言った。

「いちいち動きが可愛いなこの子。知り合って数年経っても変わらないところが魅力的なのはもうベタ惚れかもしれない。大丈夫だろうかこんなんです。」

「……珍しいな」

「……今日はバレンタインだから」

「なるほど?」

「お互いに顔を真っ赤にしてるせいで、会話という会話が続かない。いやだってあの友希那がハートマークの包装紙を贈ってくるなんて。バレンタインは背中を押してくれるから、なんて言っていたりリサの言葉は案外的を射ていたようだ。」

「……話を戻すわ」

「あ、はい」

「咳払いをしてから腕を組んでこちらを見てくる歌姫にそう返すと、彼女はリハの講評を思い出すような表情で口を開き。」

「奏人は幸せの味だと言ってくれたけど、それはリサとの共同制作なの」

「まあ、確かに」

「今回私だけで作ったチョコレートが、あなたの言う『幸せの味』かどうか」

「つまり、それが大事だと」

「ええ。これからのことも考えると」

「……これからのこと？」

「……だから、今からあなたに食べてもらおうわ」

「おい俺の質問」

俺の疑問をまるで無視して、友希那は包装から一口サイズのチョコレートを取り出した。シンプルな台形をベースにしたミルクチョコレートは、今朝貰ったものと特に遜色ないように見える。

「はい、口を開けて」

「いや友希那さん一人で食べれるから——んぐっ」

「さて、もう一度味の感想を聞かせてもらおうかしら」

「……無理矢理だな」

口の中でミルクチョコレートが溶ける。やけに溶けるのが早いのは、熱いくらいの頬とは関係ないに違いなかった。

「それで？」

「幸せだなんて感じの味」

「ずいぶん抽象的ね」

「もつと具体的な感想をご所望？」

「それはあなた次第よ」

「本当に美味しい。なんなら店のより美味しい」

「………無難な感想ね」

「嬉しそうに笑つといて何言ってるんだか」

少なくともそんな幸せな表情浮かべながら言うことじゃないような。これで結構顔に出るタイプだよな友希那。いやステージの上だと凛々しさ一色なんだけど。

「もう一個食べていいか」と聞けば、彼女は小さく「ええ」と言っただけ。今度は包装ごと渡してくる。

チョコレートを取り出して、一口。程よく調整されたミルクチョコレートの甘味は、やはりここ数年で俺の好みの味になったバランスそ

のものだった。

「美味しい、ありがとな」

「……」

「友希那、お世辞で言ったわけじゃないんだからそんな不安げに見ないでくれ」

「別に不安ではないわ。ただ、味の感想が一種類なのは」

「俺が一番好きな味」

「……………そう」

少しの沈黙があつて、友希那の口端が微かに動く。上がりそうな口角を彼女なりに取り繕うとしているのは明白だ。それなら、ここはもう一押し of 感想を。彼女が心の底から安心できるような。

「……………死ぬまで忘れられないな、この味は」

事実確認のつもりで呟いた言葉に、友希那は不意をつかれたように目を丸くした。

「大切な味だからさ、このチョコレート」

「……………そう」

「まあそうは言っても、あんまり心配してない」

「どうして?」

「だってほら、友希那が忘れさせてくれないだろ?」

「——ええ」

本心からそう思った。忘れたくない、とも。

その対象はきつとチョコレートだけではなくて。それと結び付けられた友希那や彼女との思い出も含まれている。

友希那も、俺のそんな内心を汲み取ったのだろう。

「それなら、奏人」

ようやく、安心したように彼女は笑った。

誇りと自信に溢れた表情を喜色で上塗りしたような。そんな笑顔が好きになったのは、いつのことだったか。ただ、これからチョコレートを食べるたびこの表情が脳裏に煌めくようになるのは確かだと思つた。

友希那がゆつくりと息を吸って、金色の瞳に俺を映す。

俺もまた正面から見つめ返せば、友希那はやや照れくさそうにはにかんでから。

「これからもずっと、あなたの幸せの味にしてみせるから——奏人も付き合ってもらおうわ」

彼女らしいひたむきな声で、そんなことを言つてのけた。

困った。この歌姫はいつの間にか、こんな台詞で俺の心をかき乱すことを覚えたらしい。

「……顔、真っ赤だけど」

「あなたもよ」

「いやほら、今日はバレンタインだから」

「バレンタインはそういう日だったかしら」

「そうそう。バレンタインデーならいろんなことができるからさ」

「……例えば？」

「……スキンシップ、とか」

「……そう」

納得したように呟くなり、友希那はゆつくりとこちらに歩みを寄せてくる。

これ、スタッフルームに戻ったら皆に絶対怒られるだろうな。でもまあしょうがない。これは友希那が可愛いのが悪い。

「……あと五分で時間になるけど」

「間に合わせるわ」

「ほんとかなあ……」

このモードの友希那は若干怪しい気がする。あと俺も。なんて、口には出さず。

スタッフルームで友希那の帰りを待っているだろう彼女たちへの言い訳を必死に考えながら、俺は腕の中の銀髪をそつと梳くのに集中することにした。